

(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要

紀要愛媛

第 4 号

国分台南斜面の採集資料		
-付 蓮光寺山第8地点の採集資料-	多田 仁	1~18
東宇和郡宇和町稲生出土の縄文土器	藤本清志	19~22
愛媛県出土埴輪の基礎的研究(4)		
-松山市・二つ塚古墳資料紹介および県内資料の製作手法観察-	山内英樹	23~34
砥部川流域の古墳における階層性について		
-古墳群概観-	岡田敏彦	35~52
湯築城跡の段階設定と遺構の変遷をめぐる諸問題	柴田圭子	53~66

2004

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター

刊行にあたって

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターでは、愛媛県内において埋蔵文化財の調査研究及び埋蔵文化財に対する保護思想の普及・啓発を目的に業務を進めております。

当センターの調査成果につきましては、調査報告書にまとめ刊行するとともに、調査の概要は、年報『愛比売』および『埋文えひめ』に掲載し、また発掘調査に伴う現地説明会での資料配付を行い、普及・啓発に努めております。

このたび、当センター職員の埋蔵文化財に関する日頃の研究成果をまとめた研究紀要『紀要愛媛』第4号を刊行することとなりました。この研究紀要が、皆様方の歴史や考古学の研究の上で、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今後とも、関係諸機関並びに関係者の皆様に、ご協力、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成16年3月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
理事長 野本 俊二

国分台南斜面の採集資料

一付 蓮光寺山第8地点の採集資料一

多田 仁

1 はじめに

国分台遺跡群はサヌカイト原産地を控えた大規模な原産地遺跡であり、国分台、朱雀台、蓮光寺山などの山系に遺物散布地が広がっている（竹岡1976）。また、ここでは古くから後期旧石器時代の遺物が確認・報告されており（川畑1959ほか）、近年では遺物散布地の集成によって約40地点の散布地が確認されている（山下1999）。ここに紹介する石器類は、2002年に国分台南斜面と蓮光寺山第8地点を訪れた際に確認されたもので、特に国分台南斜面については柏井光彦氏らや有本雅己氏による資料紹介が知られるのみであり（有本1987、柏井・吉朝・増田1977）、報告事例の希少性が考慮できる。

ここに採集遺物を紹介する国分台南斜面は、香川県綾歌郡国分寺町に所在する国分台遺跡群の南部に形成された斜面部である（第1図）。遺物の散布地は標高約80～180m、東西では約200mの範囲に広がり、地表面には多数のサヌカイト製石器が散布している状況であった。また、蓮光寺山第8地点でも国分台南斜面と同様な急傾斜面地で、石器類の散布が広範囲に確認できた。いずれも原産地遺跡としての性格を伺わせる遺物散布状況であった。

2 国分台南斜面の石器

ナイフ形石器（第2図1～6）

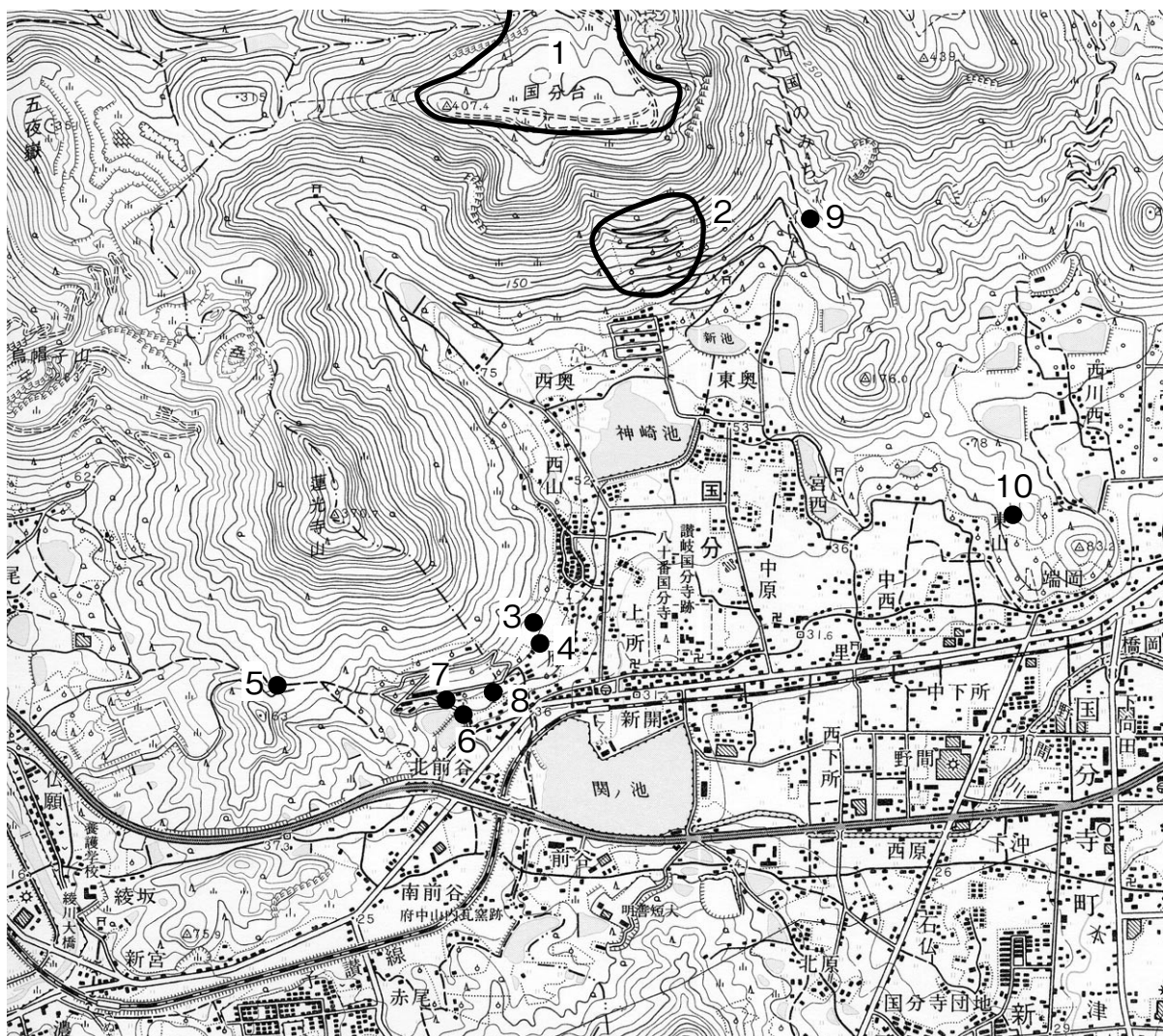
ナイフ形石器は6点図示した。1は翼状剥片を素材とした国府型ナイフ形石器、2・3・6が横長剥片を素材としたもの、4が不定形剥片を素材としたもの、5が縦長剥片を素材としたものである。1は1側縁加工となっているが、上端部には二次加工が施されて丸みを帯びた平面形状となる。横断面形は扁平な台形状となる。2は比較的薄手な剥片が素材で、1側縁加工となっている。表面中央部に大きく残される剥離痕は素材時のもので、素材時における主要剥離面の剥離方向とは逆方向のものである。横断面形は扁平な三角形状となる。3は1側縁加工のものである。表面に残る素材時の剥離痕は、2と同様に素材時の主要剥離面のそれと逆方向となる。横断面形は扁平な台形状となる。4は不定形剥片の1側部に、ブランディングが施されたものである。ブランディングはやや鋸歯状となる。また、裏面下辺にも僅かに二次加工が施されている。横断面形は扁平な台形状となる。5は左側部に礫面を残すもので、基部には素材時の打面が残されている。ブランディングは左側下半部に残されており、表裏両面側から加撃の行われたものである。横断面形は扁平な台形状となる。6は2側縁加工のもので、左側中間部から下半部にかけてと、右側下半部にブランディングが残されている。横断面形は長方形形状となる。

翼状剥片（第3図7～第4図15）

7～15は、瀬戸内技法による翼状剥片である。7～13は山形の打面形状となるもので、14・15は平坦面を広く残すものである。横断面形はすべて平行四辺形状となり、いずれも表面には下辺に並行する稜線を持つ。また、破損状況も考慮しなければならないが、13以外のものについてはその法量が類似しているようである。

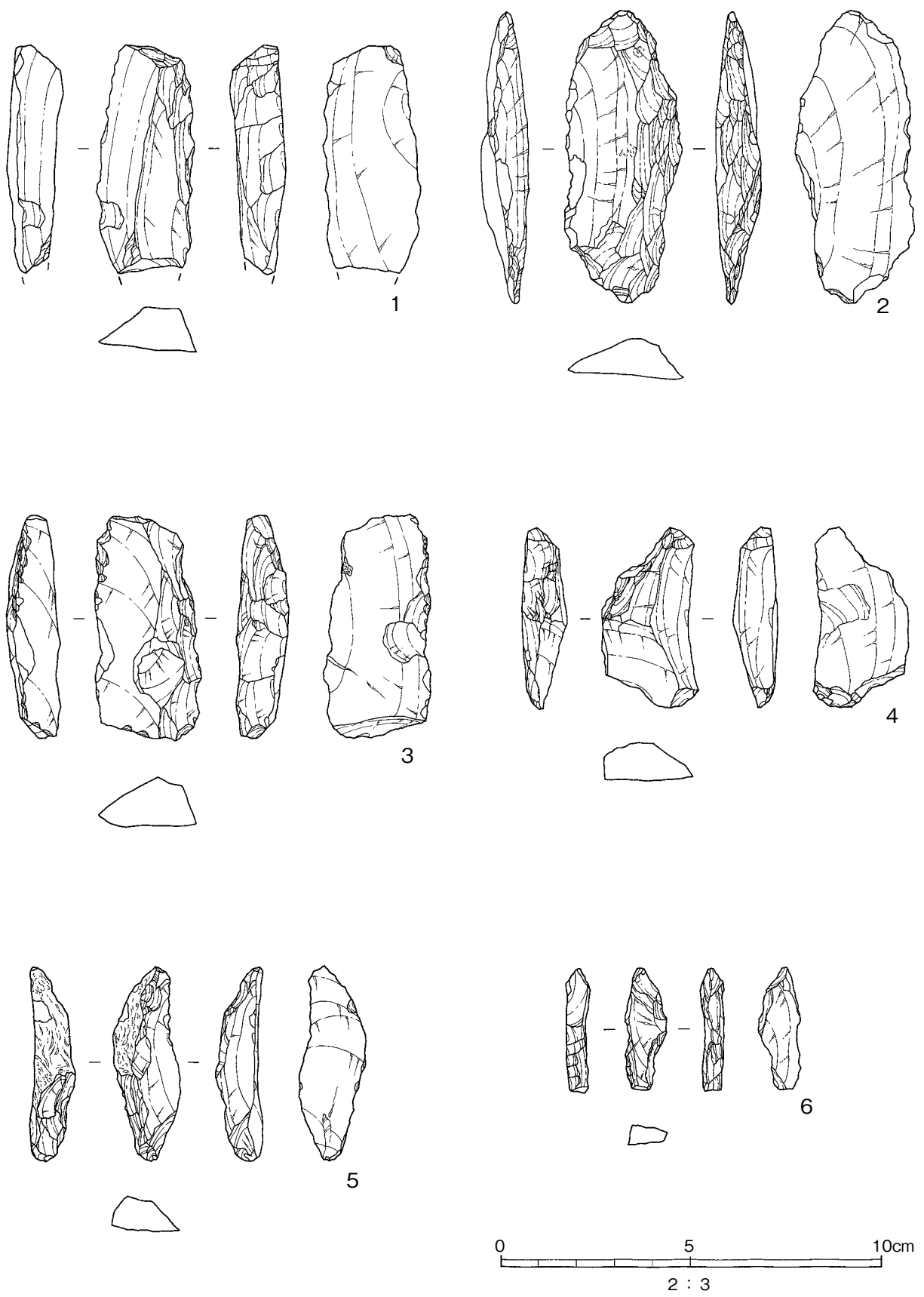
翼状剥片石核（第5図16～第7図21）

16～21は瀬戸内技法による翼状剥片石核である。16は打面部に大きく2枚の打面調整による剥離痕がみられ、作業面には2枚の剥片剥離痕が残されている。背部には素材時の分割面が残されている。17は打面部に大きく3枚の調整剥離痕と、礫面が残されている。作業面には1枚の剥片剥離痕がみられ、背部には素材時のエッジが残されている。18は右側部を欠損するもので、打面部に複数の打面調整痕と、ネガティブな剥離痕が大きく残されている。背部には素材時のエッジ

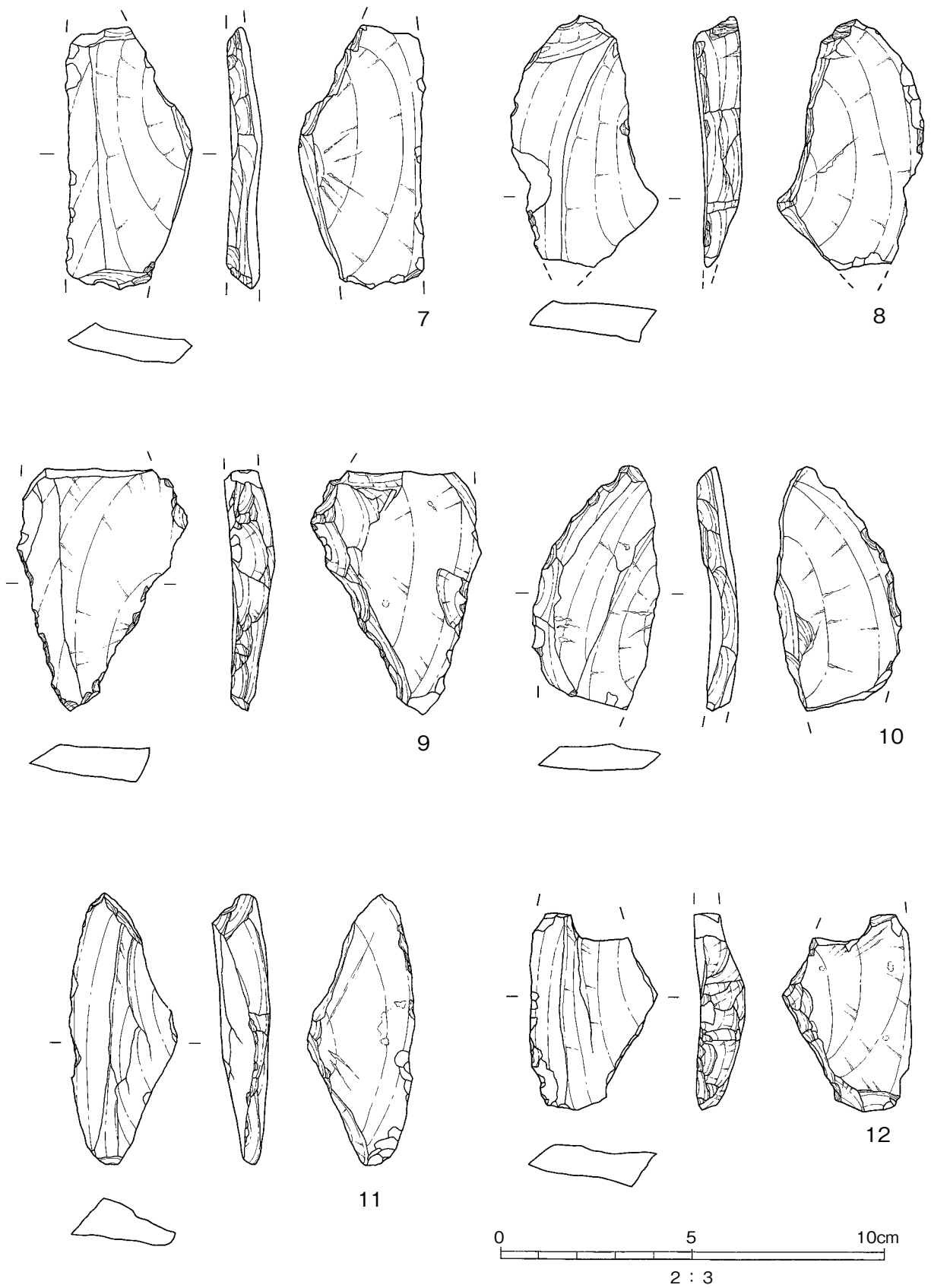


第1図 遺跡分布図（1：25,000）

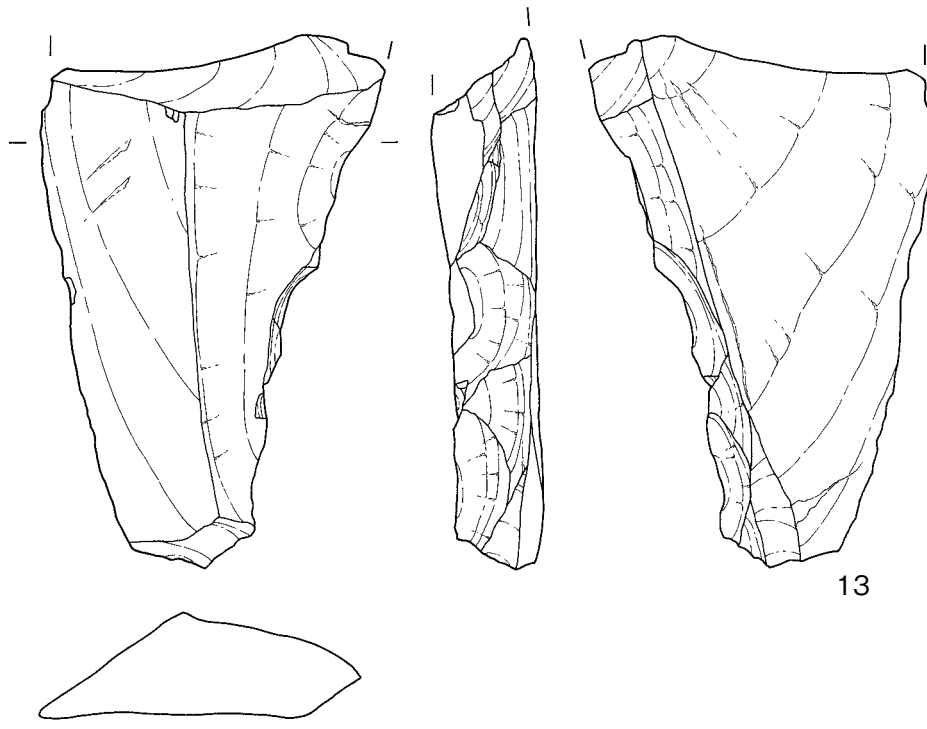
1. 国分台遺跡 2. 国分台南斜面 3. 蓮光寺山第1地点 4. 蓮光寺山第2地点 5. 蓮光寺山第5地点
6. 蓮光寺山第7地点 7. 蓮光寺山第8地点 8. 蓮光寺山第9地点 9. 猪尻山第1地点 10. 端岡山



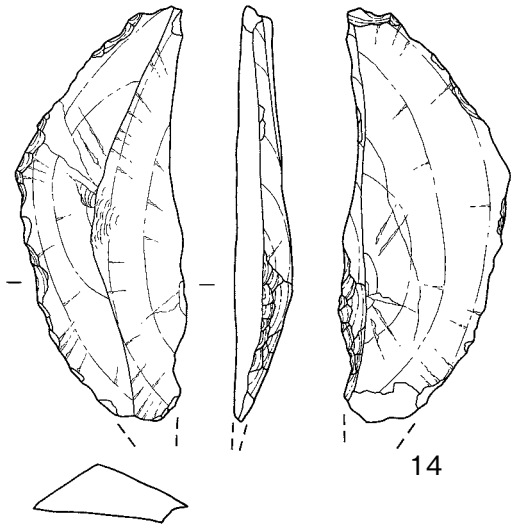
第2図 国分台南斜面の採集遺物（ナイフ形石器）



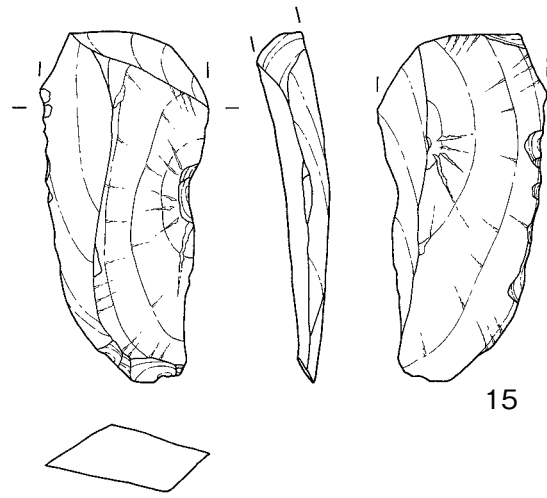
第3図 国分台南斜面の採集遺物（翼状剥片）



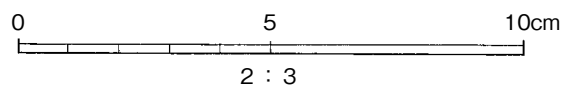
13



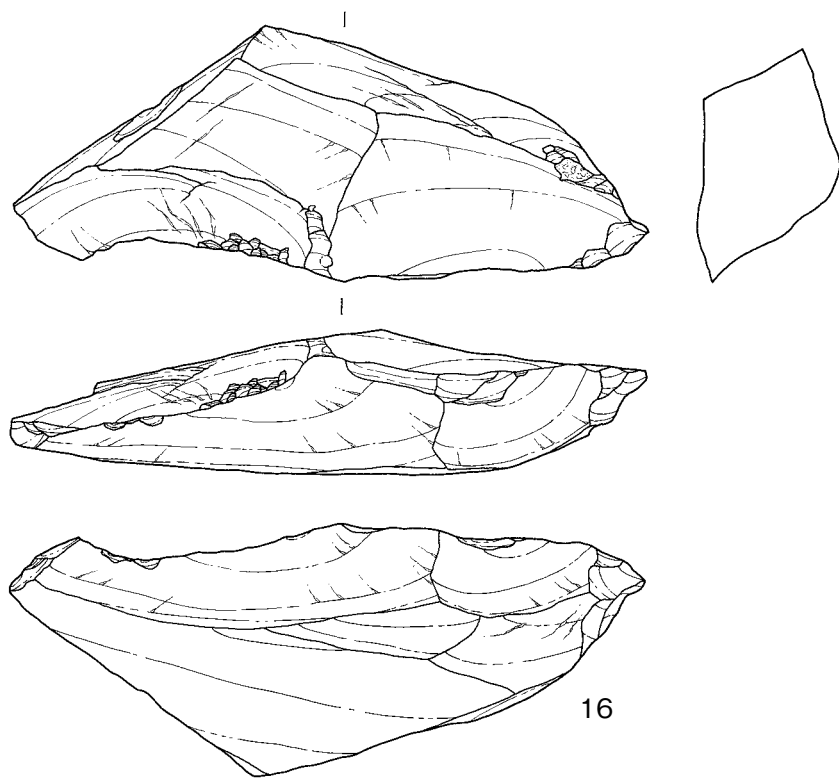
14



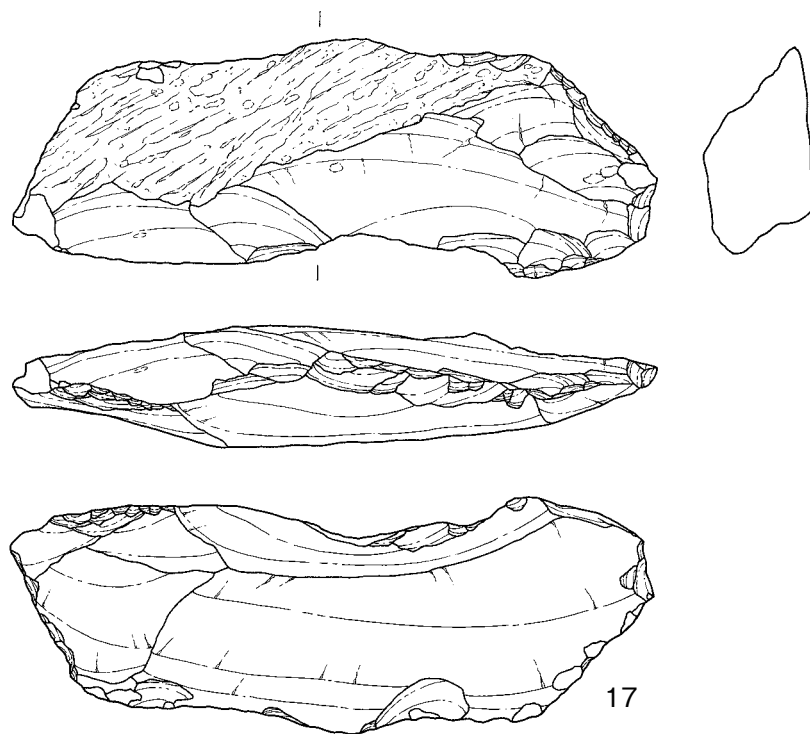
15



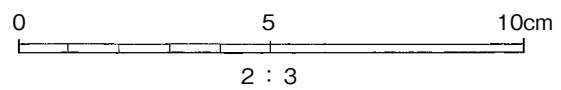
第4図 国分台南斜面の採集遺物（翼状剥片）



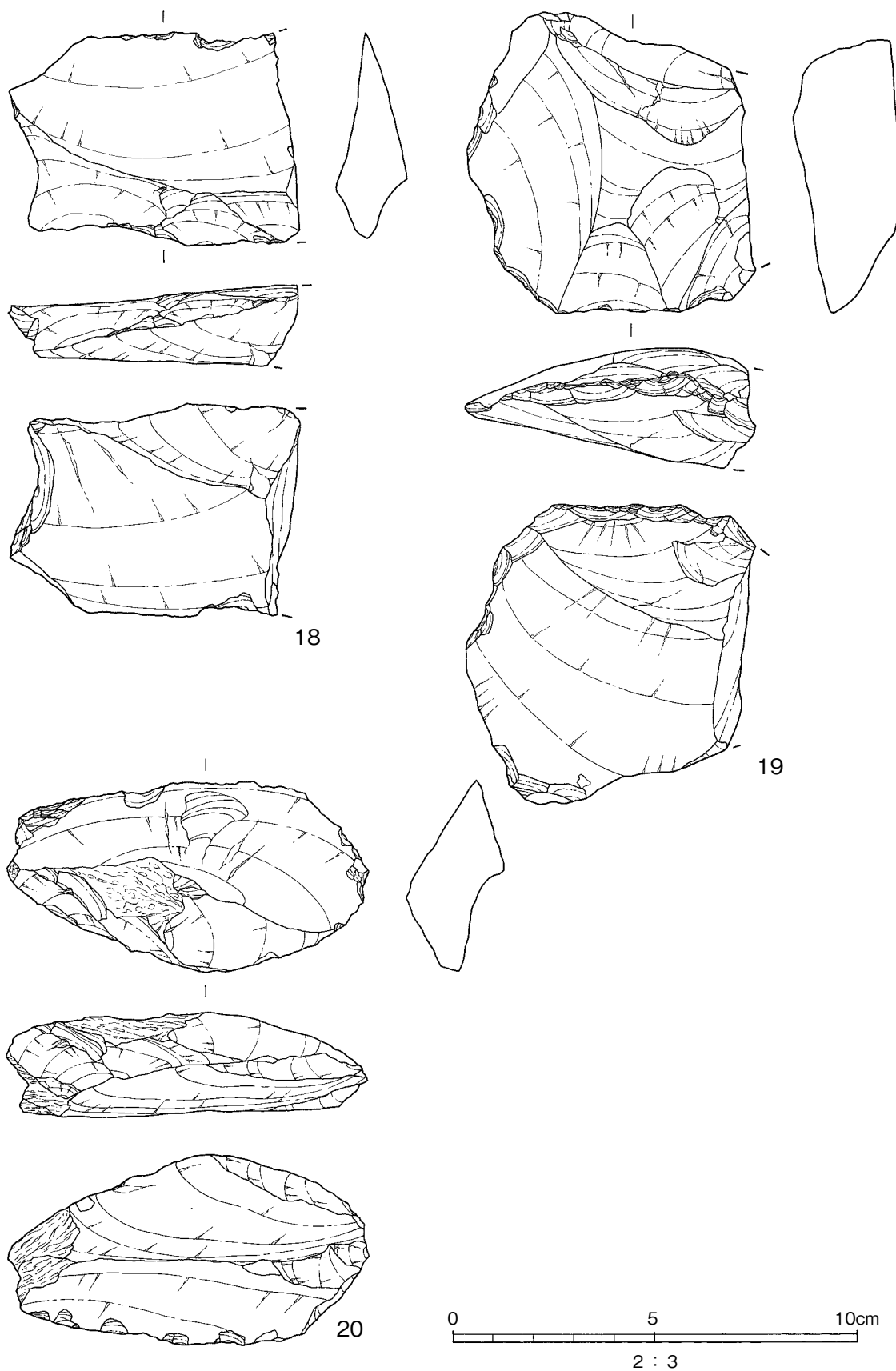
16



17

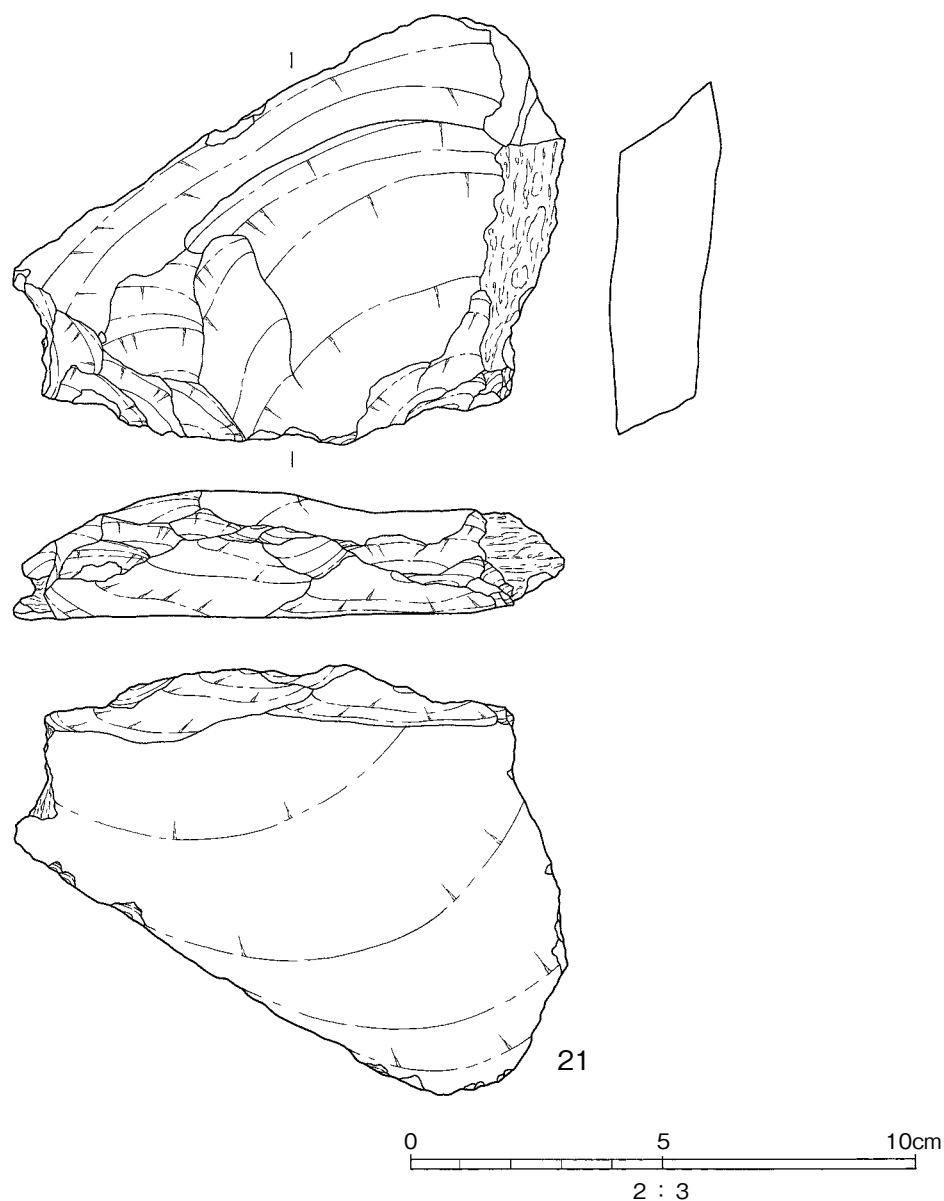


第5図 国分台南斜面の採集遺物（翼状剥片石核）



第6図 国分台南斜面の採集遺物（翼状剥片石核）

が残されている。19は右側部を欠損するもので、打面部には複数の打面調整痕とネガティブな剥離痕が残されている。背部には素材時の分割面が、左側部には素材時のエッジが残されている。作業面には剥片剥離痕の他に、打面側の接する部位に細かな連続する剥離痕が残されている。20は礫面が複雑に残され本体形状に影響していると思われるが、打面は調整痕の偏りが目立つものの、山形の形状となっている。打面部にはポジティブな剥離面が、背部には素材時のエッジが残されている。21は両側部に礫面を残している。打面調整は細かく行われており、剥片剥離作業面には大きく2枚の剥離痕が、背部には素材時の分割面が残されている。



第7図 国分台南斜面の採集遺物（翼状剥片石核）

これらの翼状剥片石核の残核形態をみると、16・17の一群と18～21の一群ではその本体厚が異なるようで、これは剥片剥離の進行状況を示していると考えられる。

縦長剥片（第8図22～第9図33）

22～33は縦長剥片である。28・29・33は単剥離打面、22・23・25は複剥離打面、24・26・31・32は礫面打面を有する。横断面形は23・32・33が台形状となる他は、すべて三角形状となっている。表面に礫面を残すものが30・31・33などで確認できるが、それ以外のは剥離面で構成されていることがわかる。平面形状はその多くが両側縁の並行するもので、表面側に残る稜線も1条ないし2条のもので占められる。

これらの剥片から考えられる剥片剥離作業を想定すると、打面調整が比較的低調で、体部調整が少なく打面転位なども考えにくい。また、ほぼ同じ形状の剥片を連続的に剥離したことも考えてよいであろう。

縦長剥片石核（第9図34）

34は縦長剥片石核である。打面部に剥片剥離作業面側からの打面細調整が認められ、両側部と背部には分割面が大きく残されている。全体形は角柱状となり、作業面側には礫面が部分的に残されている。体部調整をみると底部付近に集中して施されており、右側下部には作業面側からの加撃によるものが、左側部には作業面および背部側から施されていることがわかる。また、底部には下縁調整のようなエッジを形成する細かな調整痕が認められている。

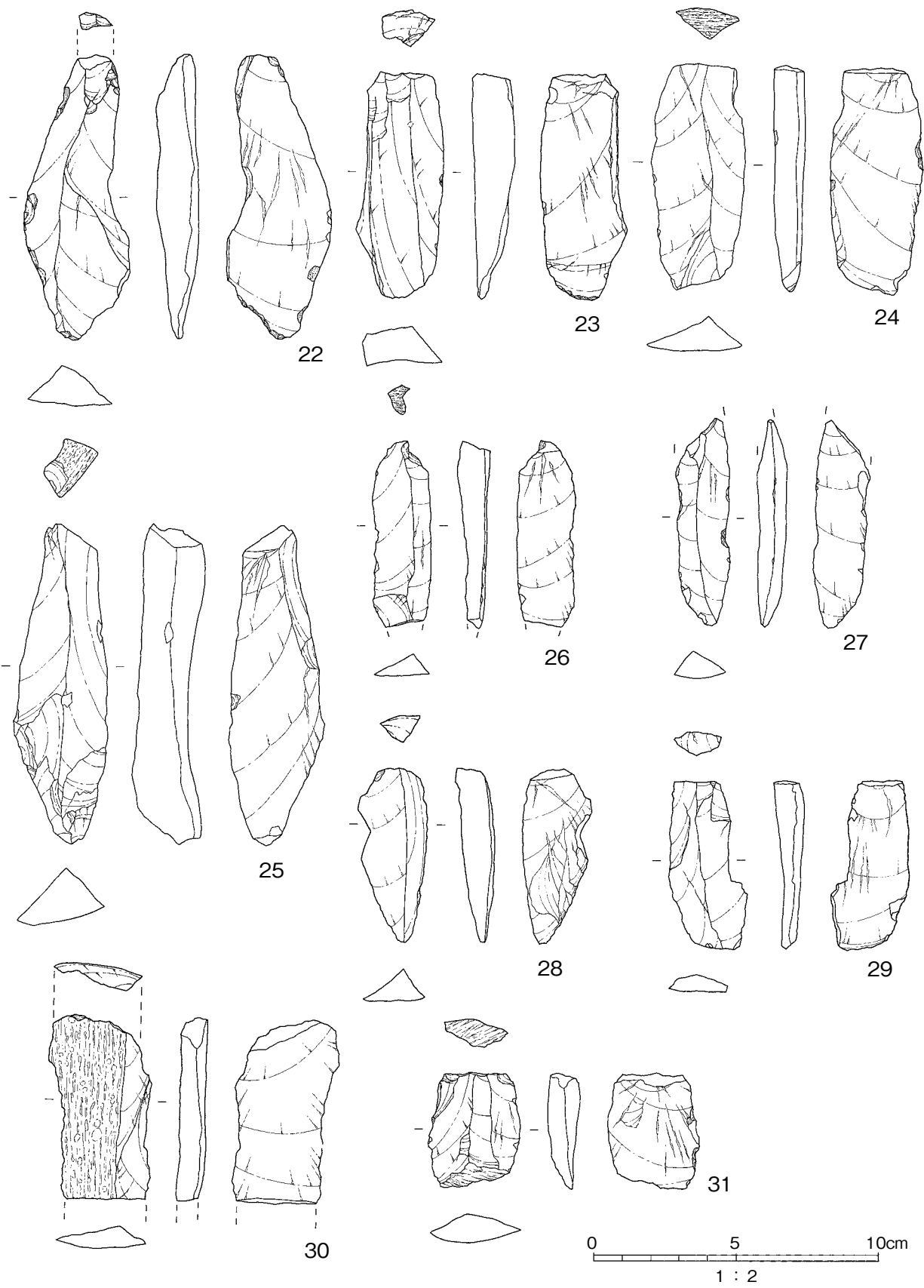
尖頭器（第10図35～40）

35は尖頭器、36～40はその未成品である。35は両面に調整が施されたもので、先端部と基部は丸みを帯びている。断面形は凸レンズ断面状となる。36は横長剥片を素材としたもので表面左側部に素材時の主要剥離面が残されている。37は横長剥片を素材としたもので、裏面中央部に素材時の主要剥離面が残されている。38は縦長剥片を素材としたもので、表面右側部に礫面が残され、裏面中央部には素材時の主要剥離面が残されている。39は横長剥片を素材としたもので、表面右側部には素材時のネガ面が、裏面左側部には素材時の主要剥離面が残されている。40は横長剥片を素材としたもので、裏面には素材時の主要剥離面が残されている。右側部には素材時の単剥離打面が残されている。

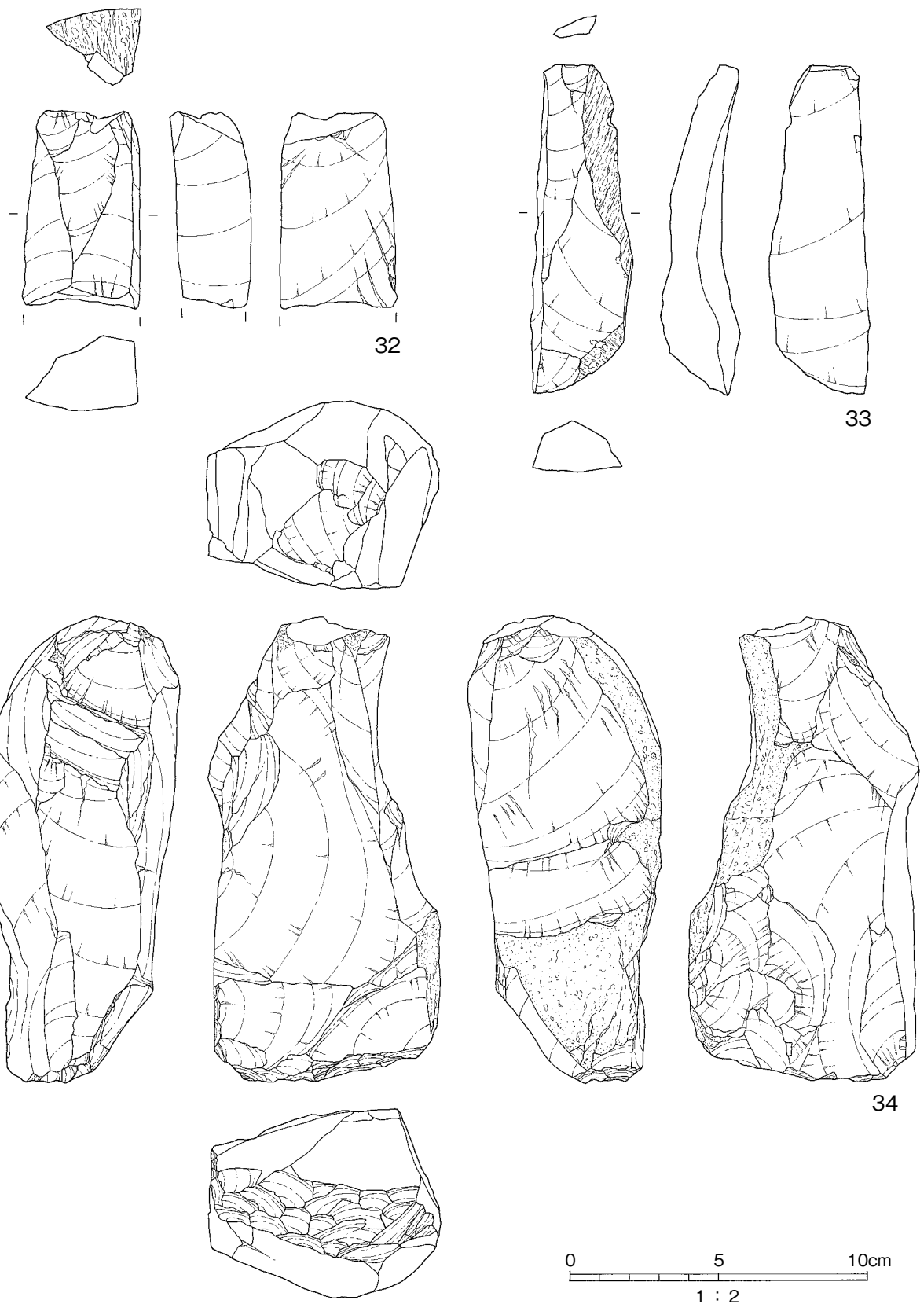
3 石器類の評価

ここに紹介した石器類は、国府型ナイフ形石器を含むナイフ形石器や、縦長剥片・縦長剥片石核など、後期旧石器時代後半期に位置づけられるものがある。また尖頭器については、その所属時期についての研究事例は少数であるが、現段階では細石刃文化後半期の所産と考えられるものであろう（多田2002）。ここでは各石器について、簡単な所見を述べておきたい。

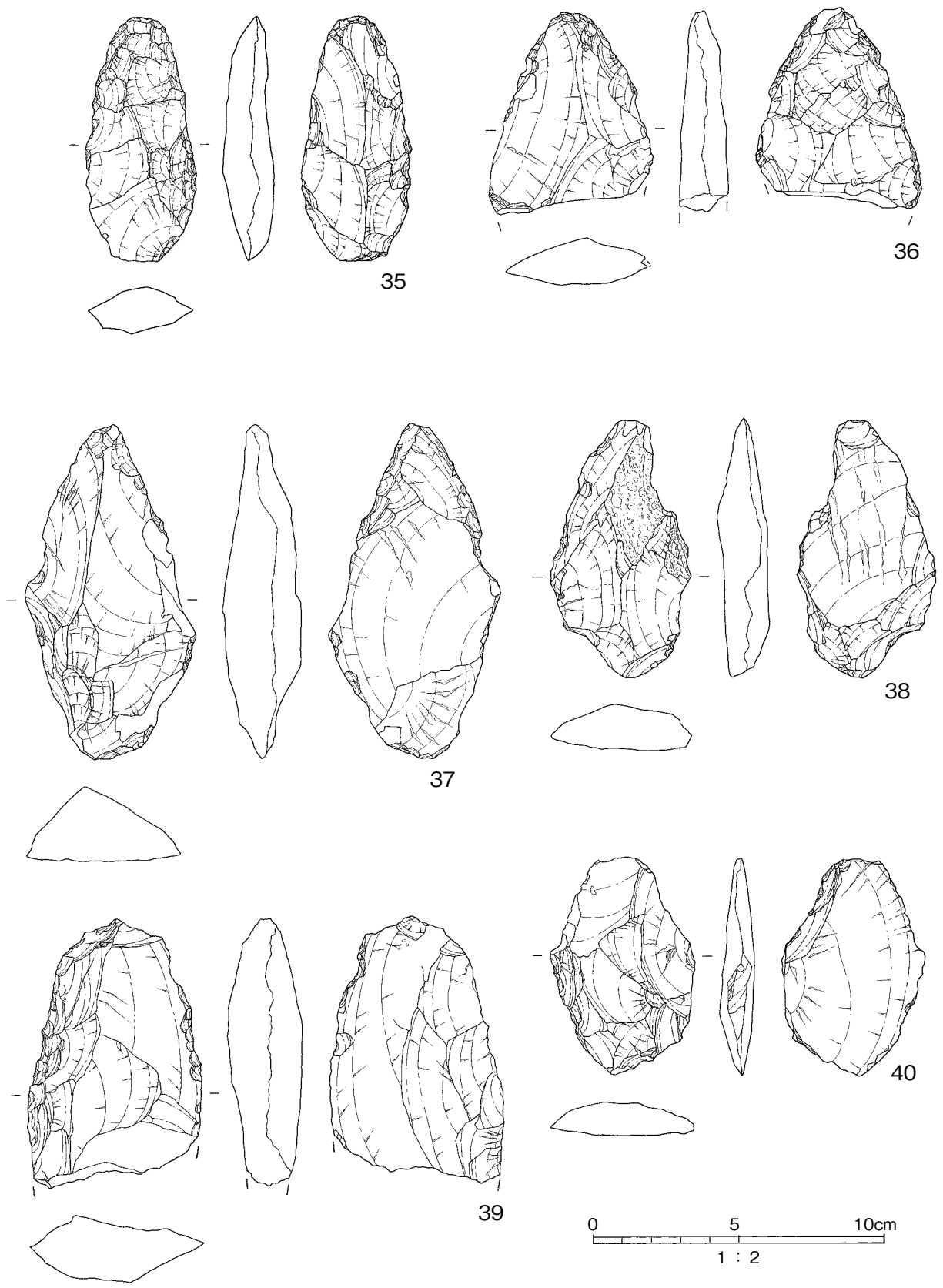
ナイフ形石器には、国府型ナイフ形石器、横長剥片素材のもの、不定形剥片素材のもの、縦長剥片素材のものが確認できた。また、翼状剥片や翼状剥片石核なども確認され、瀬戸内技法に関連する資料がまとまったことになる。こうした資料は、既に柏井氏らの報告でも認めることができるが、国府型ナイフ形石器以外のもの、つまり各種剥片を素材としたナイフ形石器は、過去の



第8図 国分台南斜面の採集遺物（縦長剥片）



第9図 国分台南斜面の採集遺物（縦長剥片・縦長剥片石核）



第10図 国分台南斜面の採集遺物（尖頭器）

報告例で認めることができない。また、今回報告した一群を見れば、国府型ナイフ形石器は少数であり、それ以外のものが主体的になる可能性が考えられ、既に先学が論証した国分台南斜面における国府型ナイフ形石器の希薄さが表れているともいえよう（竹岡1988）。

国府型ナイフ形石器以外のものについては、横長剥片素材のものが目立つようで、僅か1点ずつではあるが不定形剥片素材によるものと縦長剥片素材のものが認められている。横長剥片素材のものは、比較的大形で1側縁加工のもの（第2図2・3）と小形で2側縁加工のもの（第2図6）がある。不定形剥片素材のもの（第2図4）は、直線的に仕上げられたブランディングではなくやや鋸歯縁状となるもので、1側縁加工のものというよりも部分加工のものとする見方もできる。

1点のみ確認された縦長剥片素材のナイフ形石器（第2図5）は基部加工のもので、国分台周辺の遺跡と比較しても普遍的に存在するものではないようである。また、縦長剥片を素材としていることで本稿で紹介した縦長剥片との接点が見出せる可能性もあるが、このナイフ形石器の素材を考えるとその類例は考えにくい。ここで主に確認された縦長剥片や縦長剥片石核の一群とは、その技術基盤の異なるものであったと判断できよう。

縦長剥片とこれらを作成したであろう縦長剥片石核の一群は、既に国分台南斜面と蓮光寺山の遺跡群に多く分布していることが述べられていた（竹岡1988）。また早くから縦長剥片剥離技術については二上山北麓遺跡群の諸研究があり（後藤・長瀬1974、佐藤1979）、ここでは先学の研究と若干の比較を行い、国分台南斜面の縦長剥片剥離技術についてまとめてみたい。

まず本稿で紹介した完形の縦長剥片7点について数量的なデータを示すと、最大長は4.1～11.2cmの範囲で平均値は7.8cm、最大幅は2.5～3.5cmの範囲で平均値は3.1cm、最大厚は1.0～2.7cmの範囲で平均値は1.7cm、重量は12.79～80.92gの範囲で平均値は38.5gとなる。長幅比は3:1～2:1の範囲に多く、概していえば3:1に近い数値を示すものが多い。また、打面と主要剥離面で計測される剥離角については、100～114度の範囲で平均値が105.1度となった。さらに破損品も含めて調整剥離の状況をまとめてみると、単剥離打面3点、複剥離打面3点、礫面打面4点で打面調整は少なく、表面に残される剥離痕の多くが打面側からの剥離によるものであった。体部調整については、3点の剥片（24～26）で横位方向からの剥離があるほか、石核（34）で底部付近に体部調整の集中が認められているが、全体的にはやや低調とみてよいだろう。

ここで香川県朱雀台第一地点と蓮光寺山第一地点の様相について、竹岡俊樹氏の提示したグラフをみると、最大長は4.0～11.0cmに、最大幅は1.5～5.0cmに、最大厚は1.0～2.5cmに、長幅比は3:1～1.5:1に集中していることが解る。また剥離角の状況は、蓮光寺山第1地点で90～109度、朱雀台第1地点では110～119度に集中するようで、打面調整は比較的少なく（朱雀台第一地点で14%）、石核整形はほとんど行われないうである。また使用痕を残す例が一定量認められるようである（竹岡1980）。

さらに二上山北麓遺跡群の諸研究では、最大長3.5～9.0cmが縦長剥片の標準的の法量である、長幅比は3:1～1:1に多い、剥離角は100～120度の範囲に集中する、打面調整は低調である（20%以下）、表面の剥離痕は打面側からの加撃によるものが多い、背面の片半部に礫面を残すものが

多い、体部調整が低調である、縦長剥片を用いたナイフ形石器（製品）は乏しい、使用痕を残す例が少なくないなどの様相が提示されている（後藤・長瀬1974、佐藤1979）。

以上の現象を比較してみると、若干差は認められるが共通点は多く、先学が整理・理解してきた評価と大きく隔たりを見せるものではなく、国分台南斜面における縦長剥片の様相は、周辺の蓮光寺山遺跡群、朱雀台遺跡群、二上山北麓遺跡群を含めた近畿・備讃瀬戸地域の一般的な様相を示すものとして理解してよいだろう。但し、国分台南斜面では使用痕の認められるものが存在していない。これは過去に公表された資料でも同様である（柏井・吉朝・増田1977）。これは観察方法などにもよるが、今後の課題として留意しておかなければならない。

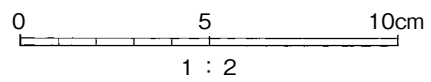
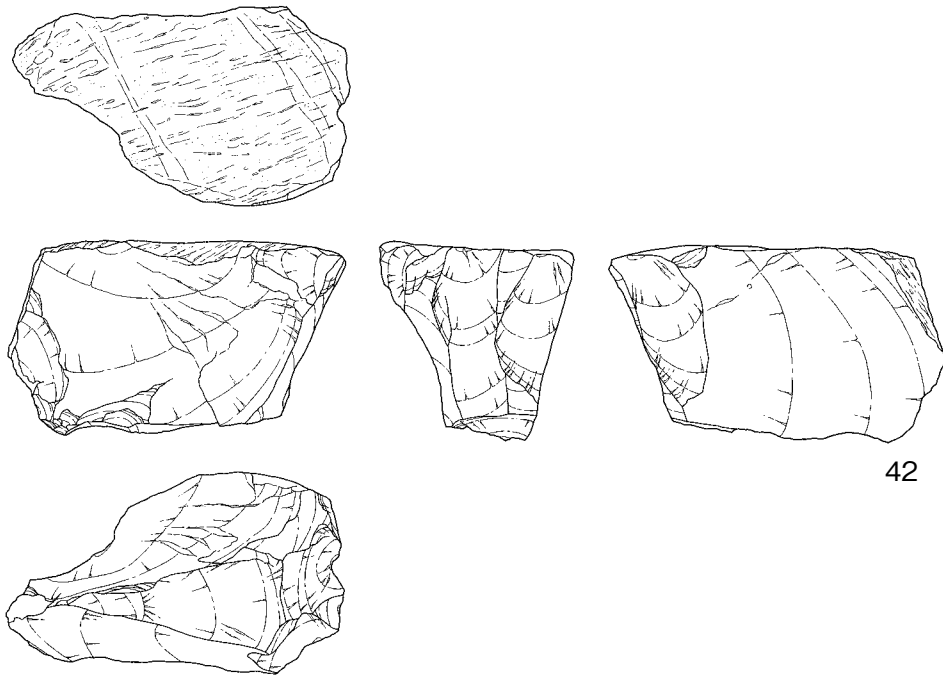
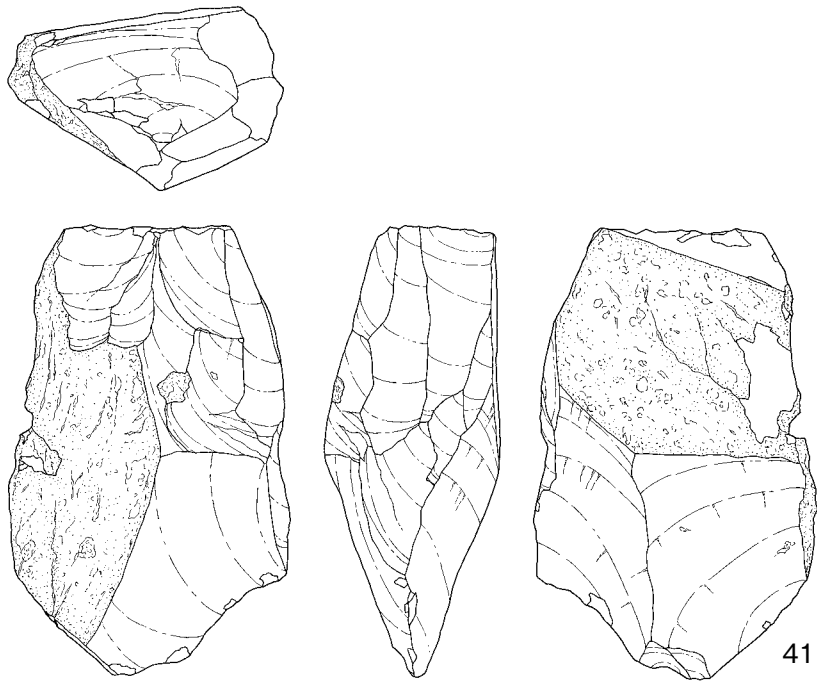
ここで参考までに蓮光寺山第8地点の採集石器に触れておきたいが、ここでは縦長剥片は確認できなかったものの、2点の縦長剥片石核を得ることができた（第11図41・42）。41は両側部に礫面が残されることから、板状の原石を素材としたと考えられる。作業面は小口の一端に設定され、打面は横位方向からの分割で作出されている。42はブロック状の分割礫を素材としたもので、小口の一端に作業面が設定されたものである。打面部全面から背部にかけて礫面が残されている。これらの石核からは、打面調整と体部調整が低調であること、表面の一部に礫面が残される剥片が作出されることがわかり、国分台南斜面における一部の縦長剥片と符合する要素は認められる。

さらに周辺の縦長剥片石核をみると、備讃瀬戸地域の島嶼部における縦長剥片石核については、大浦遺跡と西方遺跡などでその分類作業が行われている（秋山・藤好・真鍋1984、大山・藤好1985）。両遺跡ともにA・B・C・D型の4つのバリエーションが認められており、点数上で多くを占めるのはA型である。このA型は板状の素材で小口側に作業面を設定するもので、いわゆる備讃瀬戸型石刃技法（佐藤1987）の範疇に含まれるものである。本稿で紹介した国分台南斜面のものについてはブロック状の分割礫を素材としており、打面細調整や体部調整がみられることで大浦・西方A型とは異なるものとも考えられる。但し蓮光寺山第8地点のものについては、41は両側部に、そして42は打面部に礫面を残すことから大浦・西方A型とは異なる部分はあるが、板状の素材を用いる点については共通すると判断できよう。

また、残る課題として縦長剥片を素材とした石器の特定があろう。しかし、縦長剥片が素材となった石器類が積極的に評価できないことは、既に先学諸氏の研究例をみてもわかるだろう（竹岡1988、秋山・藤好・真鍋1984）。これは先述したように、縦長剥片に使用痕を残す例が一定量認められることと無関係ではないように思われ、より詳細な観察法と集成が必要となるであろう。

尖頭器については、これらを細石刃文化後半期に所属するものとした。編年作業についても先学諸氏の研究があり、筆者と異なる評価もある。ここで簡単に見解を述べると、これらの尖頭器類は多田分類の四国2群（多田2002）に比定できるもので、細石刃文化段階に並行すると考えている。この点については現段階の位置づけとして提示し、大方のご批判を仰ぎたい。

また今回報告した6点の尖頭器については、1点が完形品で残る5点が未成品であった。未成品の多くが横長剥片素材のもので、縦長剥片素材のものは1点のみを数える。付け加えておくと、こうした素材の在り方については既に先学の指摘もある（柏井・吉朝・増田1977）。ここで40の尖頭器をみると、素材時の単剥離打面を残すもので、さらに表面に残される素材時の剥離面から



第11図 蓮光寺山第8地点の採集遺物（縦長剥片石核）

第1表 国分台南斜面の石器観察表

単位：cm, g

番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃角	調整角	剥離角	底面角	残存
1	ナイフ形石器	サヌカイト	6.0	2.6	1.5	22.94	46	65	-	-	下部欠損
2	ナイフ形石器	サヌカイト	7.6	3.1	1.2	22.85	27	52	-	-	完形
3	ナイフ形石器	サヌカイト	5.9	2.8	1.4	23.12	32	71	-	-	完形
4	ナイフ形石器	サヌカイト	4.8	2.6	1.2	12.96	63	75	-	-	完形
5	ナイフ形石器	サヌカイト	5.1	1.8	1.3	8.55	48	69	-	-	完形
6	ナイフ形石器	サヌカイト	3.3	1.1	0.6	2.13	65	77	-	-	完形
7	翼状剥片	サヌカイト	3.3	6.8	1.9	21.08	-	-	129	42	両側部欠損
8	翼状剥片	サヌカイト	3.8	6.4	1.3	27.05	-	-	117	30	右側部欠損
9	翼状剥片	サヌカイト	4.4	6.3	1.3	29.62	-	-	120	40	左側部欠損
10	翼状剥片	サヌカイト	3.3	6.3	1.0	16.71	-	-	133	52	右側部欠損
11	翼状剥片	サヌカイト	2.8	7.1	1.5	23.13	-	-	126	48	完形
12	翼状剥片	サヌカイト	3.3	5.2	1.3	19.51	-	-	112	45	右側部欠損
13	翼状剥片	サヌカイト	6.8	10.5	2.2	103.45	-	-	141	32	左側部欠損
14	翼状剥片	サヌカイト	3.5	8.2	1.2	27.70	-	-	124	46	右側部欠損
15	翼状剥片	サヌカイト	3.3	6.9	1.5	24.48	-	-	128	44	右側部欠損
16	翼状剥片石核	サヌカイト	2.9	12.6	5.0	154.70	-	-	110	67	完形
17	翼状剥片石核	サヌカイト	2.5	12.7	4.7	123.80	-	-	105	65	完形
18	翼状剥片石核	サヌカイト	2.0	7.1	5.3	64.04	-	-	120	40	右側部欠損
19	翼状剥片石核	サヌカイト	3.0	7.1	7.4	158.29	-	-	138	38	右側部欠損
20	翼状剥片石核	サヌカイト	2.6	8.9	4.7	84.01	-	-	112	48	完形
21	翼状剥片石核	サヌカイト	2.5	10.9	8.5	209.23	-	-	114	65	完形
22	縦長剥片	サヌカイト	10.0	3.7	1.5	42.78	-	-	-	-	完形
23	縦長剥片	サヌカイト	7.9	3.1	1.5	40.54	-	-	106	-	完形
24	縦長剥片	サヌカイト	7.9	3.3	1.5	33.24	-	-	103	-	完形
25	縦長剥片	サヌカイト	11.2	3.4	2.5	73.18	-	-	103	-	完形
26	縦長剥片	サヌカイト	6.6	2.0	1.1	11.69	-	-	108	-	下部欠損
27	縦長剥片	サヌカイト	7.3	1.0	2.0	12.61	-	-	-	-	上部欠損
28	縦長剥片	サヌカイト	6.2	2.5	1.4	12.79	-	-	114	-	完形
29	縦長剥片	サヌカイト	5.9	2.8	1.0	13.91	-	-	102	-	完形
30	縦長剥片	サヌカイト	6.5	3.7	1.0	23.40	-	-	-	-	両端部欠損
31	縦長剥片	サヌカイト	4.1	3.3	1.2	15.04	-	-	108	-	完形
32	縦長剥片	サヌカイト	6.7	2.7	3.9	91.87	-	-	117	-	下部欠損
33	縦長剥片	サヌカイト	11.1	3.5	2.7	80.92	-	-	100	-	完形
34	縦長剥片石核	サヌカイト	15.7	7.8	6.3	860.53	-	-	92	-	完形
35	尖頭器	サヌカイト	8.4	3.8	1.8	52.20	-	-	-	-	完形
36	尖頭器	サヌカイト	7.0	5.6	1.7	59.08	-	-	-	-	下部欠損
37	尖頭器	サヌカイト	11.5	5.9	2.7	140.10	-	-	-	-	完形
38	尖頭器	サヌカイト	8.9	4.8	1.8	60.19	-	-	-	-	完形
39	尖頭器	サヌカイト	9.2	6.0	2.6	123.82	-	-	-	-	下部欠損
40	尖頭器	サヌカイト	7.5	4.9	1.2	43.25	-	-	-	-	完形

第2表 蓮光寺山第8地点の石器観察表

単位：cm, g

番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃角	調整角	剥離角	底面角	残存
41	縦長剥片石核	サヌカイト	11.9	7.5	4.8	429.30	-	-	97	-	完形
42	縦長剥片石核	サヌカイト	5.2	8.9	5.2	218.05	-	-	107	-	完形

は、円盤状の石核から剥離されたものか、あるいは交互剥離による石核から剥離された剥片を素材としたことが考えられよう。いずれにしろ、これらの素材となった剥片の技術的な理解は、これに伴う石核の抽出が不可欠である。さらに未成品における調整加工をみるといずれもやや幅広な剥離となるもので、基本的に表裏両面に施されていることから仕上がりは両面加工品になると考えられる。完形品は1例しか確認できていないが、国分台関連の多くの遺物から考えて、基部が丸みを帯びる幅広な形態のものになると判断できる。

最後に本稿で紹介した石器類には認められていないが、国分台遺跡群をはじめ、過去に国分台南斜面で採集された遺物の中には、少数ではあるが角錐状石器の存在が知られている（有本1987、柏井・吉朝・増田1977）。これまでの報告例をみても角錐状石器は2点のみの確認で、本稿で確認できなかったことを考え合わせれば、国分台南斜面における角錐状石器の存在は非常に希薄なものであったとすることもできよう。

4 おわりに

本稿では国分台南斜面で確認された遺物を中心に、その評価と若干の類例対比を行った。採集資料ということもあり、石器の全体的な様相については多くの問題点を残すことになったが、今後の類例増加によって、検討材料が整備されることに期待したい。

また、国分台南斜面は瀬戸内技法や角錐状石器が少なく、縦長剥片が集中する地点が認められることや（竹岡1988）、尖頭器の集中して採集される地点があることなど（柏井・吉朝・増田1977）、非常に多くの遺物が散布する一帯でありながら、限定的な石器類の製作が行われた可能性も残されている。そして今後も検討されることがあるとすれば、こうした地点単位での石器組成の偏りが注視できる点であろう。

本稿の執筆にあたり、挿図作成では田中希実さんと結城やよいさんにご苦勞をかけた。さらに遺跡見学では以下の方々にご協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

池尻伸吾 小野秀幸 片桐孝浩 徳安正道 森下英治 山中菊乃

(2003年10月18日)

参考文献

秋山 忠・藤好史郎・真鍋昌宏1984『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 大浦遺跡』香川県教育委員会。

有本雅己1987「国分台南斜面採集の角錐状石器」『旧石器考古学』34、旧石器文化談話会

大山真充・藤好史郎1985『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 西方遺跡』香川県教育委員会

柏井光彦・吉朝則富・増田一裕1977「香川県国分台採集の旧石器について」『プレリユード』20、旧石器文化談話会

川畑 迪1959「国分台無土器文化石器」『香川県文化財協会報』4、香川県文化財保護協会

後藤 優・長瀬潤一1974「二上山北麓の縦長剥片剥離法」『ふたがみ』同志社大学旧石器文化談話会

- 佐藤良二1979「第6章第1節 二上山北麓における縦長剥片生産技術」『二上山・桜ヶ丘遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 佐藤良二1987「備讃瀬戸型石刃技法についての覚書」『花園史学』8、花園大学史学会
- 竹岡俊樹1976「国分台遺跡群」『日本の旧石器文化3』麻生 優・加藤晋平・藤本 強編、雄山閣
- 竹岡俊樹1980「香川県朱雀台第一地点における石刃技法の分析」『考古学研究』26-4、考古学研究会
- 竹岡俊樹1988「第一章 旧石器時代」『香川県史1 通史編 原始・古代』香川県
- 多田 仁2002「四国の尖頭器」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会
- 山下平重1999「参考資料 国分台遺跡群」『第16回中・四国旧石器文化談話会発表資料』中・四国旧石器文化談話会

東宇和郡宇和町稲生出土の縄文土器

藤本清志

1 はじめに

愛媛県南西部に位置する東宇和郡宇和町は、周囲を500～800m級の山々に囲まれた海拔約200mの宇和盆地上に位置する。盆地は中央を北部から南東へ向け貫流し、西部瀬戸内海に流入する肱川の最上流域にあたる主要4河川（宇和川・岩瀬川・深ヶ川・根笹川）の堆積作用によって土壌に恵まれ、南予最大の穀倉地帯となっている。

宇和町では現在までに縄文時代の遺跡が10箇所ほど確認されており（第1図）、宇和盆地の低湿地を避けるように小起伏地の裾部や山頂付近の洞窟及び巨大な岩陰等にその分布が見られる。早期の遺跡には音地遺跡（多田2003）があり、前期の遺跡として常定寺遺跡（多田2003）や、羽島下層式・轟式土器が出土した城楽岩陰遺跡（井桜1975）が挙げられるが、中期の遺跡はまだ発見されてない。後期の遺跡には、チャート製スクレイパーが採集されたタイマツ遺跡や狩猟採集等の際に一時的に利用されたと推定され、西平式土器が出土した深山第1～第3洞窟遺跡、低湿地に位置し中津式・福田KⅡ式土器が出土した永長遺跡がある。これらの他にも、檜木遺跡・狭間遺跡・金毘羅山遺跡・谷が内遺跡・久枝遺跡・諏訪駄馬遺跡などの遺跡が知られる（井桜1975・宇和町誌編纂委員会1976・犬飼1986）。

2 調査の概要

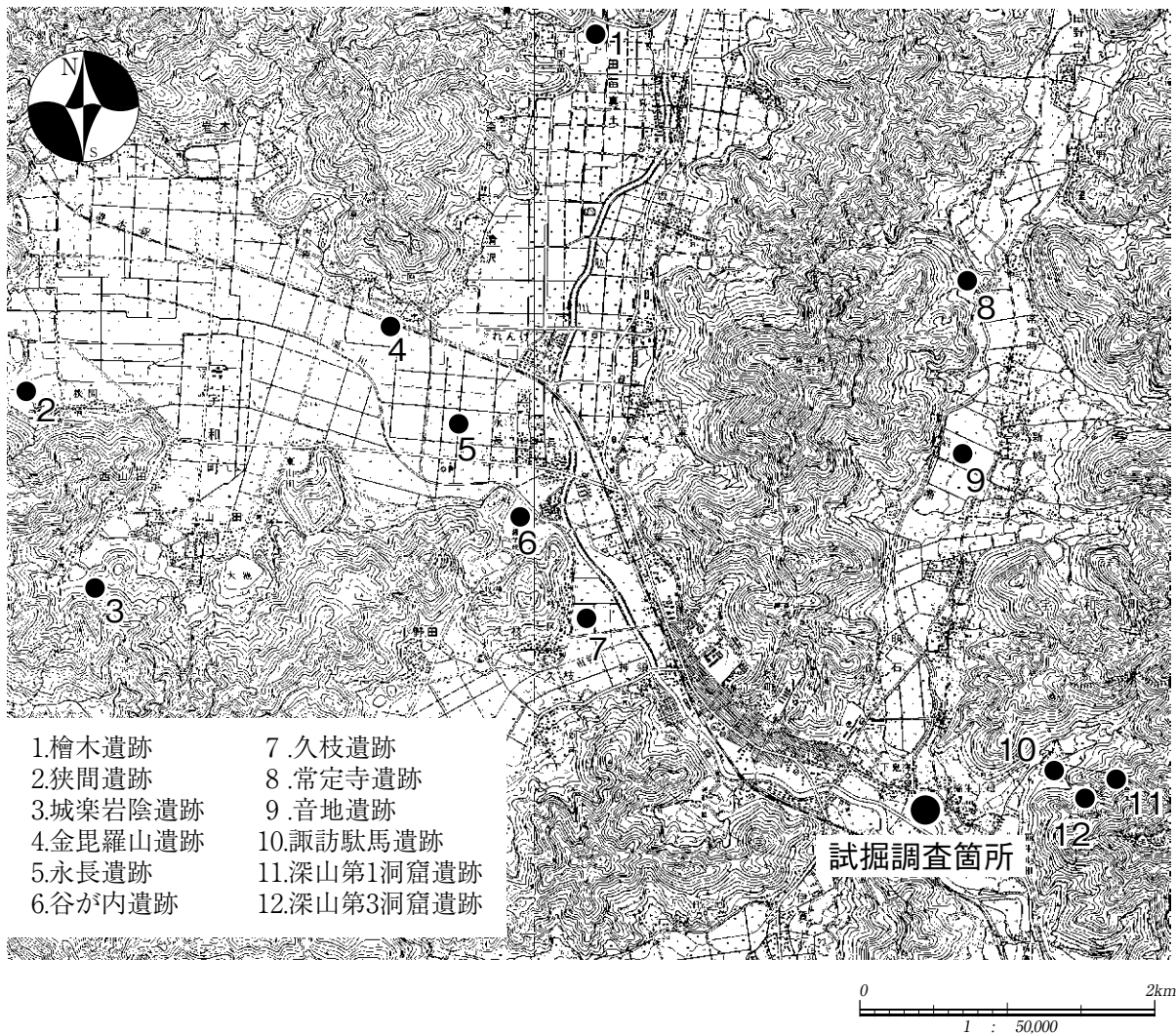
平成11年11月、日本道路公団四国支社が予定している四国横断自動車道の建設において、埋蔵文化財の存在が予測された範囲について試掘調査が行われた（第1図）。なお、試掘調査が実施された宇和町稲生は宇和町南東部に位置し、周辺には先述の諏訪駄馬遺跡、深山第1～第3洞窟遺跡がある。

試掘調査はテストピットを数箇所設定して行われ、調査の結果、上から表土・明黄褐色粘質層・灰色砂礫層の堆積が確認された。表土からは須恵器が出土し、その下の明黄褐色粘質層から縄文土器が出土した。しかし、この明黄褐色粘質層から新たな遺物の出土は無く、10cm程度の礫を多量に含む不安定な層であったため広がり確認されなかった。

今回は、この明黄褐色粘質層から出土した数点の縄文土器のうち、図示可能で報告の必要があると思われる3点について報告を行いたいと思う。

3 出土資料の観察（第2図）

1は、口縁部が「く」字状に内彎する平口縁の深鉢である。口縁部に3条、胴部に7条の沈線が描かれ、LR縄文が確認できる。口縁部の第1（上から第1・第2・第3とする）、第3沈線は平行沈線、第2沈線は波状沈線である。胴部7条の沈線のうち、第3沈線のみ波状沈線で、その



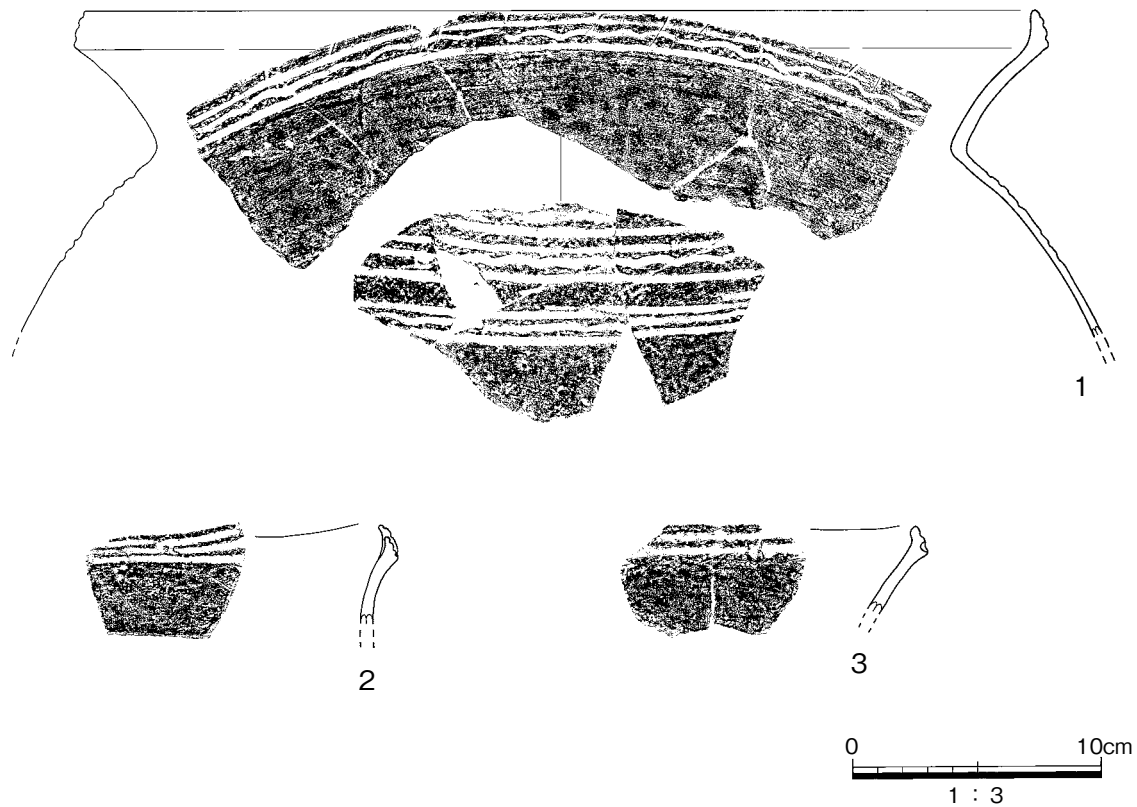
第1図 宇和町の縄文時代遺跡

他は平行沈線である。口縁部内面の屈曲はやや強く、稜線が形成される。胴部はやや薄手の印象を受ける。

2は、口縁部が「く」字状に内彎する波状口縁の深鉢であるが波頂部は残存していない。口縁部に3条の沈線が描かれ、第1、第2沈線は口縁に沿って上昇する。第3沈線は上昇せず水平に描かれる。口縁部内面の屈曲は緩やかである。

3は、口縁部が「く」字状に内彎する波状口縁の深鉢であるが波頂部は残存していない。口縁部に2条の沈線が描かれ口縁に沿ってわずかに上昇し、第2沈線上には刺突文が2点ある。口縁部内面の屈曲は緩やかである。

これら3点の遺物は同一層中からの出土であり、口縁部が「く」字状に内彎、2条ないしは3条の沈線が縄文地に描かれるなどの共通点が認められ、同時期の遺物であると考えられる。



第2図 宇和町稲生出土の縄文土器

4 おわりに

以上、東宇和郡宇和町稲生での試掘調査において出土した縄文土器について簡単な報告を行った。これら3点の縄文土器はいずれも、四万十川流域や松田川流域、海岸部において広く確認され、西南四国における縄文時代後期の標式土器である「伊吹町式土器」(西田1957・犬飼1961)の特徴を備えている。伊吹町式土器については、西田栄氏や犬飼徹夫氏・木村剛朗氏らによって研究がなされ、現在、伊吹町式土器出土遺跡は、愛媛県で5遺跡、高知県で13遺跡の計18遺跡にのぼる(木村2002)。近年では愛媛県北宇和郡津島町の犬除遺跡2次調査で良好な伊吹町式土器が出土し、第VI類土器として分類・報告されている(多田2001)。この他にも宇和町の城楽岩陰遺跡での採集資料などが報告されている(犬飼1986)。

また、木村氏は高知県船戸遺跡や犬除遺跡2次調査等の出土資料において、伊吹町式土器の中に先行型式である片粕式土器や広瀬上層式土器の要素が確認できる資料の存在を指摘している。それは、①波状口縁を有する深鉢の波頂部に紐状隆起文の退化・衰退した手法、②口縁外面にも幅広い長楕円文を波頂部直下で対向させる文様構成、③小さく描かれた入組文や沈線末端を、縦位の短直線や鉤状に曲げた文様を対向させた手法、といった要素であり、試論ではあるが伊吹町式土器の古段階を設定し、上記18遺跡中5遺跡からの出土を報告している(木村1995・2002)。古段階の伊吹町式土器は数量的にまだ少なく、まとまった形での資料の増加が望まれているが、本資料には古段階の特徴を示すような資料は確認できず、伊吹町式土器の中でも新しい段階に位置

づけられると思われる。

しかし、本資料は口縁部の形態や器形・沈線文など伊吹町式土器の特徴が確認できるが、本型式の大きな特徴である刺突列点文が一部を除いて確認できないのは、本資料の特徴であると言えるのかもしれない。資料1の口縁部第2沈線が波状で、刺突列点文のない深鉢は他遺跡であり類例が確認できない。

このように、本資料は宇和地域の縄文時代後期の様相や四国西南部における伊吹町式土器の分布状況の拡がりを知る上でも貴重な資料であると思われる。

最後になりましたが、本稿を執筆するにあたって当センターの中野良一氏、多田仁氏には執筆の機会の提供と御指導を賜りました。また挿図作成について結城やよいさんにはご苦勞をかけました。末筆ながら記して心より感謝申し上げます。

(2003年12月12日)

参考文献

- (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター1999『四国横断自動車道宇和インター予定地試掘調査報告書』
- 井桜 達1975『宇和の縄文時代』宇和町教育委員会
- 犬飼徹夫1961「宇和島市伊吹町出土縄文土器について」『愛媛考古学』4、愛媛考古学会
- 犬飼徹夫1982「第2章 狩猟・漁撈の生活と文化」『愛媛県史 原始・古代I』愛媛県史編さん委員会
- 犬飼徹夫1986「二 縄文時代」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県史編さん委員会
- 犬飼徹夫1993「西南四国の縄文土器型式研究の現状と問題点－「伊吹町式土器」を中心として－」『遺跡』第34号、遺跡発行会
- 宇和町誌編纂委員会1976『宇和町誌』愛媛県東宇和郡宇和町
- 木村剛朗1995「26 伊吹町遺跡」『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
- 木村剛朗2002「四国西南部の縄文後期－伊吹町式土器の研究－」『犬飼徹夫先生古稀記念論集 四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集刊行会
- 小玉浩幸ほか1992『上井遺跡』宇和町教育委員会
- 多田 仁2001『犬除遺跡2次調査』(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁2003『常定寺遺跡 音地遺跡 伊崎越遺跡』(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 出原恵三ほか1996『船戸遺跡』(財) 高知県文化財団 埋蔵文化財センター
- 中野良一ほか1999『上井遺跡』(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 西田 栄1957「宇和島市伊吹町出土の後期縄文式土器」『愛媛大学紀要』第3巻第2号

愛媛県出土埴輪の基礎的研究（４）

－松山市・二つ塚古墳資料紹介および県内資料の製作手法観察－

山内英樹

１ はじめに

愛媛県内に所在する前方後円墳には、近年の大規模開発等により未調査のまま消滅されたものや、現存（一部破壊を含む）はしているものの、未調査のため構造や所属時期の不明なものが多く、県内の古墳編年を構築する上で一つの障害となっていることは確かである。松山平野に所在する前方後円墳もその例外ではなく、特に大型墳については不明な部分が多い。

今回資料紹介を行う松山市・二つ塚古墳も、古くから周知されてはいるものの不明な部分が多く、「久米地域」における古墳時代後期の「首長墳」と各氏が引用しつつも（岡田2001、山内2001a）、その実態はよく分かっていない。埴輪は発掘調査を実施しなくても表採可能な考古資料であり、本古墳においても工事および踏査にて埴輪資料を確認しているため、多少なりとも古墳築造に関するデータを提供することが可能であると考えられる。

また、これまでの県内埴輪資料の観察により、突帯成形、器面調整、基底部調整などの諸特徴を幾つか抽出できる。本稿では特に古墳時代中期から後期にかけての製作手法の変遷を概観し、今後の県内出土埴輪編年の構築に向けての参考としたい。

２ 松山市・二つ塚古墳について

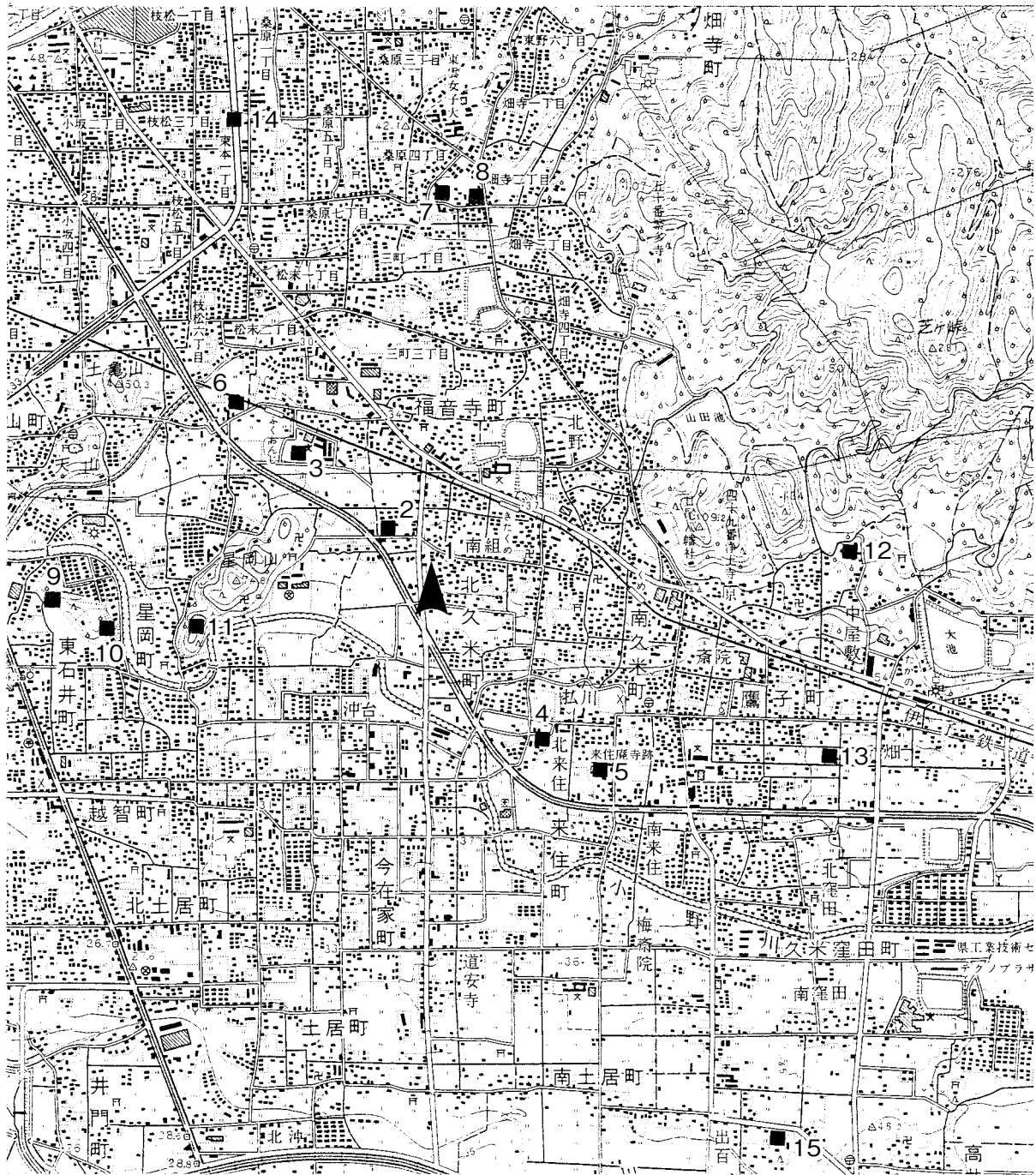
（１）立地と研究史

松山市二つ塚古墳は、松山市北久米町に所在し、南側周囲には水田および平野が広がる（第1図参照）。現在は東側を公園等により削り取られており、大きく地形が改変されてはいるが、円形の墳丘はかろうじて確認できる。

二つ塚古墳を含む「久米地域」には、先述したように松山平野最大の規模を誇る波賀部神社古墳（墳長62m）をはじめ、播磨塚天神山古墳（32.5m）、経石山古墳（56m）、三島神社古墳（45m）など、「首長墳」とされる後期前方後円墳が立地する四国でも特異な地域である点が指摘できる。

また、集落遺跡についても、本古墳周辺の福音寺小学校構内遺跡をはじめ、北久米浄蓮寺遺跡など多くの遺跡で古墳時代後期の竪穴住居跡群が検出されており、当時の集落の様相が明らかにされつつある。

二つ塚古墳に関する研究史は古く、『伊予温古録』には、「北久米村宇二丁目に在り高さ3間周囲30間二塚相對す因て里人これを二つ塚と…」という記載が残されている（宮脇1894）。その後、この古墳が前方後円墳であるかどうかの見解が様々あったが（長山1927など）、『遺跡』第25号の「松山市二つ塚古墳調査報告」によると、測量図およびボーリング探査によって、主軸を東西にとり、墳長48mの前方後円墳である可能性を指摘している（二つ塚古墳調査会ほか1984）。また、



- | | | |
|-------------|-------------|---------------|
| 1. 二つ塚古墳 | 2. 北久米浄蓮寺遺跡 | 3. 福音寺小学校構内遺跡 |
| 4. 久米高畑遺跡群 | 5. 来住廃寺 | 6. 筋違遺跡群 |
| 8. 三島神社古墳 | 9. 東山鷺ヶ森古墳群 | 10. 東山古墳群 |
| 12. 五郎兵衛谷古墳 | 13. タンチ山古墳 | 14. 東本遺跡群 |
| | | 15. 波賀部神社古墳 |
| | | 7. 経石山古墳 |
| | | 11. 西山古墳 |

第1図 二つ塚古墳および周辺の遺跡 (1:25,000)

注目される点として『愛媛県史』には、「昭和48（1973）年に行われた農免道路の改修工事で、路肩とされる面より埴輪片が出土されている」という記載が見られる（森1986）。

このように本古墳は、松山平野の首長墳として認識されてはいるものの、これまでの表採資料からの時期比定については、あいまいで根拠に欠ける部分があるように思われる。

（2）資料の観察

今回報告する埴輪資料は、松山市埋蔵文化財センター保管のものである。いずれも破片資料ではあったが、接合できる個体もあり、基底部を除く各属性の情報を窺い知ることができる（田城ほか2004）。以下に、各個体ごとの説明を加えることにする（第2・3図参照）。

第2図1・2は、口縁部の破片である。端面は大きく窪まず、直線的に立ち上がる。外面にはタテおよびナナメ方向の細かいハケ（6本/cm）が施されており、端部を指ナデ調整する。ただし、内面調整には若干の差異があり、1では指ナデであるのに対し、2では約5cm幅で端部付近にヨコハケを施す点が特徴的である。

3は、接合して口縁部および上部2段の突帯（タガ）が復元できた資料で、復元口径は37.7cmとかなり大型である。口縁端部は直線的に立ち上がり、内面にはB種ヨコハケが幅5cm施されている。これは外面のナナメハケと対応しており、粘土紐積み上げ工程の一段階であることが窺える。その他、最上段スカシ孔付近で外面ハケに変化（タテハケとナナメハケが切り合い）が見られ、ここでも粘土紐積み上げ工程の段階が想定される（図中の矢印部分）。突帯はやや高めで中央が窪む台形を呈するものである。丁寧に貼り付けられており、ナデにより突帯下端がやや張り出している。スカシ孔は円形で、口縁部を除く2段に、直交する形で二つ穿たれている。

第3図4は、3と同様、上部2段の突帯まで残る資料であり、復元口径は35.6cmを測る。口縁端部には内外面ともにハケが施されており、3と同じく内面には幅5cmのB種ヨコハケが施されている。突帯についても、やや突帯下端がナデにより張り出す形態である。最上段スカシ孔付近で、内面に口縁端部内面と同じくB種ヨコハケが見られ、外面もややハケが切り合うことから、口縁端部の他に、粘土紐積み上げ工程で「擬口縁」となっていた可能性が高い。突帯は上下に曲がることなく丁寧に真っすぐ貼り付けられている。

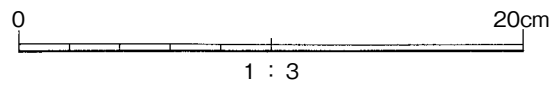
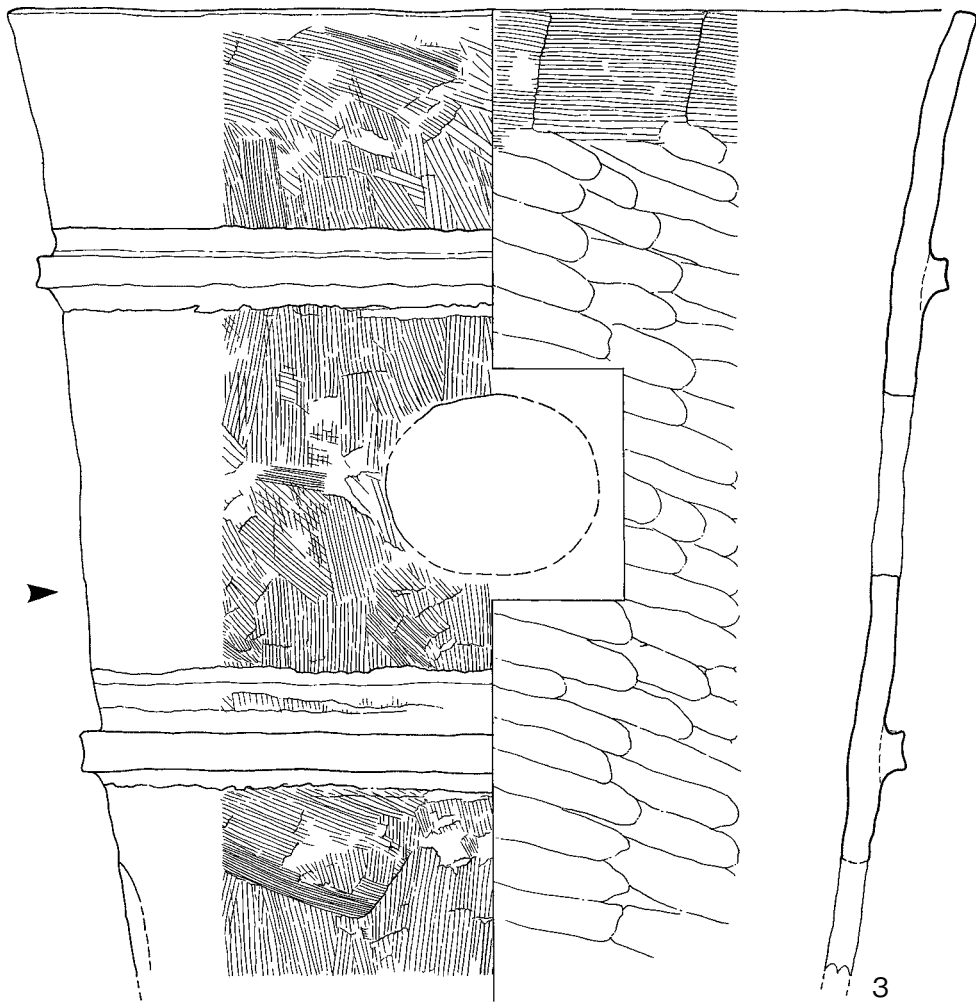
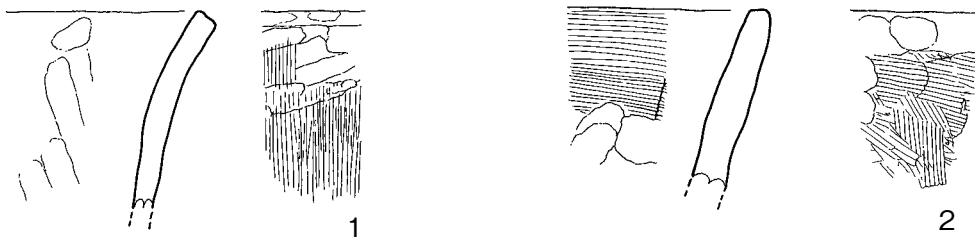
5は突帯付近の破片である。特徴は3・4と同様であり、突帯も丁寧に貼り付けている。

6はスカシ孔が一部に確認できるが、内面にヨコハケが見られる点に注目したい。4と同様、スカシ孔内面付近にも同様のヨコハケがあることを考えると、粘土紐積み上げ工程の一段階としての「擬口縁」を呈していた可能性が十分に考えられる。下部には突帯の剥離痕もみられる。

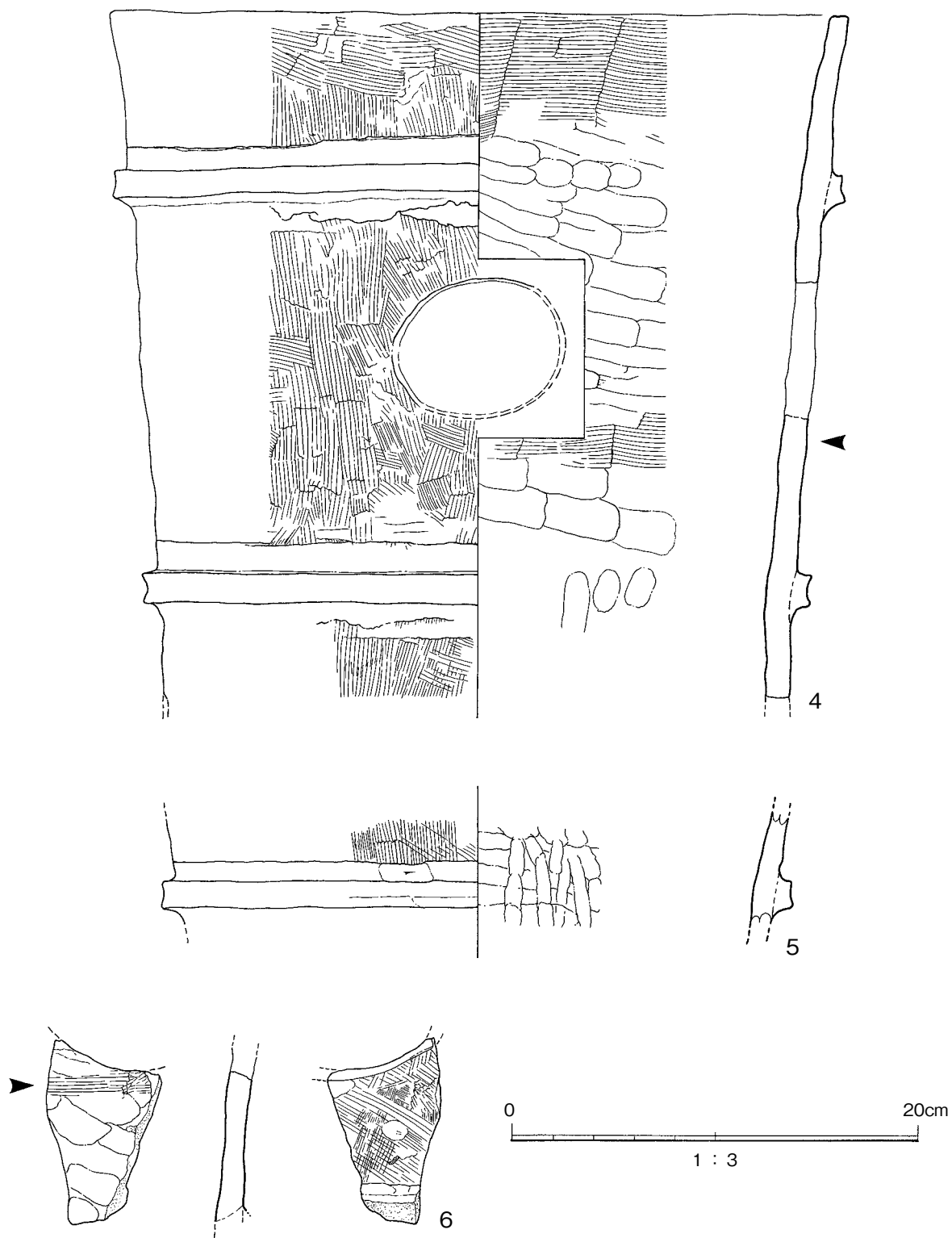
（3）資料の評価

これまで紹介した資料をもとに、本古墳資料における幾つの特徴を述べておく。

- ① 復元できる個体は口径35～40cmの大型品であり、突帯も最低3段以上有する。
- ② 口縁部内面に、幅5cmの（B種）ヨコハケが施されている個体を含む。
- ③ 粘土紐積み上げ工程を示す痕跡が内外面で幾つか確認できる。
- ④ 突帯は断面形が台形で中央がやや窪み、丁寧に真っすぐ貼り付けられている。
- ⑤ スカシ孔は一段につき2個、段を違えて直交している。



第2図 松山市・二つ塚古墳・埴輪（1）



第3図 松山市・二つ塚古墳・埴輪（2）

⑥ 焼成はきわめて良好で、須恵器のそれと同様なものも含まれる。

これらの特徴は、これまでの川西宏幸氏の編年案（川西1978）に従えば、川西V期に該当すると思われるが、その詳細な位置付けについては、氏の編年では困難であり、小地域ごとの円筒埴輪の様相を捉えた上ではじめて可能となる。ちなみに、『遺跡』第25号にて報告されている埴輪片については、「6世紀前半」という評価を与えていたが、実際にはその資料だけでは困難である。

3 各製作工程上の特徴

二つ塚古墳出土の資料を例にとっても、様々な製作工程上の特徴が抽出できることから、次にこれまで確認してきた愛媛県内出土の円筒埴輪資料（特に松山平野を中心に）をもとに、突帯、器面調整、基底部の三点から私見を述べてみたい。

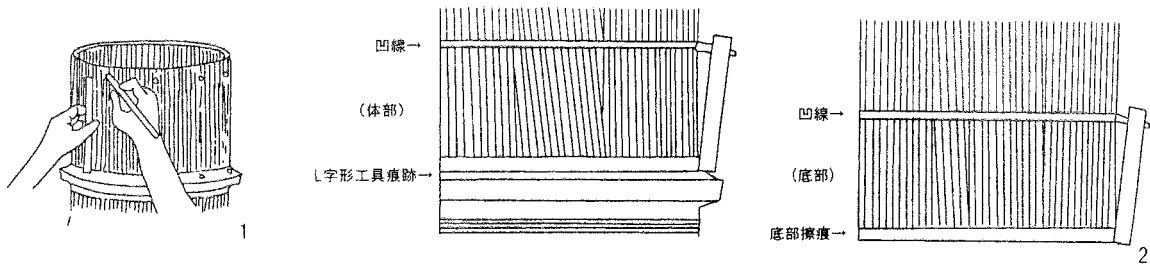
(1) 突帯（第4～7図参照）

一般的には、突帯高の変化（高いものから低いものへ）を編年の一指標と認識していたが、実際には、このような変化を生む要因を捉えることが重要である。この点については、突帯貼り付けに関する間隔設定復元（辻川1999・2003、鐘方1997）や、器面に貼り付ける手法としての「断続ナデ技法」の復元（中島・鐘方1992）、更にはこれらを総合的に解釈しようと試みた藤井幸司氏の論考（藤井2003）により、より詳細な考察が進んでいる。県内資料でも、この点について以前から観察してきたが（山内2001b・2002）、若干差異を指摘することができる。

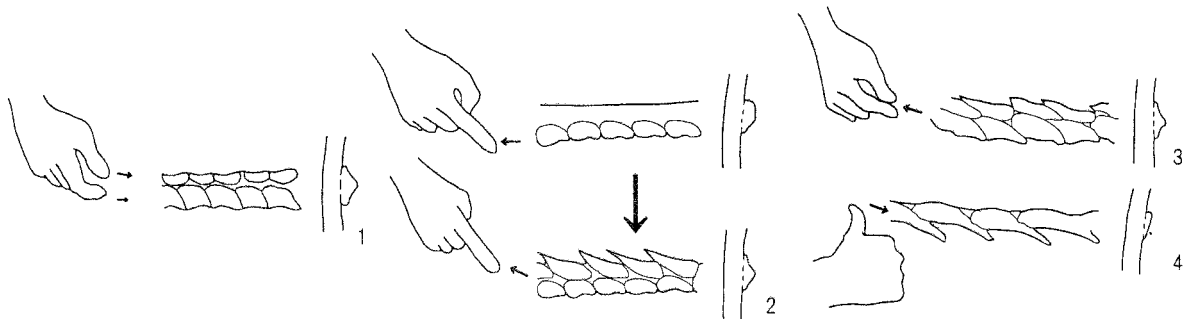
先ず、突帯形状と貼り付け方法の検討であるが、中期古墳としている北条市・小竹9号墳出土の埴輪（山内2003a）は、比較的しっかりとした突帯で、突帯へ施されたナデ調整により、貼り付け時の指頭跡（指ナデ付け・オサエの痕跡）は確認できない。また、時期的に後続する朝倉村・樹之本古墳（山内2001b）では、断面台形で丁寧にナデ調整された突帯に混じり、やや低平で「M」字形に近い個体も存在する。これらの個体は、器面貼り付け後のナデ調整がやや甘いため、指でナデつけて貼り付けた際の指の窪みが薄くではあるが残る点で、やや省略化の進んだ感もある。

5世紀末～6世紀初頭にかけての築造とみられる松山市・大池東4号墳（高尾ほか1998）では、突帯断面台形を呈する、ナデ調整の丁寧な個体が見られるほか、突帯下端のナデ調整が弱いいためか、貼り付け時の強い指跡が残る個体が多く、断面「三角形」状のものもあり、省略傾向がさらに強まっている。松山市・船ヶ谷向山古墳（池田・宮崎1989、山内2001b）では、小型（口径20cm前後）の個体については大池東4号墳のものと類似した傾向性を示すが、口径20cm前後の中型品については、断面台形で貼り付け後のナデ調整が顕著な個体が存在する。このように法量による特徴の違いも見られる。

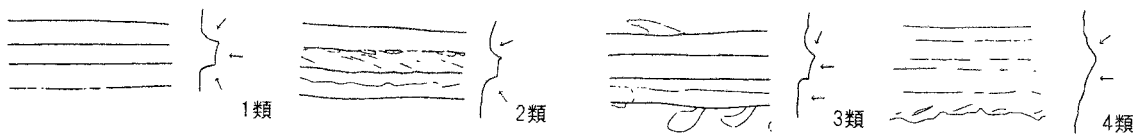
6世紀前半と考えられる播磨塚天神山古墳（吉岡2001）や三島神社古墳（森ほか1972、山内2001b）出土の円筒埴輪は、これまでの円筒埴輪と比べてやや大型化の傾向を示す。播磨塚天神山古墳では、低平で「三角形」状あるいは「M」字形の突帯が目立つ。これは、器面貼り付け後のナデ調整が強い、または突帯整形が省略された結果であるためと考えられる。突帯貼付は、上



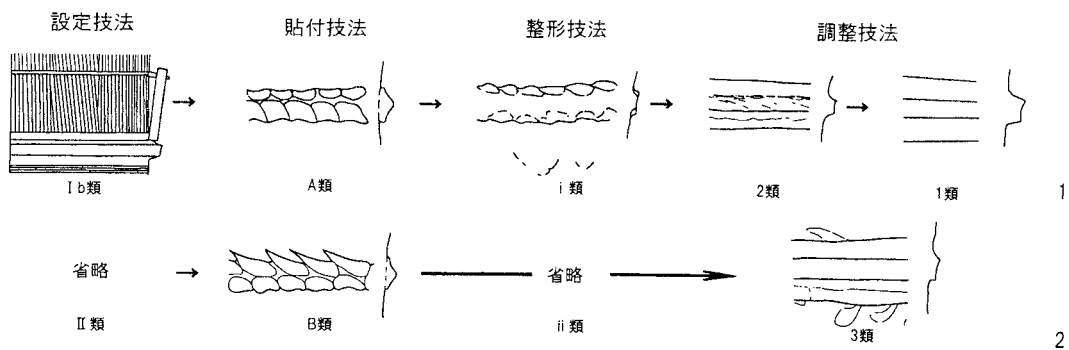
第4図 突帯間隔設定技法模式図 (辻川 1999、鐘方 1997 より引用)
 [1: 刺突 (A) 手法 2: 凹線 (B) 手法]



第5図 突帯張付技法模式図 (藤井 2003 より引用)
 [1: A類 2~4: B類]



第6図 突帯調整技法模式図 (藤井 2003 より引用)
 (図中の←は、ナデを示す)



第7図 突帯製作技法復元図 (藤井 2003 より引用)

下に波打っており、突帯間隔の設定など行われていないことがわかる。三島神社古墳では、最下段突帯に「断続ナデB」手法が確認できる個体が多く、調整時のナデが省略された形になっている。その他の段も「断続ナデB」による貼り付けの後、調整ナデにより「三角形」状を呈する。ここでも突帯は上下に波打って貼り付けられており、突帯設定手法の存在は確認出来ない。

砥部窯跡群および周辺の古墳工房跡より出土する埴輪（阪本1981、山内2000）には、極めて低平で幅広の「M」字形の突帯を持つものが多いほか、幅狭で断面台形の小さな突帯をもつ両者が存在している。この傾向性は6世紀末頃まで続くものと考えられる。このように、断面台形から「三角形」状、そして「M」字形という一つの流れだけでは説明しきれないことがわかる。

つまり、①断面台形で整形・調整の丁寧な突帯を持つ段階（ナデ付けの痕跡が残らない）②断続ナデによる貼り付けが荒く、ナデ調整では消し切れていない、断面台形または「三角形」状の突帯をもつ段階③低平で堅固に貼り付けられている突帯と、幅狭で台形の突帯が両存している段階、の3段階がみられ、その背景には、器壁への貼り付け手法の粗雑化、そして整形後のナデ調整手法の変化が影響していると思われる。

（2）器面調整

器面内外面に施されるハケ、ナデなどの調整については、川西氏も編年基準の一つとしており、その後、突帯貼付後の「二次調整」としての「B種ヨコハケ」について、一瀬和夫氏をはじめとして詳細な論考がなされている（一瀬1988）。愛媛県内においても、B種ヨコハケの存在は小竹9号墳や樹之本古墳などでも確認されており、導入時期は他地域と大きな差異はないが、船ヶ谷向山古墳および松山市・東野お茶屋台18号墳出土資料（梅木ほか2002）など、さらには二つ塚古墳などでは口縁端部内外面に限って、ヨコハケ（B種ヨコハケを含む）が残る特徴をもつ点は注目される。しかも、これらの特徴を持つ埴輪は、比較的大型（口径25cm以上が主）の個体で、なおかつ突帯台形で丁寧なナデ調整を施しているものに今のところ限られる。これは中期古墳の埴輪がもつ属性の名残であると思われるが、時期的にはそれほど後に残るものではない。

その後は、二次調整を施すものは見られず、タテないしはナナメハケの一次調整（突帯貼付前）を施すものや、三島神社古墳や斎院茶臼山古墳（西尾1983）出土埴輪のように、ナデ調整のみの個体もある。ハケ原体については、砥部窯跡群で見られるハケ目の粗い個体（3本/cm）が特徴的であり、須恵器と同じ焼成・色調とあわせて注目される。

（3）基底部調整（第8図参照）

これまでは「底部調整」として川西氏がV期の指標としたものであるが、実際に観察すると様々な工程および手法があることが明らかとなってきている（山内2003b、2003c）。

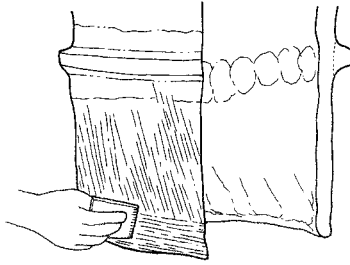
基底部調整は、その個体状態により、大別して①基底部正立調整、②基底部倒立調整に分けることができるが、①については、県内資料では今のところ確認していない。しかし、中期古墳出土の埴輪資料の中には、成形途中で自重による歪みを直すために基底端部をナデ調整する個体があることから、今後確認される可能性は高いと思われる。

②の「基底部倒立調整」については、大きく三つの工程が想定される。つまり、I工程（押圧・打圧¹⁾）、II工程（ハケ・ナデ）、III工程（ケズリ）がそれに該当するが、県内資料でI～III工程

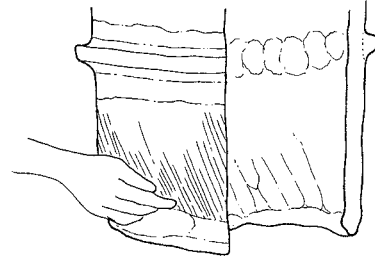
基底部正立調整

〔工程途中
および
最終段階〕

・ハケ
・ナデ
・ケズリ
など



・工具によるナデ・ハケ調整



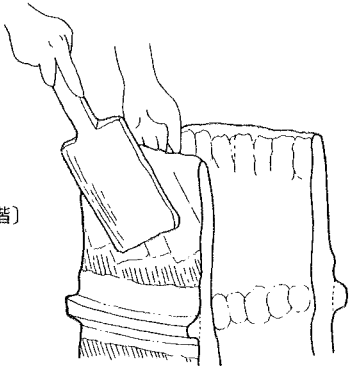
・指によるナデ調整

基底部倒立調整

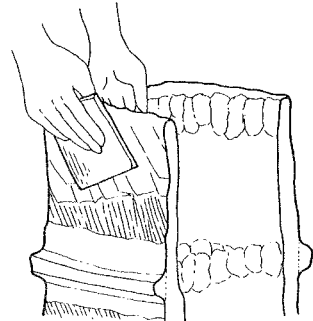
〔最終段階〕

I 工程

(基底部倒立タタキ
オサエ)



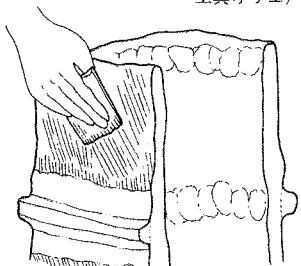
・板状工具によるタタキ(打圧)
(棒) (内面指または
工具オサエ)



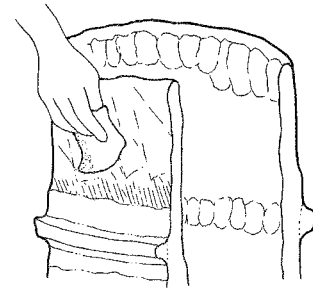
・板状工具によるオサエ(押圧)

II 工程

(基底部倒立ハケ
ナデ)



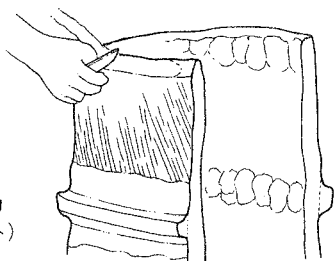
・工具によるハケ調整



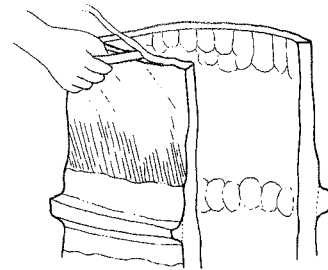
・指または布(皮?)によるナデ調整

III 工程

(基底部倒立ケズリ
カット)

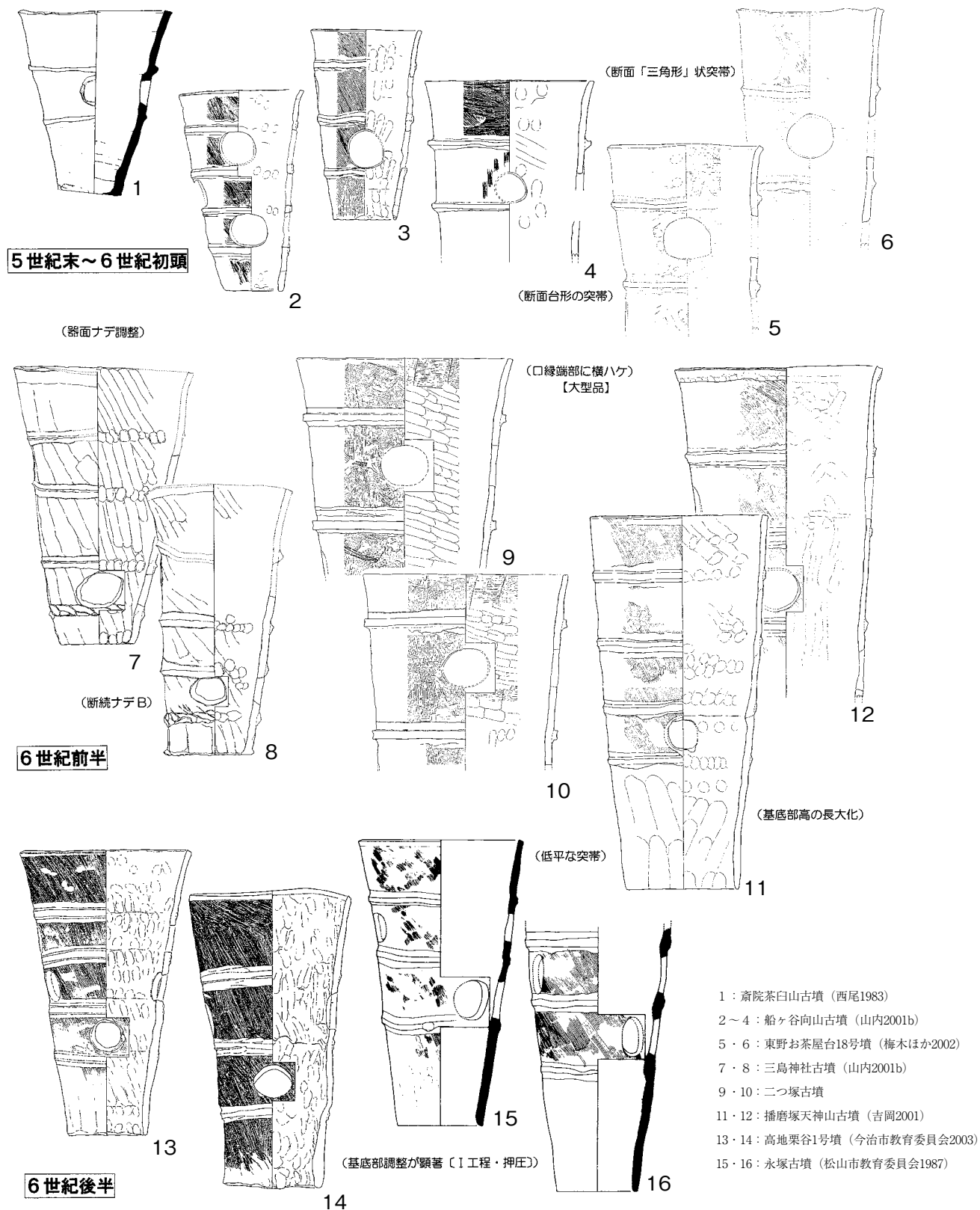


・工具による底端部のカット(ケズリ調整)



・工具による底端面のカット(ケズリ調整)

第8図 円筒埴輪「基底部調整」モデルケース (山内2003bより)



第9図 県内 (特に松山平野) の円筒埴輪様相 (S = 1/10)

を連続して行う個体は今のところ見当たらない。しかし、三島神社古墳や今治市・高地栗谷1号墳（今治市教委2003）出土資料では、I工程の中で二段階にわたり（押圧を上下2段）施すものや、松山市・城山東1号墳（長井1999）のようにタタキ板で打圧により施されるものなどが確認されている。また、I・II工程を省略してのIII工程については、樹之本古墳をその始まりとして、砥部窯跡群（谷田2号窯）の個体にも確認できる。

基底部高については、播磨塚天神山古墳の段階から長大化が顕著となり、基底部径に比べ、同じかそれ以上（基底部高／基底部径 ≥ 1 ）の個体が多くなる傾向性が窺える。この要因の一つには、基底部倒立調整・I工程による押圧や打圧で基底部が伸びたことが考えられる。

4 おわりに

松山市・二つ塚古墳の埴輪資料を加えた上で、製作工程の諸段階で確認できる幾つかの属性について、県内の事例をもとに検討を行った。幾つかの属性のみで二つ塚古墳資料の時間的位置付けを試みるのは困難ではあるが、口縁部内面のB種ヨコハケの存在や突帯の製作手法、さらに焼成技術より判断すると、東野お茶屋台18号墳の段階に後続する段階、つまり6世紀前葉に比定されるものと思われる。これは、三島神社古墳や播磨塚天神山古墳などの築造年代と大きな時間差がないことを示すものである。

今回の県内円筒埴輪の製作工程観察は、あくまで膨大な属性の一要素であり、実際には上記のほか、突帯構成、スカシ孔の形状や方向、数、乾燥工程の確認など、総合的に分析することで、県内の円筒埴輪編年に向けての基礎資料が整うものと思われる。県内の埴輪資料は破片資料が圧倒的に多く、個体全体を復元できるものは数える程である。今後もこのような破片資料を有効に活用しながら、畿内の埴輪編年枠では解釈できない「地域の」埴輪研究を地道に進めてゆきたい。

最後になりましたが、本稿を執筆するにあたり、梅木謙一氏には資料観察の機会を与えて下さり、水口あをい、山下満佐子、平岡直美、大西陽子、日之西美春、西本三枝の諸氏には埴輪資料に関する資料提供・ご助言を頂きました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

(2003年10月30日)

註

- 1) これまでは「タタキ」として説明していたものであるが、須恵器甕などのタタキ成形などと用語が重なるため、今回は押圧調整にあわせて「打圧」とした。基底部打圧調整の認定には、対応する内面当て具（指オサエや工具痕など）が必要であり、観察には注意を要する。

参考文献

- 池田 学・宮崎泰好1989「船ヶ谷向山古墳」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』松山市教育委員会
一瀬和夫1988「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」『大木川改修にともなう発掘調査概報Ⅴ』大阪府教育委員会

- 今治市教育委員会2003『高地栗谷1号墳・現地説明会資料』
- 梅木謙一ほか2002『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 岡田敏彦2001「愛媛県における首長墳素描」『紀要愛媛』第2号 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 鐘方正樹1997「前期古墳の円筒埴輪」『堅田直先生古稀記念論文集』真陽社
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2
- 阪本安光1981「谷田Ⅴ・Ⅵ遺跡」『愛媛県総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会
- 高尾和長ほか1998『大峰ヶ台遺跡Ⅱ-9次調査-』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 田城武志ほか2004『来住・久米地区の遺跡Ⅳ』松山市教育委員会
- 辻川哲朗1999「円筒埴輪の突帯間隔設定技法の復元-埴輪受容形態検討の基礎作業として-」『埴輪論叢』1
- 辻川哲朗2003「突帯-突帯間隔設定技法を中心として-」『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』第52回埋蔵文化財研究集会
- 長井数秋1998「松山市城山東1号古墳出土の須恵器と埴輪」『ソーシャル・リサーチ』23
- 中島和彦・鐘方正樹1992「菅原東遺跡埴輪窯跡群をめぐる諸問題」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』1991
- 長山源雄1927「伊予の古代文化」
- 西尾幸則1983『斎院茶臼山古墳』松山市教育委員会
- 二つ塚古墳調査会・愛媛大学歴史学研究会1984「松山市二つ塚古墳調査報告」『遺跡』第25号
- 松山市教育委員会1987「永塚古墳」『松山市史料集・第2巻(考古編Ⅱ)』
- 宮脇通赫1894『伊予温古録』
- 森光 晴ほか1972『三島神社古墳』松山市教育委員会
- 森光 晴1986「二つ塚古墳」『愛媛県史』資料編・考古
- 山内英樹2000「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(1)-谷田2号窯出土資料の再検討-」『紀要愛媛』創刊号
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2001a「伊予における後期首長墳の動向-松山平野北部を中心とした様相について-」『中国・四国前方後円墳研究会 第7回研究会・前方後円墳時代後期首長墳の動向』
- 山内英樹2001b「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(2)-特徴的な形態・技法を有する埴輪について-」『紀要愛媛』第2号 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2002「東野お茶屋台遺跡(3次)出土埴輪の諸問題-18号墳出土資料より」『桑原地区の遺跡Ⅳ』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 山内英樹2003a「愛媛県出土埴輪の基礎的研究(3)-北条市浅海出土の埴輪について-」『紀要愛媛』第3号
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2003b「埴輪研究の現状と課題-『基底部調整』をめぐる諸問題について-」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター
- 山内英樹2003c「円筒埴輪製作工程における『基底部調整』」『埴輪-円筒埴輪製作技法の観察・認識・分析-』第52回埋蔵文化財研究集会
- 吉岡和哉2001『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

砥部川流域の古墳における階層性について

—古墳群概観—

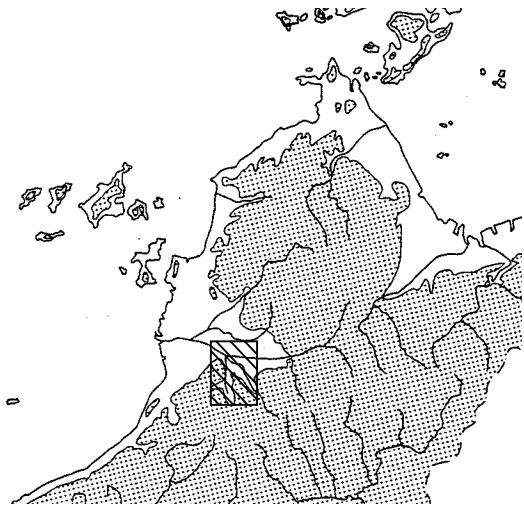
岡田敏彦

1 はじめに

砥部川流域は愛媛県内で最も発掘調査を実施した遺跡・古墳の多い地域である。古墳の発掘調査は昭和40年代の大下田1号墳に始まり、愛媛県総合運動公園・上野町住宅団地・国道建設・砥部動物園などの開発に伴う発掘調査を愛媛県教育委員会・財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが実施、その後も宅地開発による発掘調査を砥部町教育委員会が実施している。

砥部川兩岸の丘陵上に広がる古墳は、愛媛県教育委員会が実施した古墳分布調査や周辺の発掘調査時に実施した分布調査で207基にのぼり、そのうちの115基が調査対象となり68基について報告が行われている。未報告の47基は同一古墳群に属しており1古墳群すべての発掘調査を実施したものである。

今回の考察には報告済の古墳とともに未報告の古墳についても手持ち資料でわかる範囲の考察を加えることにしたい。



第1図 砥部川流域位置図

2 古墳群の位置

砥部川流域は松山平野を東西に貫流する重信川左岸、松山平野南部に広がっている。砥部川左岸は障子山から派生する丘陵が南西から北東に向かって幾重にも伸びており、それらの丘陵の間に小河川が深く切れ込んでいる。丘陵は洪積台地の残存丘陵（地形分類では小起伏山地・大起伏丘陵など）でその稜線は比較的緩やかで上部に平坦な面が広がっている。また丘陵裾部には小規模ではあるが河岸段丘（地形分類では扇状地・下位砂礫台地）が広がっている。砥部川右岸は大友山から派生する丘陵となっているが左岸に比べ丘陵上の平坦面は狭くなっている。また丘陵先端には広い河岸段丘（地形分類では中位砂礫台地）を形成している。

旧国郡名では伊予国浮穴郡出部郷にあたる範囲である。

3 群を構成する古墳の形態

群を構成する個々の古墳について土壇原古墳群において形態を概観した文章（岡田 1986・2002）がある。愛媛県史でV型式に分類後、新たに2型式を追加した。本流域で最も古い形態と

考えられるものは従来、Ⅰ・Ⅵ型式としたものであるが、Ⅰ型式とⅥ型式の最も大きな差は内部主体が単一葬（Ⅰ型式）・複数葬（Ⅵ型式）の差である。また、Ⅰ型式には内部主体に差があるなど分類も不十分なものであり、Ⅰ～Ⅶ型式が時間軸を示すものでもなかった。そこで今回、時間軸を考慮しながら、砥部川流域の古墳について類型私案を簡単に記し、各古墳群の概要説明に使用したい。

Ⅰ類（4～6世紀）

従来、土壇原古墳群Ⅰ型式の「方墳で内部主体が石棺（粘土槨）となるもの」としていたものに土壇原古墳群Ⅵ型式としていた「方墳で内部主体が木棺直葬となるもの」を加え、内部主体の状況により三つに細分する。

Ⅰ類－1

土壇原Ⅴ遺跡内にある方形周溝墓群である。形態は方形周溝内に複数の内部主体をもち、その中に組み合わせ木棺を取めた中心主体を有するもの。

Ⅰ類－2

土壇原Ⅰ遺跡1・2号方形周溝墓で方形周溝の中央に石棺（粘土槨）を内部主体としたもので、土壇原古墳群Ⅰ型式（方墳で内部主体が石棺（粘土槨）となるもの）としたもの。

Ⅰ類－3

土壇原Ⅰ遺跡3号方形周溝墓で方形周溝の中央に刳り貫き木棺を内部主体としたものである。この遺構は箱式石棺を内部主体とする方墳と周溝を共用しており土壇原古墳群Ⅰ型式としたものの範疇に含まれると考えられるが内部主体が刳り貫き木棺であることから細分したもの。

Ⅱ類（4世紀）

土壇原古墳群Ⅲ型式としていた土壇原10号墳で円墳に川原石を使用した石棺を内部主体とするものである。土師器・鉄器を副葬する。

Ⅲ類（5世紀前半）

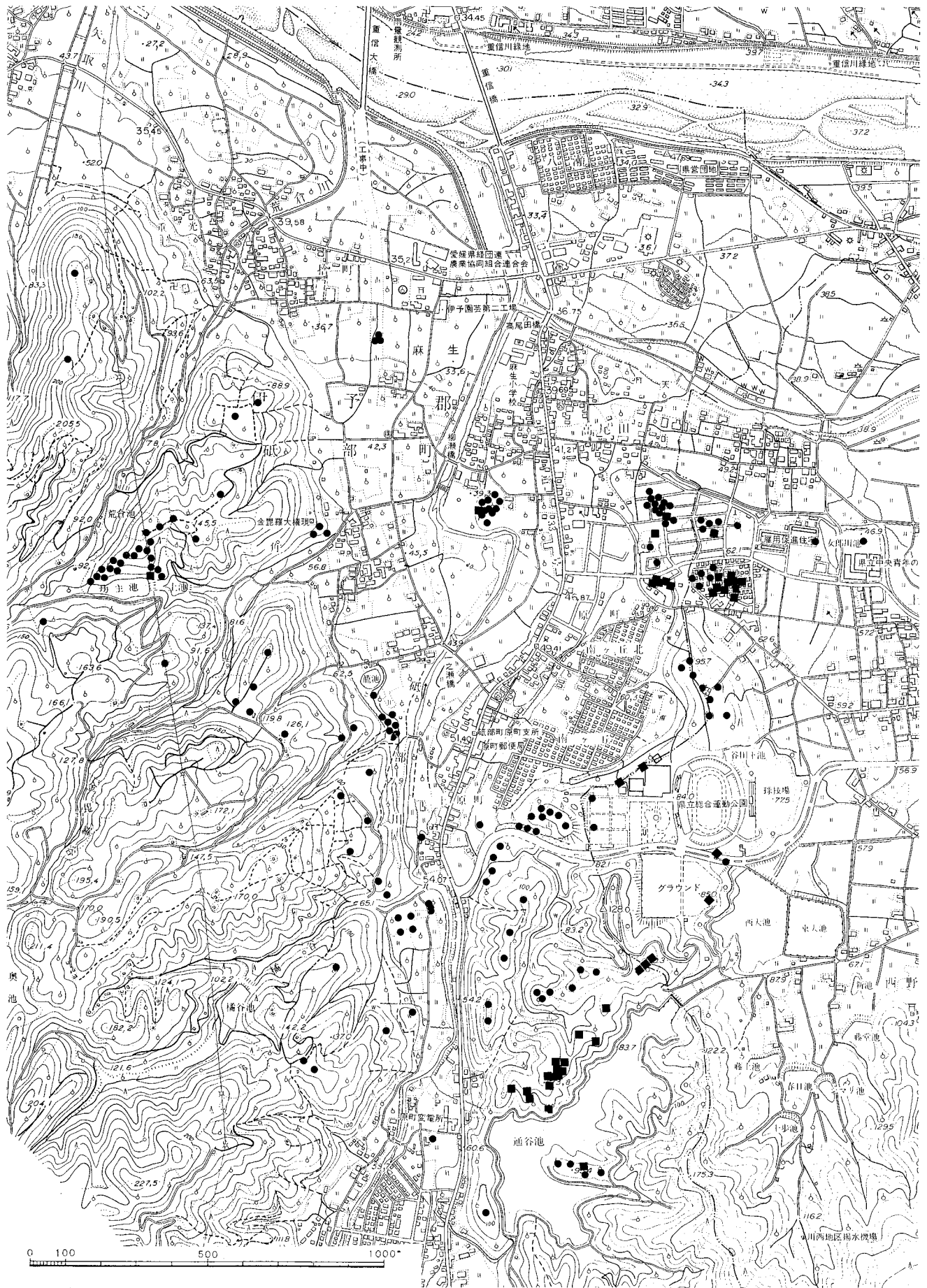
土壇原古墳群Ⅱ型式としていた土壇原5・11号墳で方墳に竪穴式石槨を内部主体とするものである。この型式が他の型式と異なるのは内部主体の構築方法にある。竪穴式石槨は墳丘基盤面上に盛り土をした後、構築されている。そのため、後世の開墾により内部主体が完全に破壊され、古墳発見時、内部主体不明となる可能性が最も高いものである。

Ⅳ類（5世紀後半～6世紀）

最も多く構築された墳形である。土壇原古墳群Ⅳ型式としていた円墳で内部主体が横穴式石室となるものである。円墳ではあるが外表施設では溝を持つものと削り出しによる有段のものがあり内部主体の横穴式石室の形状により、今回は「小型の石を利用して、羨道部の短い直線的な横穴式石室を構築している」（土壇原古墳群Ⅳ型式－1）、「やや大型の石を利用して、やや胴張りの横穴式石室を構築」（土壇原古墳群Ⅳ型式－2）に分類している。

Ⅴ類（7世紀初頭）

土壇原古墳群Ⅴ型式としていた「コ」字状の溝により方墳とし、内部主体が横穴式石室となるものである。土壇原1・2号墳がこの型式である。



■ 方墳 ● 円墳 □○ 推定古墳

第2図 砥部川流域古墳分布図 (1/15,000)

ほかに円筒埴輪を利用した円筒埴輪棺があり、従来、土壇原古墳群Ⅶ型式としていたがこの形態は特殊であり型式分類として扱うには問題のあるものである。なお、土壇原遺跡群には外表施設不明で須恵器・土師器を副葬する土坑墓群があることも判明している。

4 古墳群の概要

砥部川流域における各古墳群の分け方は、小河川による開析谷にはさまれた範囲を1古墳群とする方法が従来行われてきた。しかし、この方法では複数の丘陵を含むものや丘陵上・河岸段丘上を含む広範囲な広がりとなるものが少なくない状態である。今回、従来の古墳群分割ごとにその分布を概観しながら、より地形に添った形での群・支群構成範囲について検討を加えたい。なお、本文中「地名（ルビ）」は砥部町編集の『とべの地名』に掲載されたものである。

砥部川左岸

水満田（ミツマタ）古墳群

河岸段丘部（Ⅳ類TK10～TK209型式併行期（6世紀中葉～末：9～10期））

丘陵部（Ⅳ・Ⅴ類MT85～TK209型式併行期（6世紀後半：9～10期））

砥部川左岸最下流域の古墳群である。荒倉川と金毘羅谷川に挟まれた洪積台地残丘（大起伏丘陵）から河岸段丘（下位砂礫台地）上にかけて分布している。丘陵上の古墳は標高145mの頂部からヤツデ状に伸びる稜線上および南斜面に立地している。頂部から南西に伸びる稜線の南斜面については砥部町の古墳公園建設のため詳細な分布調査が行われ、20基を超える古墳（金毘羅山古墳群）の存在が知られている。また、頂部から南東に伸びる稜線端（理正院境内）には3基の古墳の存在が知られている。台地上の古墳は標高40m部分に立地し、国道建設工事において3基の石室について発掘調査が行われた。工事対象の狭い範囲において3基の石室が見つかったこと、また、「塚田（ツカタ）」の地名や周辺の畑でも過去に耳環の出土など古墳の存在を窺わせるものもあることから、周辺の台地上にはより多くの古墳が築造されたものと考えられる。

本古墳群中で発掘調査を実施した古墳の概観についてみていく。丘陵上の3基は後世の開墾により上部を削平され石室のみの調査である。水満田1号墳石室は最も大きなもので玄室長3.1m、玄門は積み石、玄室内に仕切りを設けている。使用期間もTK10～TK209型式併行期にかけて使用されている。水満田2号墳石室は水満田1号墳石室の奥壁裏に寄り添うように構築されており単独古墳ではなく1号墳石室に付属する2号主体と考えるのが妥当と考える。水満田3号墳石室も水満田1号墳石室横に隣接しており墳丘を想定した場合、水満田1号古墳の墳丘内に収まる状況である。石室規模も小さく玄室長1.7mで出土須恵器からTK10型式併行期の単一埋葬と考えられ、追葬を想定できる水満田1号墳石室とは明らかに築造意図を異にしている。

丘陵部では丘陵上の金毘羅山2・3号墳・やや下がった稜線上の金毘羅山12・21号墳の発掘調査を実施している。金毘羅山2号墳は古墳群中最高所に位置し、MT85型式併行期に使用されており、他の古墳に先駆けて構築されている。墳丘規模は17mの円墳と古墳群中一般的なものであるが石室規模は全長8m・玄室長4.5mと大きく外護列石・円筒埴輪・形象埴輪を持つものである。金毘羅山3号墳は稜線をやや下がったところに位置し、墳丘規模は20mの円墳で金毘羅山4

号墳とともに古墳群中最大である。石室規模では金毘羅山2号墳をやや下回り、石室全長7.4m・玄室長4.3mで使用時期は金毘羅山2号墳よりやや遅くTK43型式併行期に使用されている。金毘羅山12号墳は稜線をさらに下がったところに位置している。墳丘規模は不明、石室規模は石室全長6.5m・玄室長3.6mで金毘羅山3号墳よりさらに一回り小型化している。

古墳の形態はほとんどがIV類である。

この古墳群については砥部川流域で最も広範な範囲を1古墳群としており、谷若倫郎氏により問題提起が行われている（谷若1988）。古墳群・支群名称に地名を使用する場合、河岸段丘上の古墳は「烏帽子形（エボシガタ）」、丘陵上に置いて発掘調査を実施している水満田古墳公園の範囲は「日向（ヒムキ）」、理正院境内は「坤山（コンザン）」となり谷若指摘のとおり「小字の示す範囲が古墳の分布状況と必ずしも合致しない」ことから、他の古墳群の捉え方と同様に、丘陵上と河岸段丘上の2群に分け、河岸段丘上に分布する古墳を「水満田古墳群」、丘陵上に分布する古墳を「金毘羅山古墳群」と呼称したい。なお「金毘羅山古墳群」については「水満田西古墳群」の呼称も使用（宮崎1993）されている。

三角古墳群

（未調査 IV類？）

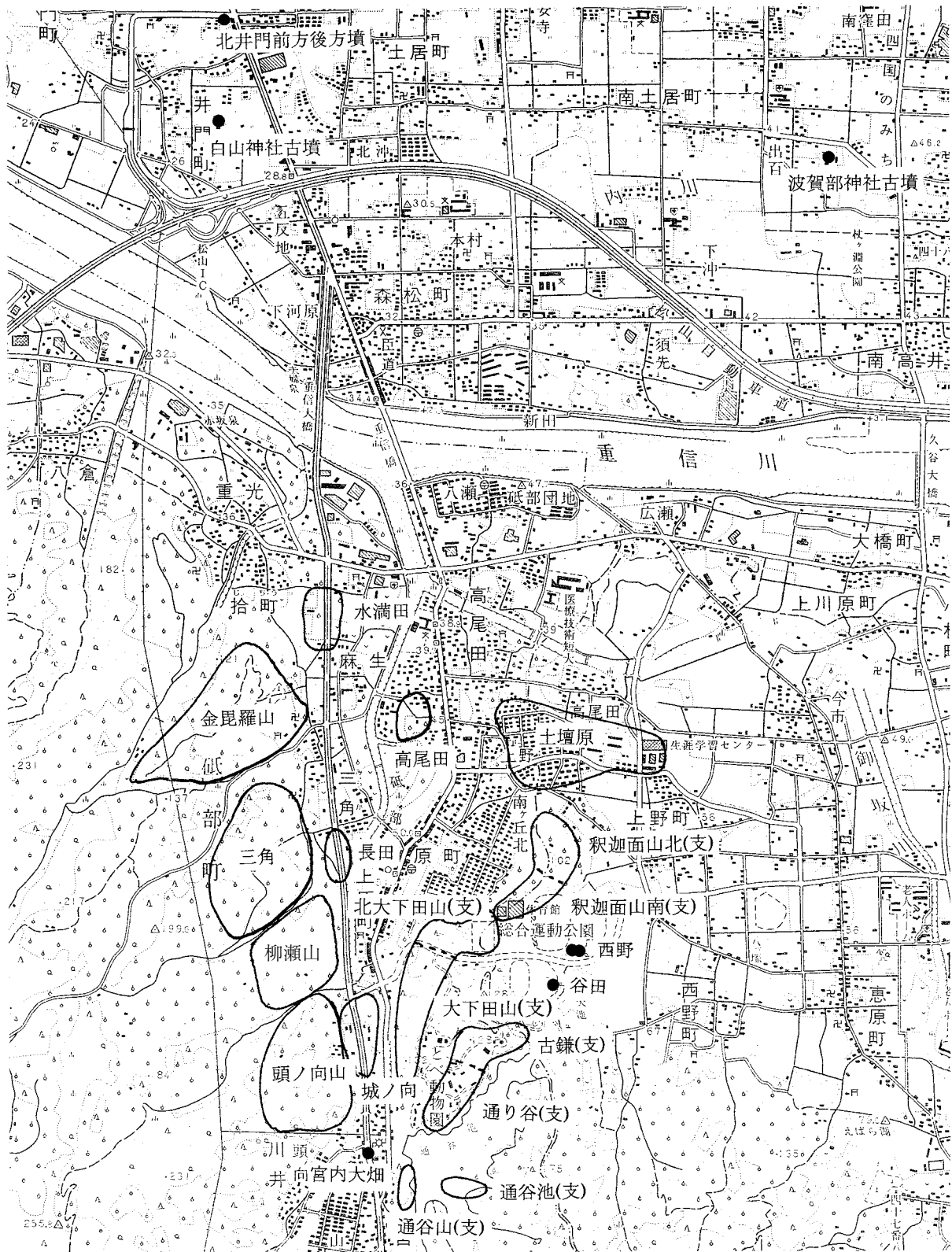
金毘羅谷川右岸の洪積台地残丘（大起伏丘陵）上に立地し、三角（ミヨウカ）集落の西に位置している。南に続く柳瀬山古墳群との間は「淵立（ブツタテ）」といわれる小開析谷が深く切れ込んでいる。標高は120mで裾部の河岸段丘（扇状地）との比高は65mである。丘陵上に5基、東斜面に2基の古墳が確認されているが詳細は不明である。丘陵上の地名は「十波山（トウバヤマ）」「落谷（オチタニ）」「叔父ヶ谷（オジガダニ：通称は『おむぎ山』）」、東斜面は「池の上（イケノウエ）」である。西側にはさらに上位の丘陵面（地名「行者山（ギョウジャサン）」）でこの範囲からは火葬蔵骨器が4基出土（岡田1997）している。）が存在するが現段階で古墳は確認していない。調査は実施していないが過去に鏡の出土が伝えられている。

長田古墳群

（IV類 MT15～TK209型式併行期（6世紀前半～7世紀初頭：9～10期））

三角古墳群の立地する丘陵裾に広がる河岸段丘（扇状地）上（地名「長田（ナガタ）」）に8基の古墳が確認され、6基の古墳が国道建設に伴い発掘調査されている。視覚確認できる古墳は現段階で2基だけとなっているが試掘調査を実施すれば基数は確実に増加すると考えられる。

確認している古墳のほとんどを発掘調査している。丘陵傾斜に張り付いたように位置する2基の古墳は未調査である。長田1号墳は墳丘規模20mで本古墳群中最大の規模と考えられ、裾部の調査で外護列石を確認している。狭小な河岸段丘（扇状地）上に立地する長田2号墳は周溝を持つ円墳で周溝外周での規模（墳丘総長）は17m、石室規模は石室全長5.5m・玄室長3.3mである。MT85～TK209型式並行期に使用された古墳である。調査実施古墳では規模の大きなもので出土須恵器は子持ち高杯一対をはじめ多く、玉類でも水晶製切子玉12個など他の古墳を大きく上回っている。使用時期ではMT15型式併行期に長田6号墳が構築されその後、4号墳→2号墳→7号墳→3号墳と構築されたと考えられる。本古墳群では長田1・3号墳に第2主体部として箱式石



第3図 砥部川流域古墳群分割(1/25,000) (私案)

棺を構築、長田2号墳の周溝内に竪穴式石槨を構築している。(長田1号墳については、報告書で長田4号墳付属の箱式石棺としていたが、位置が長田4号墳の羨道前面となり不自然なことから隣接する長田1号墳裾部立地としたほうがより自然と考える。) また、周溝を伴うもの、有段のものなど墳丘・石室ともに多様な様相を示している。なお石室は丘陵上方である西側に開口しており、そのため羨道部分は急な傾斜となっている。なお、上部は開墾で削平されており羨道部規模は古墳築造時の状況を示しているとはいいがたいものである。

古墳の形態はⅣ類を基本とし、6・7号石室は特異な形状である。

柳瀬山古墳群

(未調査 Ⅳ類)

北側の三角古墳群および南側の城ノ向古墳群の所在する丘陵とは「湖立(ブッタテ)」「橘谷(タチバダニ)」と言われる小開析谷によって分断された標高100mの丘陵上面で4基の古墳、さらに南斜面で2基の古墳を確認している。本古墳群の裾部は急峻な斜面となり、直接砥部川に接し、河岸段丘(扇状地)等は形成されていない。農道建設に伴い、水晶製管玉が出土している。

地名は「柳瀬山(ヤナゼヤマ)」である。

城ノ向古墳群(頭ノ向古墳群含む)

(Ⅳ類 MT85~TK217型式並行期(6世紀中葉~7世紀初頭:9・10期))

砥部川右岸地域において現段階で確認されている最も上流部の古墳群である。地名は丘陵部分(小起伏山地)が「城ノ向(ジョウノムカイ)」、河岸段丘部分(扇状地・下位砂礫台地)が「川辺(カワベ)」である。

三角古墳群・柳瀬山古墳群同様、丘陵上に3基、東斜面に1基、裾部の河岸段丘上に8基の古墳を確認し、国道・県道工事等により裾部の8基の古墳で発掘調査が行われた。

発掘調査を実施した古墳中規模の判明しているもので最大のものは城ノ向2号墳で墳丘規模20m、石室規模は石室全長6.2m・玄室長3.5mである。城ノ向3号墳は城ノ向2号墳よりやや小型であるが石室規模では石室全長が8mと大きくなっており、外護列石を確認、城ノ向4号墳は周溝を持ち墳丘総長18m、石室規模は石室全長5m・玄室長4mである。さらに石室のみの調査であったが城ノ向1号墳は石室全長6.7m・玄室長4.3m、城ノ向8号墳は石室全長7m・玄室長4mと石室規模では城ノ向2・3号墳を上回っている。それぞれの使用時期では城ノ向2・8号墳が最も早くMT85型式並行期に構築され、TK209型式併行期まで使用されている。ほとんどの古墳は6世紀末から7世紀前半代に使用され城ノ向7号墳がTK217型式併行期まで使用されている。

古墳の形態はⅣ類である。個々の古墳では直線的な城ノ向1号墳と胴張りの城ノ向3号墳のような差異は見られる。

丘陵上部の古墳は未調査のため規模等は不明であるが、視覚的には大型と考えられる。現在は河岸段丘上から後背の残丘上までを「城ノ向古墳」、残丘奥側の2基を「頭ノ向山古墳」と呼称しているが地形的には河岸段丘上と残丘上を分けるほうが他の古墳群同様の地勢分割としては有効と考える。その場合、河岸段丘上の城ノ向1~8号墳を「城ノ向古墳群」、丘陵上の古墳を「頭ノ向山古墳群」とする。

砥部川右岸

土壇原古墳群

(I～V類 ～MT21型式併行期 (4世紀～7世紀：5～10期以降))

砥部川と御坂川にはさまれた洪積台地 (中位砂礫台地) 上に立地している。地名は「土壇 (ドンダ)」である。住宅地造成のため17haの範囲で30基以上の古墳の発掘調査を実施している。

古墳の形態は最も種類が多くI～V類すべてを含み、さらにどの類型にも属さないものも多い古墳群である。本古墳群は報告書未刊であり個々の古墳についての記載は報告書刊行を待ちたいが、「群を構成する古墳の形態」の項で各類の典型として使用したように古墳研究の根幹にかかわる重要な古墳群である。本古墳中最も残存状況の良好な1基は未調査で現地に残っている。

土壇原9号墳において横穴式石室を破壊した後改めて横穴式石室を構築している。時期はTK10型式併行期である。

高尾田 (タコウダ) 古墳群

(IV類 TK10～MT21型式併行期 (6世紀中葉～7世紀：9～10期以降))

砥部川右岸の河岸段丘 (下位砂礫台地) 上に立地している。最近の宅地開発に伴う発掘調査で存在を確認した古墳群である。地名は「上前田 (カミマイタ)」である。

ほとんどの古墳が全壊状態であるため不明な点が多いが古墳の形態はV類と考えられる。発掘調査を実施した古墳の内、墳丘規模は麻生小学校南4次3・5号墳が約15m、石室規模では麻生小学校南4次5号墳が石室全長3.1m・玄室長2.4m、麻生小学校南4次4号墳が玄室長2.8mと最大である。しかし、この数値は他の古墳群に比して小規模なものである。群を構成する古墳の実数は不明であり、今後の開発行為により他の古墳群を構成する古墳と同規模の古墳が見つかる可能性は有している。

古墳名は「麻生小学校南」としているがこの古墳群を含む一帯を「高尾田遺跡群」と呼称しており古墳群名も同一にしておいたほうが混乱を避けることができると考える。

釈迦面山古墳群 (南・北支群)

釈迦面北 (IV類 6世紀後半：9～10期)

釈迦面南 (I類-2 5世紀?：5期以前)

砥部川と御坂川にはさまれた洪積台地 (中位砂礫台地) 上に突出した小起伏丘陵上に立地している。地名は「釈迦面 (シャカメ)」である。南・北は「からす越え」と呼ばれる鞍部により分割する。

北支群は標高100mの幅広の稜線上に所在し、横穴式石室を内部主体とする古墳 (外観上は円墳) で須恵質の埴輪を持つ。古墳の形態ではIV類と考えられる。

鞍部南側の丘陵は稜線上も狭くなり、稜線上に3基の古墳が所在していた。釈迦面山1・2号墳は地山整形の方墳で内部主体は箱式石棺である。規模は釈迦面山1・2号墳ともに墳丘が25×20m、内部主体は釈迦面山1号墳が箱式石棺2基、釈迦面山2号墳が粘土槨である。釈迦面山1号墳第一主体に使用している側板用石材には小口用の石材を固定するための溝が穿たれ、蓋石も重ね部分に段が施されるなど丁寧なつくりとなっている。副葬品は少ないが特筆できるものに鹿

角製の柄を持つ剣が上げられる。本古墳群に続く両側の古墳群がすべて円墳で構成されていることから当釈迦面山古墳群の方墳は砥部川流域において構築された方墳の最も古式のものと考えられる。釈迦面山2号墳の周囲には弥生時代後期の方形周溝墓群（内部主体は単体の箱式石棺）である釈迦面山遺跡が所在する。

古墳の形態はⅠ類-2で箱式石棺を内部主体とする方墳が構築されている。

大下田古墳群（北大下田山支群・大下田山支群）

（Ⅳ類一部Ⅴ類 MT85～TK209型式併行期（6世紀中葉～6世紀末：9～10期））

北大下田山と南の大下田山一帯に分布し小起伏丘陵・小起伏山地稜線および南斜面に立地している。昭和41年に発掘調査が行われ県指定史跡となっている大下田1・2号墳や大下田3号墳は現在も見学可能であるが、ほとんどの古墳は発掘調査され運動公園に姿を変えている。調査古墳中最大のもので大下田3号墳で墳形は双円墳、規模は34×26.18mでA号石室側が幅が広がっている。形状から前方後円墳に加える研究者もある。B号石室は石室全長11.2m・玄室長3.7mである。墳丘規模では砥部川流域最大の古墳であるだけでなく石室内に障壁を設けており他の古墳と異なっている。石室全長でも大下田1号墳に僅か0.1m劣る程度である。古墳の使用時期はMT85型式併行期に大下田5号墳が構築されその後TK43型式併行期に大下田3・4号墳が構築・使用されたものである。本古墳では大下田2～4号墳が1墳丘二石室の構造となっており、さらに大下田4号墳は開口方向の異なる石室を破壊・埋め戻しを行った後に二石室を構築している。時期はMT85/TK43型式併行期である。また、大下田3号墳でも閉塞方法はA石室が一枚石によるものであるがB石室は石積み上げにより閉塞しており石室形態とあわせ意識的に明らかに異なったものである。

古墳群の範囲は現在運動公園中央通路となっている谷を挟んだ北大下田山と南の大下田山に大きく二分されておりそれぞれを北大下田山支群（大下田3～9号墳のグループ）・大下田山支群（大下田1・2号墳以南のグループ）に分けることができる。

古墳の形態はほとんどがⅣ類であるが北大下田支群の一部（大下田7～9号墳）にⅤ類を含んでいる。地名は「大下田（オオゲタ）」「大下田表（オオゲタオモテ）」および「来光（ライコウ）」である。

大下田南古墳群（通り谷支群・古鎌支群）

（Ⅴ類 TK217～TK21型式併行期（7世紀：10期以降））

古鎌山から南西に伸びる小起伏山地および南斜面に立地している。運動公園・動物園建設に先駆け発掘調査が行われた。大下田南古墳群は地名では「通り谷（トオリタニ）」「古鎌（フルカマ）」となり、両者間に谷地形があることから、通り谷支群（大下田南2～15号墳）・古鎌支群（古鎌山1～3号墳・大下田南16～21号墳）に分けることができる。

古鎌支群を構成する古墳は丘陵上に立地しているが通り谷支群を構成する古墳は丘陵稜線を避けた斜面部分に構築されている。墳丘規模も古鎌山の3基が12～15mであるのに対し、通り谷支群の古墳は周溝外側の掘り込み上の距離でも10m内外である。本古墳群を構成する古墳は周囲の古墳に比して小型であり、墳丘も方墳となること副葬品も須恵器の個体数も古鎌山の各古墳

は他の古墳群を構成する古墳と遜色ない量であるが大下田南の各古墳は少量である。しかし、少量ではあるが大下田南6・13号墳からは子持ち壺が出土しており単品では他の古墳にひけをとらない物を含んでいる。なお、大下田南14号墳の周溝からは窯壁が出土しており、石室前庭部から窯壁つきの杯が出土した谷田古墳などと合わせて窯業集団の古墳と考えられる。古墳の構築はTK217型式併行期に開始され後半にかけて順次構築されたものであり、他の古墳群が新たな古墳の構築を終了した段階から急に造墓活動を開始した群である。

古墳の形態はV類である。

通谷古墳群（通谷山・通谷池支群）

（IV・V類 TK43～TK46型式併行期（6世紀末～7世紀初頭：10期））

大下田南古墳群の南側、通谷池を挟み対峙している古墳群である。地形分類では小起伏丘陵となる。通谷池支群は地名では「古鎌」、通谷山支群は地名では「東山（ヒガシヤマ）」であるが従来の呼称がより地形等の区分に合致していると考えられる。発掘調査は通谷山1号墳と通谷池2号墳で実施している。通谷山1号墳は丘陵頂部に立地し墳丘規模は10mの円墳、石室全長4.35m・玄室長2.9mでTK43～TK209型式併行期にかけて使用されている。通谷池2号墳は周溝外側掘り込みでの規模14mの方墳、石室全長6m・玄室長1.5m・副室長1.8mでTK217～TK46型式併行期に使用されている。

（宮内大畑古墳）

砥部川右岸で最も奥に位置している古墳でIV型式である。国道工事に伴い発掘調査を実施したもので周辺の状況は不明である。砥部川の対岸側にも「盛り上がった土が家一軒分くらいあった」という。入り口から奥まで同じ幅で通路があり、石積みがあった」といわれる地点があり古墳の存在をうかがわせている。

参考

砥部川流域の東に位置する御坂川流域にも多くの古墳群が構築されている。中でも西野・谷田古墳は古鎌山から派生する丘陵上に立地しており大下田南古墳群との関連も考えられるのでその外観を記しておきたい。

西野・谷田古墳群

古鎌山から北東に伸びる丘陵の南東斜面に立地している。丘陵稜線は広がっているが古墳の占地は斜面であり谷田古墳は稜線をわずかに下ったところ、西野古墳は斜面下方に位置している。

古墳の形態はV類で、谷田古墳では前庭部から窯壁の付着した須恵器や窯壁がまとまって出土している。

5 まとめ

各古墳群を構成する古墳の使用時期

砥部川流域に構築された古墳の多くは6世紀中葉以降（TK10型式併行期 前方後円墳集成9期）にその姿をあらわしているが、右岸側で最も下流に位置する土壇原古墳群だけは古墳時代全般に渡り使用された唯一の群である。土壇原古墳群の範囲には弥生時代後期の土坑墓群も所在す

ることから弥生時代から連綿と続く墓域として検討できるものである。土壇原古墳群を除くと砥部川右岸丘陵上の釈迦面山南支群で5世紀代に方墳が出現、その後、砥部川左岸河岸段丘上の水満田古墳群および長田古墳群において6世紀前半に造墓活動がはじまり、やや遅れて6世紀中ごろに同じく砥部川左岸河岸段丘上の城ノ向古墳群や砥部川両岸丘陵地・山地上の各古墳群が墓域としてその姿をあらわしてくる。7世紀初頭にほとんどの古墳群で造墓活動が終了する中、大下田南古墳群において造墓活動がはじまり、土壇原古墳群・高尾田古墳群・大下田古墳群でも一部に造墓活動が見られる。砥部川流域の造墓活動が終焉をむかえるのは7世紀後半代となる。

同一古墳群内の階層分類

砥部川流域の各古墳群で群内に階層差とも取れる規模の違いを内在しているのは、大下田南古墳群・金毘羅山古墳群・長田古墳群・城ノ向古墳群などである。

大下田南古墳群を構成する古鎌支群および通り谷支群において、立地では丘陵頂部にある古鎌支群・丘陵斜面にある通り谷支群、規模では12～15mの古鎌支群・10m内外の通り谷支群、副葬品量でも通り谷支群が少ないなど古鎌支群の優位性が見られる。

金毘羅山古墳群においては丘陵上から稜線上にある金毘羅山1・2・3・4・6号墳が墳丘規模で17m以上、稜線を下がった傾斜地にある古墳は15m程度で稜線上の古墳より一回り小型である。また、発掘調査を実施した金毘羅山2・3・12号墳では石室規模も大きなものである点から丘陵上位に立地する古墳の優位性が見られる。

長田古墳群では未調査の長田1号墳が最も大きく、次に長田2号墳が17mと大きいのが、長田2号墳は周溝を外表施設として掘削しており、この周溝部分を除外すると有段によって墳丘規模を計測した長田3・4・10号墳とほぼ同一規模となり、石室規模において優位となるだけである。なお、その他の古墳は上記の古墳の間を埋めるように石室を構築している。

城ノ向古墳群では段丘上の城ノ向2～4号墳が墳丘規模20m・石室規模3.5m以上と群内では大きく、石室規模で一回り小型で寄り添うように段丘縁辺部に立地している城ノ向5～7号墳より優位性が見られる。

古墳群間の階層性

浮穴郡における首長墳は前方後円墳集成編年1期の北井門前方後方墳、9期後半の波賀部神社古墳と10期前半の白山神社古墳が重信川右岸に所在するが、今回範囲として取り扱った砥部川流域を含む重信川左岸には明瞭な前方後円墳は確認されていない。

砥部川流域の古墳について小地域の首長墳の可能性をもつ25m規模の古墳を抽出すると土壇原・釈迦面山・大下田の古墳群に分布している。それぞれの古墳では土壇原古墳群のうち土壇原17号A墳・土壇原V遺跡6号方形周溝墓と釈迦面山古墳群の2基は箱式石棺を内部主体とするI類-2の古墳であり、流域においていち早く構築された古墳で同一時期に造墓活動を行っているのは土壇原古墳群だけであり他古墳群と比較できる状況ではないが、周辺に分布する弥生時代の墓地が方形周溝墓であることや北井門前方後方墳の所在から5世紀代までは方墳が本地域の首長墓として構築されていたと考えられる。

流域に多く構築されているIV類の古墳では大下田古墳群で稜線上に立地する古墳に25m級の大

下田1・3～5号墳があり、砥部川流域でも大型墳の集中する古墳群である。時期を6世紀末～7世紀初頭に限ると他に同様な古墳は見当たらない。時期を7世紀前半に移すと土壇原14・15号墳が25m級となる。

規模を一段下げ20m級で見た場合、土壇原・大下田両古墳群以外に城ノ向・長田・金毘羅山の各古墳群にその分布が広がっている。このうち土壇原16号墳・土壇原V遺跡8号方形周溝墓・土壇原V遺跡13号墳はI類の古墳であり、土壇原5号墳はⅢ類の古墳である。I類の場合上位に25m級の古墳が土壇原・釈迦面山に存在することから20m級のこれらの古墳を一ランク下位の首長墳と考えることができる。

前回の「愛媛県における首長墳素描」の文末の記した「[郷]内における古墳それぞれの内容を比較し、古墳群間の優劣について検討する」作業の一環として最も調査例の多い砥部川流域について若干の考察のようなものをまとめたく記述をはじめましたが、台帳未記載の古墳も多く、四半世紀以上前の踏査時の記憶をたどりながらの部分も有り、「もう一度現地を踏査しなければ」との思いを強くし、報告書など刊行されている資料では見えてこない部分について注意深く現地で観察するなど基礎資料の充実を図る必要を痛感いたしております。現在、古墳群についてさまざまな取り組みが行われており、関係各位からの更なるご鞭撻をお願いいたします。

(2004年1月21日)

参考文献

- 相原清志 1995 「麻生小学校南古墳」『麻生小学校南遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書—第3次調査・第4次調査・第5次調査—』砥部町教育委員会
- 相原清志・寺島信三 1996 「麻生小学校南古墳」『麻生小学校南遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書—第6次調査・第7次調査—』砥部町教育委員会
- 愛媛県教育委員会 1969 「大下田第2号墳発掘調査報告書」愛媛県教育委員会
- 愛媛県教育委員会 1991 「愛媛県内古墳—分布調査報告—」
- 岡田敏彦 1978 「西野古墳」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』愛媛県教育委員会
- 岡田敏彦 1979 「城ノ向古墳群発掘調査報告書〔一般国道大平・砥部線改良工事に伴う調査〕』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦 1980 「水満田古墳」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦 1980 「城ノ向8号古墳発掘調査報告書」砥部町教育委員会
- 岡田敏彦 1981 「谷田1号古墳」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会
- 岡田敏彦 1981 「長田古墳」「城ノ向古墳」「宮内大畑古墳」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦 1984 「一般国道33号砥部道路で発掘調査を行った古墳」『愛媛考古学 7』愛媛考古学協会
- 岡田敏彦 1986 「谷田1号古墳」「西野1・2号古墳」「大下田南古墳群」「土壇原古墳群」「城ノ向古墳群」「長田古墳」「水満田古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県
- 岡田敏彦 1997 「愛媛県出土の蔵骨器」『愛媛考古学 14』愛媛考古学協会

- 岡田敏彦 2001 「愛媛県における首長墳素描」『紀要愛媛 第2号』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦 2002 「土壇原古墳群」『海を渡ってきたひと・もの・わざ』松山市考古館平成14年度特別展図録 松山市考古館
- 岡田敏彦 2003 「土壇原10号古墳について」『前期古墳の副葬品と地域間関係—南予・笠置峠古墳をめぐる—』第4回愛媛大学考古学研究室公開シンポジウム 愛媛大学考古学研究室
- 小林一郎・松田直則 1982 「大下田南古墳群」『愛媛県総合運動公園（動物園）整備計画関連埋蔵文化財発掘調査報告書（I）』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 阪本安光 1981 「釈迦面山遺跡群」「大下田古墳群」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』愛媛県教育委員会
- 谷若倫郎・須藤敦子 1988 『水満田古墳群（金毘羅山支群）—砥部町水満田古墳公園整備事業埋蔵文化財調査報告書—』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 砥部町誌編纂委員会編 1978 「砥部町誌」砥部町
- 砥部町編 1988 『とへの地名』砥部町
- 富田尚夫 2003 「松山平野南部における古墳時代後期首長墓の系譜」『研究紀要第8号』愛媛県歴史文化博物館
- 富田尚夫 2004 「松山平野における階層秩序—古墳時代後期の東部と南部—」『第9回中国・四国前方後円墳研究会発表資料』中国・四国前方後円墳研究会
- 長井数秋 1986 「大下田古墳群」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県
- 長井数秋 1991 『通谷山古墳発掘調査報告書』砥部町教育委員会
- 西川真美 1998 『西野春日谷遺跡 通谷池2号墳—えひめこどもの城建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 乗松 茂 1967 「大下田古墳調査概報」『愛媛の文化 第6号』愛媛県文化財保護協会
- 広瀬和雄 1991 「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』山川出版社
- 松山市編 1987 「土壇原古墳群」『松山市史料集 第2巻』松山市
- 宮崎泰好 1993 『水満田第2号古墳調査報告書（水満田西古墳群—金毘羅山支群）砥部町水満田古墳公園整備事業に伴う発掘調査』砥部町教育委員会

※ 土壇原古墳群は昭和51・52年度に愛媛県教育委員会によって発掘調査が行われ（発掘調査のうち、8号墳は財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター昭和53年度契約事業、現場作業は愛媛県教育委員会職員が実施）、昭和56年度に整理作業を実施し、報告書原稿を作成しているが、諸事情により今日まで報告書未刊となっている。

遺跡名については『日本考古学協会年報』において紹介されているが古墳については群としての表記にとどまり、基数など不明瞭なものとなっているため、今回、名称についてわかる範囲で記載することとした。なお、第1表「砥部川流域の古墳一覧表」中の古墳名は報告書原稿に記載された名称を使用しているため、『台状墓』『周溝』『周溝墓』などさまざまなものになっており古墳名の表記統一など問題点も多い。現状のままでは資料としての活用も困難であり、発掘調査に従事した調査員の中でただ一人現職として調査に携わる者の責務として今後、愛媛県教育委員会などの関係機関と協議し、遺跡（遺構・遺物）の資料化を図る方向で作業を進めたい。

出土遺物については財団法人松山市生涯学習財団埋蔵文化財センターにおいて再整理が実施された経緯があり、個々の遺物についても愛媛県教育委員会・愛媛大学で再整理・検討が行われている。

第2表 砥部川流域の大型円墳・方墳（大型円墳・方墳は直径・一辺25m以上・前方後円墳の可能性のあるものも含む）

古墳名	所在地	立地	形態	規模	埋葬施設	須恵器	植輪	馬具	武器	装身具	備考
土壇原14号墳	松山市上野町	河岸段丘	円	26	横穴式石室	T K 217				耳環・管玉・切子玉・空玉	周溝・排水溝
土壇原15号墳	松山市上野町	河岸段丘	円	25	横穴式石室	T K 217	○			耳環・空玉	周溝
土壇原17号A墳	松山市上野町	河岸段丘	円	28	箱式石棺	○					周溝
土壇原V6号方形周溝	松山市上野町	河岸段丘	方	25	箱式石棺				刀	勾玉・小玉	周溝
大下田1号墳	砥部町上原町	丘陵頂	円	25	横穴式石室	○	円・朝	轡	鉄鏃	耳環・管玉・切子玉・子玉	
大下田4号墳	砥部町上原町	丘陵頂	円	25	横穴式石室	T K 43		轡	刀・鉄鏃	耳環・霰玉・切子玉	
釈迦面山1号墳	砥部町原町	丘陵稜線	長方	25 × 20	箱式石棺				鹿角装・剣・刀		
釈迦面山2号墳	砥部町原町	丘陵稜線	長方	25 × 20	粘土槨	○					
大下田3号墳	砥部町原町	丘陵稜線	方円？	34	横穴式石室	T K 209					径26・長8
大下田5号墳	砥部町原町	丘陵頂	方円？	28		T K 43		○	鉄鏃	耳環・霰玉・切子玉	径17・長9

第3表 砥部川流域の円墳・方墳（直径・一辺20m以上、25m未満）

古墳名	所在地	立地	形態	規模	埋葬施設	須恵器	植輪	馬具	武器	装身具	備考
土壇原5号墳	松山市上野町	河岸段丘	方	20	竪穴式石槨2	○			剣・刀	珠文鏡	周溝
土壇原9号墳	松山市上野町	河岸段丘	円	22	横穴式石室	○	円・朝			耳環・勾玉・管玉	周溝
土壇原16号墳	松山市上野町	河岸段丘	円	21	箱式石棺	○			鏃		周溝
土壇原19号墳	松山市上野町	河岸段丘	方	20		○	円			耳環	周溝
土壇原V8号方形周溝	松山市上野町	河岸段丘	方	24	箱式石棺	○			鏃・刀		
土壇原V13号墳	松山市上野町	河岸段丘	方	20	箱式石棺	○					周溝
大下田2号墳	砥部町上原町	丘陵裾	長円	15 × 20	横穴式石室2	○	円	鏡板	鏃	耳環・管玉・切子玉	
城ノ向2号墳	砥部町上原町	河岸段丘	円	20	横穴式石室	M T 85					周溝
城ノ向3号墳	砥部町上原町	河岸段丘	長円	15 × 20	横穴式石室	T K 209				耳環・管玉・白玉	周溝
長田1号墳	砥部町原町	河岸段丘	円	20	横穴式石室						
金毘羅山2号墳	砥部町麻生	丘陵稜線	円	20	横穴式石室	M T 85	円V				
金毘羅山3号墳	砥部町麻生	丘陵稜線	円	20	横穴式石室	T K 209		轡	鏃・刀		
金毘羅山4号墳	砥部町麻生	丘陵稜線	円	20	横穴式石室	○	円				
金毘羅山19号墳	砥部町麻生	丘陵稜線	円	20		○	円・朝				

形態の欄 前方後円墳→方円 前方後方墳→方方 帆立貝形古墳→帆立 円墳→円 方墳→方 明瞭でないもの→？
 備考の欄 後円部径→径 前方部長→長 後方部辺→辺
 規模及び備考欄の数値の単位はm

表は『紀要愛媛』第2号『愛媛県における首長墓素描』に使用したものをから砥部川流域部分を抽出し加筆したものである。

湯築城跡の段階設定と遺構の変遷をめぐる諸問題

柴田圭子

1 はじめに

1988年に開始された湯築城跡の発掘調査は、復元整備事業を含めた歴史を活かした公園としての道後公園整備に帰着し、2002年春のリニューアルオープンと、秋の国史跡指定をもって一応完結した。その間、愛媛県による日本庭園建設のための緊急発掘に端を発した保存運動の展開や、調査の中断、学術調査の開始と継続などの展開を経て、調査成果は『湯築城跡』第1分冊（1998年刊行）から第5分冊（2002年刊行）の報告書にまとめられた。

筆者は、発掘開始当初には発掘調査に従事し、92年以降は発掘調査や整備事業にも関係しつつ、主として整理作業を担当し、報告書を編集・執筆してきた。報告書は5冊に及ぶものの、それは膨大な調査成果の基本部分の報告であり、遺跡を媒体として戦国期伊予の社会を復元していくには、今後更なる研究の積み重ねが求められていることは言うまでもない。

そのような中、発掘開始以来、文献史学の分野において河野氏に関する様々な研究が発表され、湯築城跡の調査成果に関わる問題が指摘されたり、可能性が示唆されることが多くなされてきた。特に注目されるものとしては、川岡勉氏による湯築城の堀と土塁の造営の年代や契機についての指摘（川岡1998a・b・2002）や、西尾和美氏による河野氏権力末期における毛利氏権力との関係について、婚姻関係から言及した一連の論文（西尾1999a・1999b・2001）が挙げられよう。川岡氏の指摘は、湯築城跡の遺構の段階変遷及びその年代観と直接に関わるものであり、西尾氏は、城内居住者について言及し、湯築城内の空間構成に関する問題に触れている。

今回の拙文は、それらの文献史学による研究成果を踏まえ、考古学的方法論を用いつつ、接点を探ることを目的としている。方法としては、湯築城跡の遺構の変遷を、遺構面の形成という観点でとらえ直すことによって現在設定されている段階を見直し、湯築城の外堀が掘削された時期、その後の遺構面が形成された時期について再考し、背景についても若干触れたい。その際、部分的に明らかになっている各遺構面のもつ特質についてもまとめることにより、河野氏権力に迫る手がかりとしたい。

2 発掘調査の成果と段階設定

(1) 発掘調査成果の概要

はじめに、湯築城の概要と調査成果を簡単にまとめておく。

湯築城跡は、松山市道後に所在する中世伊予を代表する豪族河野氏の居城である。河野氏は、平安末期には在庁官人としての活動が確認できる、河野郷（北条市）を本貫として勢力を伸ばした一族であり、鎌倉時代には御家人となる。

湯築城の築城は南北朝期とされるが、一時的に（戦時に）城として使用されたものともとらえ

られ（湯築城資料館2002）、河野氏が湯築城に本拠を移すのは14世紀末ごろである可能性が高い（川岡1998b）。河野氏は守護の地位を安定的なものとし、湯築城は室町、戦国時代を通じて河野氏が支配し、伊予の政治・軍事・文化の中心として機能したが、天正13（1585）年、秀吉の命を受け伊予攻めを行った小早川隆景に開城し、間もなく廃城となる。

湯築城跡（第1図）は、中央の丘陵（周囲平地部との比高約30m）を内堀と内堀土塁、外堀と外堀土塁という二重の堀と土塁で囲んだ平山城で、平面形は東北の隅が欠けた亀甲形である。総面積は8.6haあり、全域が国の史跡に指定されている。発掘調査は、内堀と外堀の間の平地部のうち、南部を中心に行われており、その他の地区は試掘や部分的な調査が実施され、約2万㎡について終了している。

主に発掘対象となった平地部の南部では、外堀土塁の内側に石積みの排水溝を伴う道路が巡り、その内側に居住区が広がっている。居住区では、細かい区画に分けられた家臣団居住区と、広い面積を占有し庭園を伴う庭園区・上級武士居住区が検出されている。外堀掘削の時期は16世紀前半、天文4（1535）年、当主弾正少弼通直の頃（第2図）と考えられており、平地部についてはそれ以降、廃城までの約50年間の遺構であり、その間に1～4段階の遺構面を形成している。

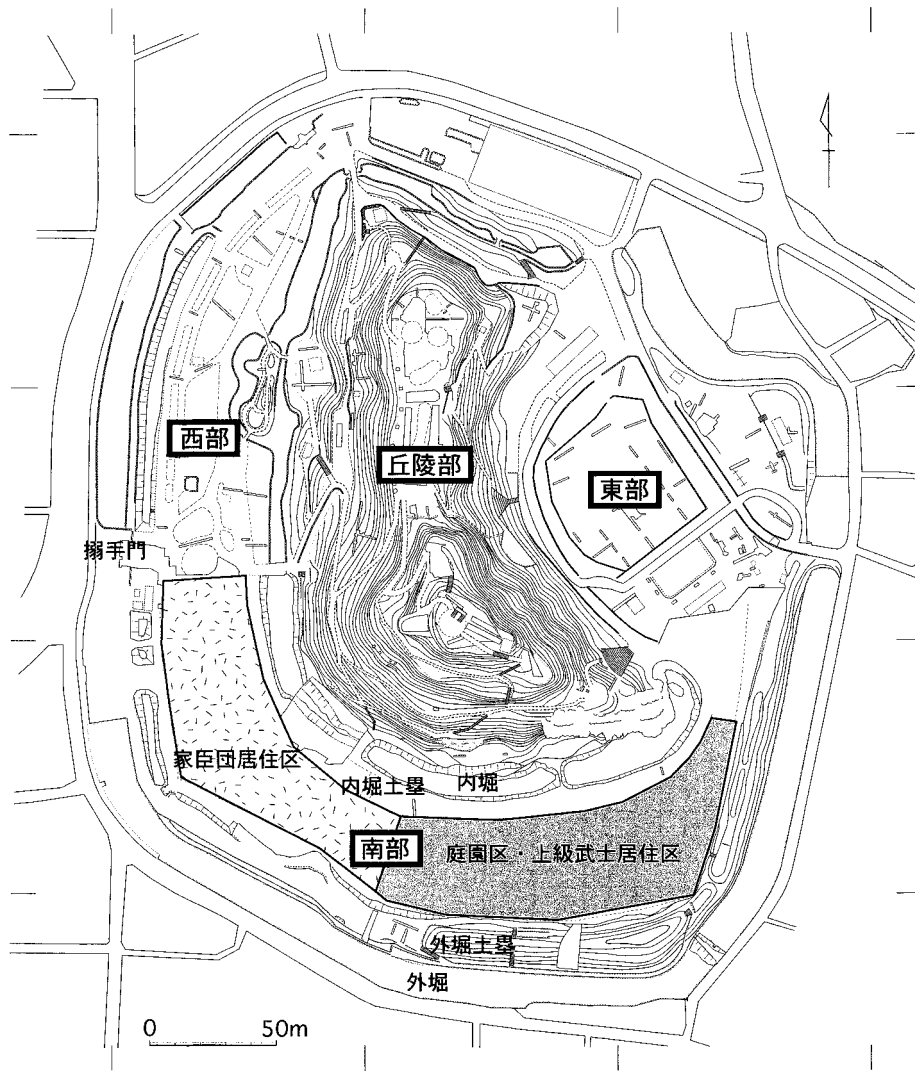
そのほか、西口の調査では搦手門の遺構が検出され、丘陵部からは外堀掘削より遡る礎石建物跡が発見されるなど、湯築城の構造や変遷を示す遺構が全面に遺存している。

（2）段階設定の見直し

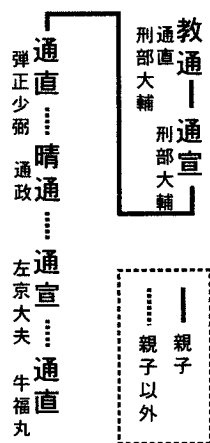
次に段階設定を見直していきたい。無論ここで述べるのは、報告時の段階設定が誤っているという議論ではなく、複雑な重複関係に折り合いをつけて合理的かつシンプルに整理した現在の段階設定は肯定しつつも、本論において考察しようとする問題について、より明確な回答を得るためには、遺構面の形成という視点で見直す必要があり、それを行っていきたい。またその作業の過程で、現在の段階設定に含まれる曖昧な点も改めて認識しておきたい。

湯築城跡の段階は、まず家臣団居住区の基本土層から1～4段階を設定し、後に丘陵部の調査成果から湯築城前期と後期1～4段階を設定したものである。湯築城前期は、外堀の掘削より前の段階であり、後期は外堀掘削以降である。今回は、そのうち後期としたものについて見直しを行いたい。

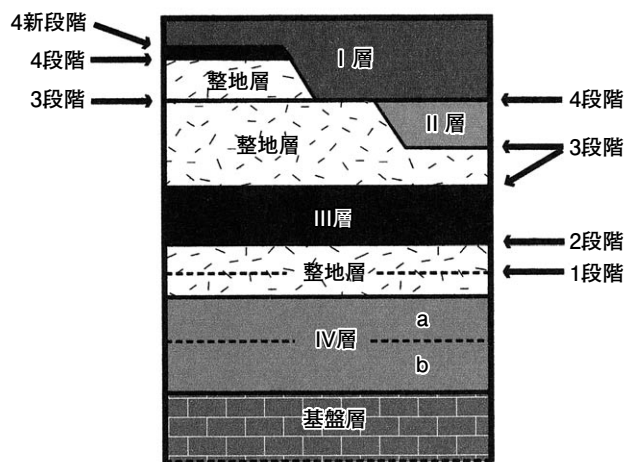
後期1～4段階（以下、後期を省略）については、その遺構面が覆われている土層によって設定している（第3図）。基本土層に則って説明すると、近現代の整地層を除去して最初に現れるのがⅠ層とした包含層である。この層は湯築城廃城後に堆積した腐植土層で、その下に検出される遺構面が4段階であり、湯築城が廃城となる時まで持続していた生活面と判断している。この面は一部火災にあっており、その後構築された遺構は4新段階としている。さらに4段階より下層で、自然堆積層のⅡ層、あるいは整地層を挟んで検出されるのが3段階で、この面は部分的に存在している。また、2段階とした遺構面は、4段階あるいは3段階より下層であり、火災によって形成された炭・焼土層であるⅢ層に覆われていることを基準としている。この火災は、かなり広範囲に及んでおり、家臣団居住区では全面、庭園区・上級武士居住区においてもトレンチなどで確認できる。最も下層で確認されるのが1段階の遺構面で、古代から中世前期の遺物包含層で



第1図 湯築城跡平面図



第2図 16世紀の河野氏当主系図



第3図 基本土層

あり、上面には外堀掘削直前の遺構があるとみられるⅣ層と、整地層をはさんで検出される。このⅣ層を覆う整地層が外堀掘削に伴うと判断し、外堀掘削直後に形成された生活面と考えている。ただし1段階まで調査が及んでいるのは、限られた面積であるため全貌は明らかでなく、2段階より下層で、Ⅳ層より上層の遺構をまとめて1段階としている。

この段階設定の中で、今回特に問題としたいのは3段階である。上述したように、現段階設定は土層からほぼ同時廃絶ととらえられる遺構を同一段階としたものだが、3段階についてはその原則に則っていない。また、3段階の遺構が極めて部分的にしか検出されていない理由は、攪乱や破壊によるものと言うより、その構築の順序と関わりがあるとみられるが、現在の段階設定ではそれが明らかにされていない。

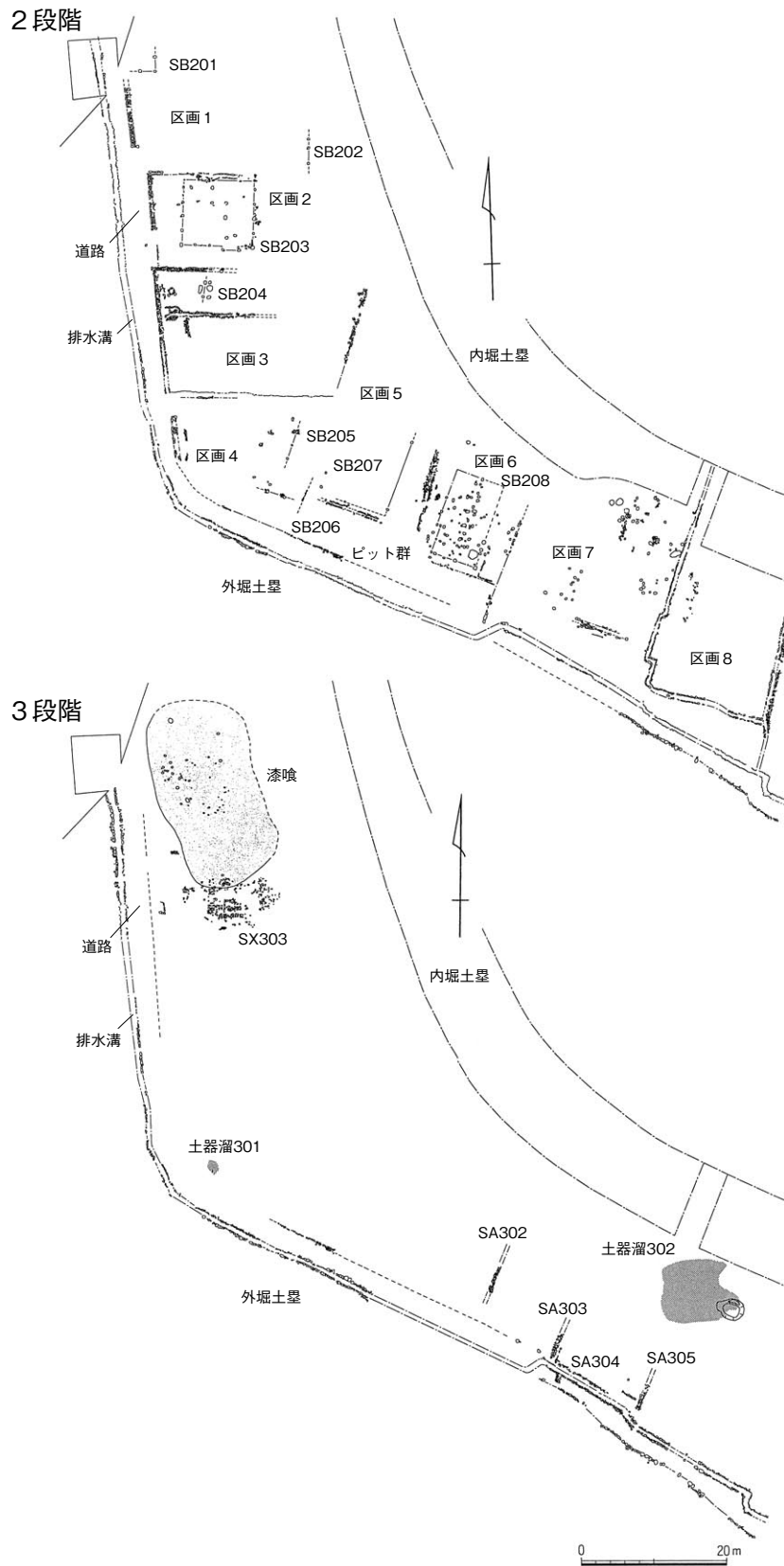
はじめに述べたように、本論は、文献史学からの様々な問題提起との接点を探っていこうとするものであり、考古学的手法で遺構面の変化の時期をとらえ、背景などを考察する必要がある。そのためには遺構の変遷を順序だてて明らかにしなければならない。その際、まず先に触れた3段階の問題点をより明白にするために、2段階の遺構面が火災で焼失した後の家臣団居住区の遺構の変遷を順次考えてみたい。

第4・5図は現在設定されている2～4段階の家臣団居住区の遺構図である。全面火災で焼失した2段階の遺構面では、火事場整理が行われ、再整備が実施された。遺構の構築順を推定しつつ、変遷を追うと以下ようになる。

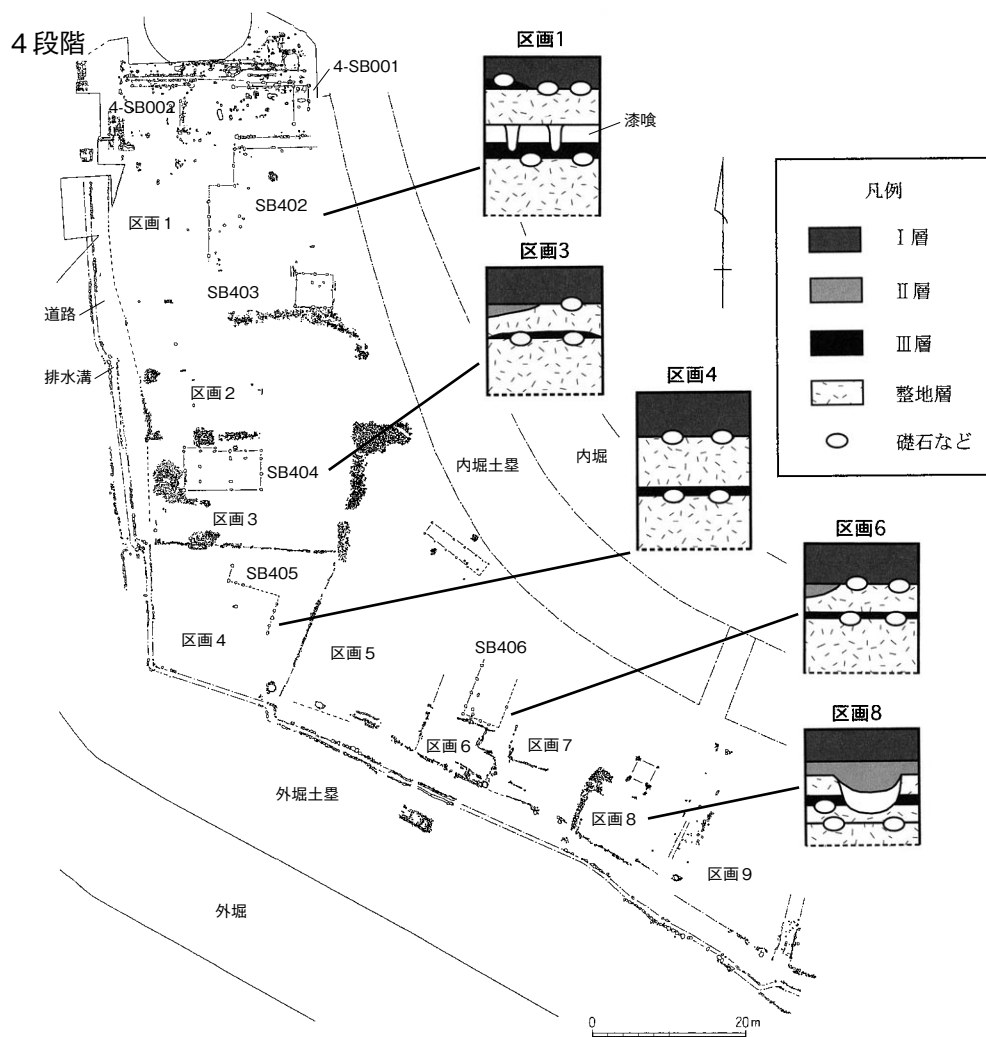
2段階の区画1から区画2の北側にかけてはⅢ層（焼土）を覆って漆喰面が形成されている。漆喰上面がフラットに形成され、固くしまっており、柱穴が検出されていることから生活面として存在したものと考えられる。区画2では、SB203を覆うⅢ層直上にSX303が形成され、その後整地が施される。区画3ではⅢ層を覆うのは整地層でありその上面には4段階の遺構であるSB404が存在する。区画4では、Ⅲ層直上に土器溜301が形成された後、Ⅲ層は整地層に覆われ、他の区画より一段高く盛土される。上面には4段階のSB405が存在する。区画5・区画6はⅢ層自体は部分的に残存している。区画6の2段階遺構面では多くのピット群が検出され、埋土はⅢ層であることから、火事場整理後、仮設の建物などが構築されていた可能性がある。それが埋め戻され、直上に炭交じりの整地層が存在し、SA302とSB406が形成されている。区画7と区画8においても、Ⅲ層を覆って整地が行われ、SA303・305と土器溜302などが形成されている。その後、3段階とされている遺構群はⅡ層に覆われる。しかし、特にSA302からSA305にかけての区画は、土塀基礎の上層に石列状の集石群がⅠ層に覆われて4段階の遺構として検出されているものもあり、むしろ廃城まで遺構が継続した可能性がある。

その後、さらに区画1は再度整地されほかの区画より0.2～0.3m高く、数棟の礎石建物で形成される広い区画となる。ただし、この区画から搦手門にかけては、4段階において火災の痕跡が確認でき、礎石建物群のうち4-SB001が火災後に形成されている。

以上のように、家臣団居住区を遺構面形成という視点で整理しなおすと、3・4段階と時期を分けて整理されている遺構は、火災後の整備によって築かれたものがほとんどであることが理解できる。これらの遺構群が厳密な意味で同時期に形成されたのかは断言できないが、少なくとも2



第4図 2・3段階の家臣団居住区の遺構
 ((財)愛媛県埋蔵文化財調査センター1998より転載、一部改変)

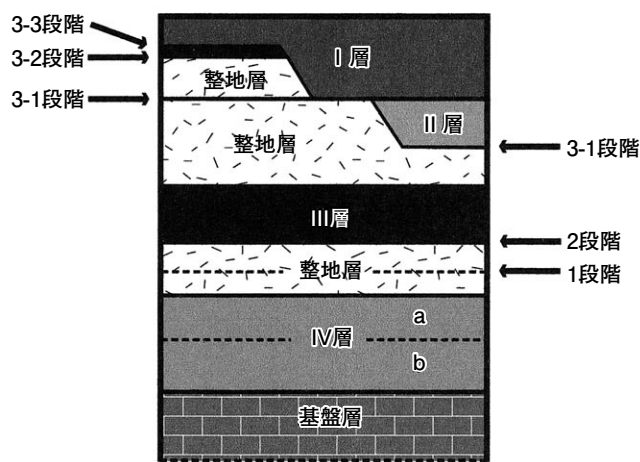


第5図 4段階の家臣団居住区の遺構と土層
 ((財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998より転載、一部加筆)

段階の火災後に形成された整地層上という同一面上に存在しており、比較的近接した時期に形成されたと見て差し支えないであろう。II層に覆われた結果3段階と認識されているものについては、II層の存在が部分的であり自然堆積層であるならば、4段階に至るまでに人為的改変を受けていないととらえられる。つまり、明らかに2段階の火災後の整備より下って形成されたと判断される遺構は、4段階の区画1のみであると言え、その状態で廃城を迎えたと考えられる。

また、居住区の外周を巡る道路と排水溝については、1～4段階に対応させる形で整理できているが、むしろ2段階の火災後においても継続して用いられた部分が目立ち、火災後の大規模な改修はほぼ居住区内に留まっていたことを示している。

以上のような考え方から、これ以降本論においては、1・2段階は従来通りとし、3・4段階については、火災後に整備された段階を3-1段階、その後区画1を改変した段階を3-2、3-3段階として論を進めていきたい(第6図)。



第6図 基本土層と段階の対応

(3) 遺構の変遷

次に、発掘調査区全体について、前項で設定した1段階から3段階の遺構群の変遷についてみていきたい(第7・8図)。

1段階の遺構の多くは、調査の制約により家臣団居住区を中心に一部検出している。部分的にしか検出されていない1段階の遺構ではあるが、城の拡張という大土木工事に伴って、はじめに整備された遺構群であり、土塁裾石と居住区外周を巡る道路と排水溝、区画を伴う居住区などの基本的な形が整えられたとみられる。

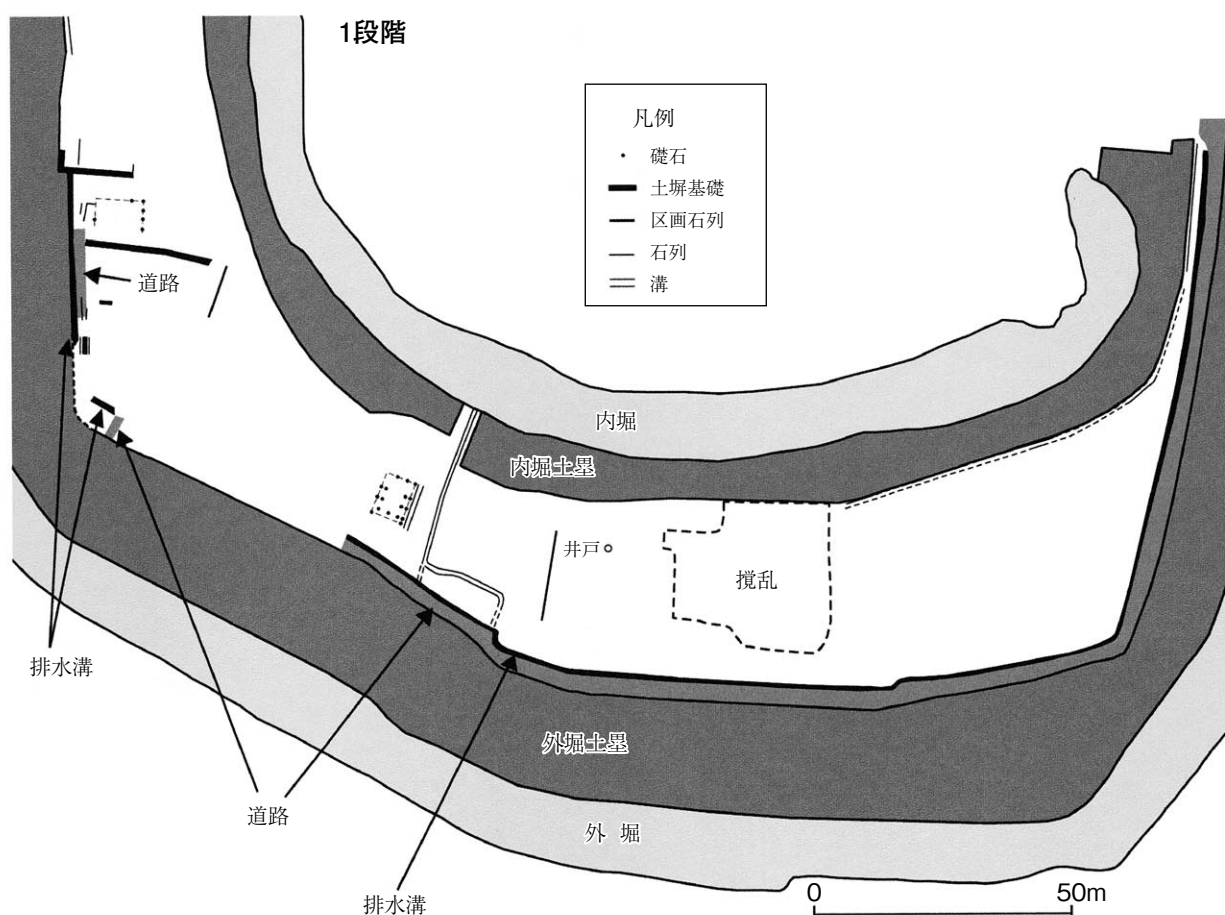
さて、そのような1段階の後に成立したのが2段階の遺構群である。これまで、2段階の遺構については、全面的に火災で焼失し、遺構・遺物ともに遺存状況が良好であったため、焼失時の研究に重点を置きがちであったが、二つの意味において1段階から2段階への変化という事実自体が非常に重要と考えられる。第1点は、1段階と2段階の間には整地層を挟んでいることから、それが大々的な改修であり、改修の範囲は、道路から排水溝、建物、土塀など、全面に及んでいること、また2点目は、この改修が後の2段階から3段階への変化と違い、火災などの強制的な要因によるものではない、ということである。つまり、大変な労力をかけて外堀と外堀土塁を築造し、その内部には居住区を設けて整備した1段階を、道路、排水溝、居住区内の建物に至るまで全て作り替えて成立したのが2段階なのであり、当然そこには何らかの意図や必然性が背景として求められるべきであろう。

2段階では、遺構の状況がある程度面的に把握でき、家臣団居住区や庭園区、上級武士居住区といった3段階に踏襲される区画が確認できる。ただし、成立は1段階まで遡る可能性を含んでおり、1～2段階においてどのように構成が変化したのかは不明である。現時点で重要なことは、2段階の建物跡で最も遺存状況の良好であったSB203において、旧段階と新段階の改変が認められることから、2段階成立後一定の継続期間があったことが確実であるという点である。

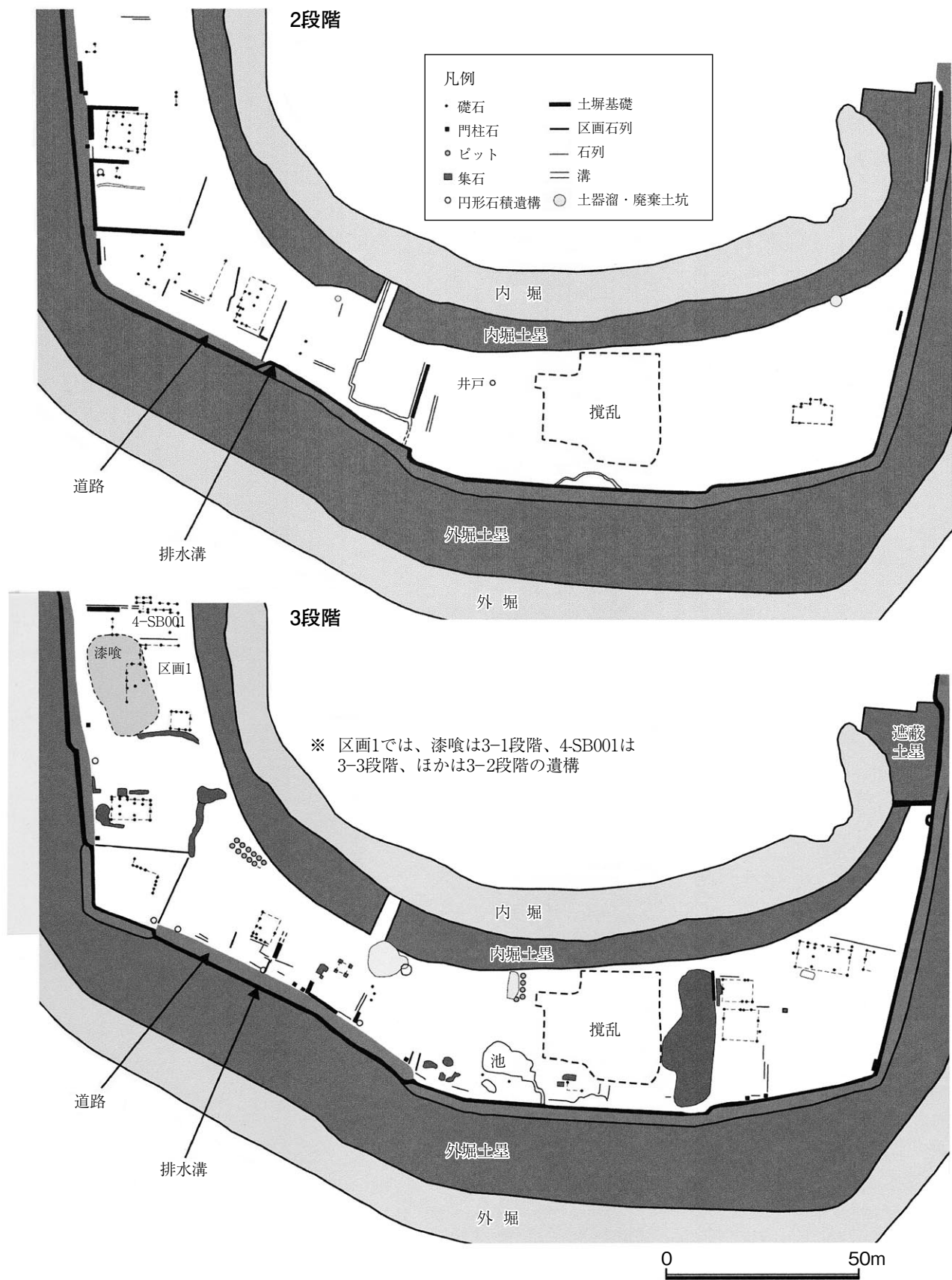
2段階の遺構は火災で焼失し、3段階の遺構が成立する。3段階の特徴としては、家臣団居住区の区画のうち、特に西側が不明瞭になり、東側では2段階より小区画に分れる点である。また、庭園区と庭園区に近い家臣団居住区の内堀側に、大規模な廃棄土坑や土器溜が形成される。それらがⅡ層に覆われていることを考慮すると、3段階の遺構面が形成された比較的初期に規模の大きい儀式や宴会が催されたことを示唆している。

3-2段階では家臣団居住区北西側で、ほかより一段高く整地され、大きな面積を占有し、複数の建物によって構成される区画1が成立する。その後、火災で焼失するが、3-3段階において一部の建物が復興している。この3段階での火災の痕跡については、上級武士居住区においても確認できるが、こちらでは火災後の再整備は認められず、従って同時期の火災であったのかは判別できない。

以上のような変遷を念頭においた上で、文献史学から提唱されている問題について検討を加えたい。



第7図 1段階の遺構模式図



第8図 2・3段階の遺構模式図

3 1段階と2段階形成の年代観と背景

湯築城の外堀と外堀土塁が築造された時期については、文献史学の立場から、国分寺文書と仙遊寺文書に残る「温付堀」に関わる人足徴用と絡めて、天文4（1535）年という説が提唱されている（川岡1998a・b）。また、発掘調査の成果においても、外堀・外堀土塁築造の段階に当たる1段階の年代観と矛盾しないため、この説が定着している。

1段階の年代については、1段階の遺構面から出土した遺物が限られるため、2段階やIV層の遺物との関係も考慮しつつ16世紀前半という年代を推定した（柴田1998）。2段階の遺構面は、先述の通り火災にあって焼失しているため、遺構・遺物とも遺存状況が良好で、豊富な遺物から年代を推定することが可能であった。その年代は、輸入陶磁器や備前焼などから判断して、16世紀中葉と考えており（柴田1998・2000・2001b）、現段階では修正の必要性は生じていないが、1段階との関係で問題が存在している。

2段階の火災については、焼失面積が大きく、戦によるものではないかとの推定から、16世紀中頃に湯築城を巻き込んだ争いとして、「天文伊予の乱」に直結させる考えがあり（川岡1998a）、筆者らもこれまで、ひとつの可能性としてその考えに追随してきた。

「天文伊予の乱」とは、天文11（1542）年前後に、当主河野通直と子通政間に「父子不快」と記述され、周辺大名とも関わる問題が存在しており、その内容について『予陽河野家譜』などから推定して、当主の後継問題に端を発した家臣団を巻き込んだ争いとし、「天文伊予の乱」と川岡氏によって命名されたものである。16世紀中頃に湯築城を巻き込んだ戦乱が外に見当たらないなどの理由から、その際の火災が2段階の遺構を覆うIII層を形成した可能性が指摘されている。

しかし、1段階から2段階への遺構の変遷を改めて検討した場合、この時期設定にはかなり問題があることに気づく。つまり、外堀の掘削という大事業を含む1段階の形成が、天文4（1535）年とすると、「天文伊予の乱」(天文11（1542）年）で2段階が焼失するまで、わずか7年しかないという点が疑問なのである。

前項で詳細に見たように、1段階と2段階の間には、外堀を掘削して湯築城を拡大し整備した後、何らかの理由で城内を大々的に再整備し、一定の存続期間を経て火災で焼失する、という遺構の変遷がある。その間がわずか7年間という設定は肯首し難く、仮にそのような改変がありえたとするならば、1段階成立直後に当主の代替わりによる館の改変などがあつたか、大地震等の災害により壊滅的被害を受けたなどの明快な理由が必要であろうが、当該期にはそれに当てはまる事態は確認できていない。つまり、1段階と2段階の間には、少なくとも十数年乃至数十年単位の年数が存在したと考えざるを得ないのである。

この問題に関して、現時点でより確実かつ具体性を持った解答を示せるとは考えていない。それは、発掘調査成果に基づくならば、1段階の遺構が何を圍繞する目的で成立し、2段階でどう変化したのかなど一部でも明らかにできない限り、言及できる質のものではないからである。

しかし、敢えて判断するなら、1段階が天文4年という説は、「温付堀」の造営に関わるとみられる文書の存在に加えて、その直前に河野通直が京都山科に逗留し、山科本願寺の巨大な土塁を目の当たりにしているということ、その土塁の構造が湯築城の土塁と類似しており、共通性が認

められること、あるいは大内氏との軍事的緊張の高まりなどの理由（川岡2003）から、より蓋然性が高いと考えられる。逆に、2段階が天文11年という説については、出土遺物の年代観が16世紀中葉とは言え、これらの遺物群を1540年代まで遡らせ得る根拠が未だ薄く、現在のところ湯築城跡2段階と遺物において共通性のある最も遡る例は、月山富田城の新宮党館（島根県広瀬町所在・1554年下限、柴田2001a）であり、類例からは50年代から60年代の様相として考えておくほうが妥当であると言え、2段階の年代観を若干下らせる方向で考えておきたい。

以上述べてきたことを整理すると、1段階の成立は「温付堀」を造営した天文4年の可能性が高く、城内平地部の基本的な構造が整えられた。その後、何らかの理由で1段階の構造物は撤去され、新たに2段階が成立し、一定期間存続した後16世紀中葉に火災で焼失する。その年代は1550年代から60年代と考えられる。火災後の火事場整理を経て、3段階が成立する。この面で、一部改修を行いながら廃城まで継続する。

このように考えることで、1段階から2段階への大きな変更の契機を、例えば「天文伊予の乱」以降の弾正少弼通直から晴通への権力継承後、あるいは晴通が極めて短期間で死去していることを考慮すれば、左京大夫通宣への継承後に求めることも可能となり、その後しばらくして何らかの理由で火災にあったと判断される。火災の年代は、遺物の年代観から、次の当主通直（牛福）への代替り（1560年代後半）以前の可能性が高い。これらは、現段階では無論仮説に過ぎないが、ここで強調しておきたいのは、湯築城に関してこれまでに積み上げられてきた研究の数々は、実は大変に曖昧な部分を内包しており、また逆にこれまでの説以外の様々な可能性が未だ完全に否定しきれない面を持っていることであり、現在できるとすれば、最も可能性の高い説を打ち出しつつも、その他の可能性も否定せず、課題として認識しておくことであろうと考えている。

4 3段階における城内の構造と河野氏権力—おわりにかえて—

さて、以上湯築城跡における段階の再検討と、遺構面形成の年代観とその背景について考察してきた。最後に、もうひとつの大きな課題である、城内の構造について触れたい。

この問題については、城内が家臣団居住区、庭園区・上級武士居住区など、目的ごとに区画を設定して空間が使い分けられていることが既に明らかになっている。家臣団居住区は、8～9の小区画によって形成され、内部にほぼ1棟ずつ礎石建物が配されており、河野氏直属の家臣などの居住域と推定している。庭園区・上級武士居住区は、4,500㎡に及ぶ広い敷地内に、池泉庭園や礎石建物が配されている区画である。最も様相の判明している廃城まで継続した3段階においては、遺物の出土傾向などの分析から、丘陵部は非居住空間であり、日常的な生活の場ではなくなっていること、庭園区・上級武士居住区は、河野氏当主の館の一つの候補という推定（柴田2000・2003）も成り立つ。

このような調査成果と関わる文献による指摘として、西尾和美氏による城内に居住していた人物の推定がある（西尾2001）。西尾氏は、河野通宣に嫁した毛利元就血縁の宍戸隆家嫡女に注目し、毛利氏権力の河野氏権力への介入の過程を明らかにしており、嫡女がはじめ河野氏重臣来島通康に嫁し出産したことを推定し、来島通康死後、嫡女は河野氏当主通宣に再嫁し、その子牛福が次

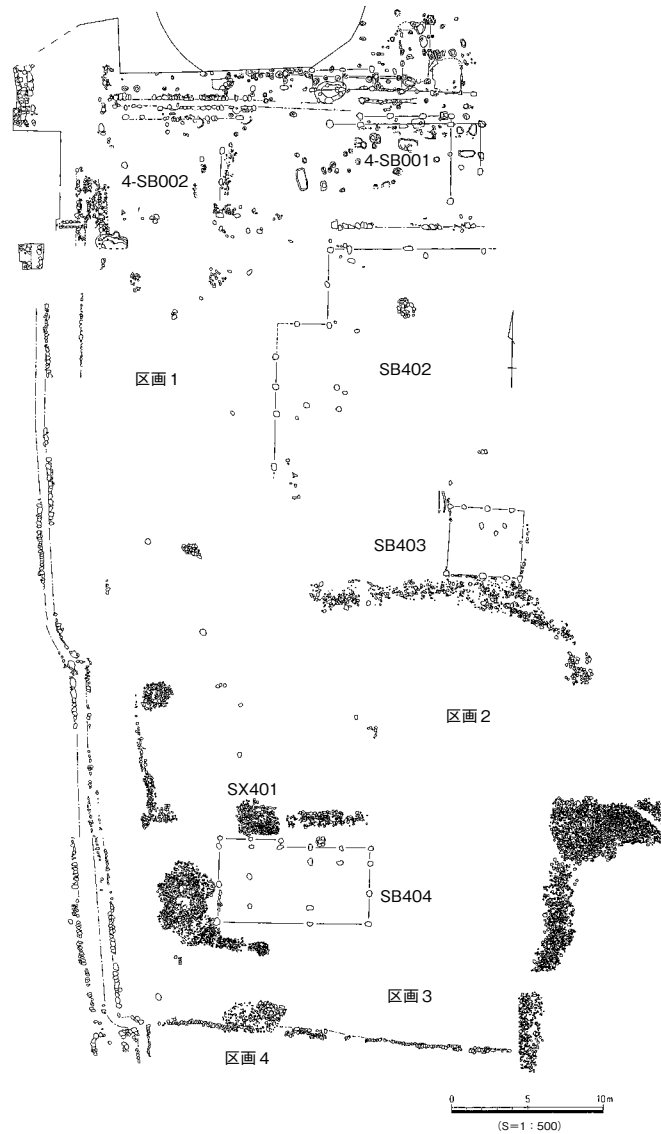
の当主通直として擁立されたことを指摘している。その中で、来島通康の湯築城内居住、あるいは当主の妻から母となった嫡女の居住と転居に触れ、嫡女の呼称である「ゆつき御仕出」「したし」から、その居住地が湯築城内の家臣団居住区北側ではないかと推定している。考古学的方法では居住者の推定は、文字資料などが出土しない限り不可能といわざるを得ないが、発掘調査による情報を再度精査することによって、何らかの手がかりを得ることは可能であろう。

そのような意味でここで注目しておきたいのは、3段階における家臣団居住区の特徴と、以前に述べたことの繰り返しとなるが、やはり3段階での庭園区・上級武士居住区のもつ意義についてである。

家臣団居住区は、2段階においては土塀で区画されていたものが、最終段階では集石や石列に置き換わり、かなり区画がルーズとなっていると考えられてきた。その問題については、今回遺構の段階を見直したことで、東側の区画については土塀による区画があったものととらえられ、2段階より厳密性に乏しいという面はわずかに解消された。しかし、改めて問題となるのは、西側の区画（第9図）であり、区画1の南にある段差を伴う集石や、区画3の北にある集石については、果たしてこれらを区画とすることが妥当であるのかどうかを含めて検討しなければならないと考えている。特に、区画3のSB404に接する形で存在するSX401については、存在する範囲がSB404に規定されているように見え、建物に付随する何らかの施設の可能性があり、再考を要する。そのように考えると、区画1から区画3の間には、区画1南の集石以外に区画を成立させる遺構が存在せず、区画1が唯一3段階で改修された区画であり、複数の建物群で構成され、ほかと差別化が図れることや、その隣に配置されているSB404が瓦葺であること、またその南の区画4が一段高く整地され、城内ではほかに例のない1間が約1mの建物が構築されていることなど、各々が均質とは言い難い様相となり、比較的均質な2段階の家臣団居住区とは、根本的に異なった性質の空間との見方が必要となってくる。つまり、3段階では、現在調査を終了している地区においてさえ、身分の高い武士と、比較的均質な家臣団というシンプルな二極構造では説明できず、西尾和美氏の研究成果による、河野氏末期の権力構造の複雑さがそこに何らかの形で投影されているとも推定できる。また、仮に家臣団居住区が変質しているのであれば、2段階から3段階への段階変遷の契機となった火災、あるいは時期についてももう少し踏み込んだ議論が出来る素材となり、これらについては今後検討していくべき課題であろう。

さらに、河野氏当主の館については、全面発掘が行われていない現時点では断言することができないが、庭園区・上級武士居住区が重要な候補であると考えている。この考えに立脚すれば、3段階の当該地区における土師質土器皿の大量消費の傾向の分析から、これらの遺構群を形成した時点の権力が、これまで以上に室町幕府を頂点とする武家儀礼を志向した性質を有していることは指摘でき、文献研究の成果とも合わせて、当主の特定につなげていける可能性がある。また、当該地区を河野氏館の候補と考えることは、占有面積、庭園の有無、土師質土器皿の大量廃棄の質と量、威信財としての陶磁器の質と量などひとつの基準を提供しており、今後の調査に向けて、当地区との比較によって評価していくことが可能となった点を認識しておくべきであろう。

今回は、段階の見直しと年代観、そしてその背景などを考察した。これまでと異なる視点で整



第9図 3段階の家臣団居住区西側の遺構
 ((財)愛媛県埋蔵文化財調査センター 1998・2000より転載、一部改変)

理したため、混乱を招く恐れもあり、ご批判も多いと思われるが、それについては忌憚なきご意見を賜りたい。今後も、限られた情報の中で推論に推論を重ねる状況に陥らないよう、常に原資料としてそこにある発掘調査のデータにフィードバックしつつ、湯築城の実態、そして河野氏権力の実態解明につなげていきたいと考えている。

(2004年1月4日)

参考文献

- 川岡 勉1998a 「戦国期における河野氏権力の構造と展開」『古代中世の社会と国家』精文堂
- 川岡 勉1998b 『(増補) 河野氏の歴史と道後湯築城』青葉図書
- 川岡 勉2003 「戦国期の西瀬戸内と河野氏権力」『伊豫史談』329号
- (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター1998 『湯築城跡』第1分冊
- (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター2000 『湯築城跡』第2分冊～第4分冊
- (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター2002 『湯築城跡』第5分冊
- 柴田圭子1998 「第6章 まとめと考察 第2節 遺物」『湯築城跡』第1分冊 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田圭子2000 「出土遺物からみた湯築城跡」『湯築城跡』第4分冊 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田圭子2001a 「16世紀中葉の輸入陶磁器の再評価—中国・四国地方の遺跡を中心に—」『中世土器研究論集—中世土器研究会20周年記念論集—』真陽社
- 柴田圭子2001b 「伊予の中世備前焼(2)—湯築城跡出土資料の再評価—」『紀要愛媛』第2号 (財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田圭子2003 「湯築城跡における庭園遺構について」『第8回中国・四国地区城館調査検討会資料集 城館遺跡から発掘された庭園』
- 西尾和美1999a 「戦国末期における道後湯築城と芸州—芸州家臣の逗留と使者の往来を中心に—」『四国中世史研究』第五号
- 西尾和美1999b 「戦国末期における毛利氏の婚姻政策と伊予」『日本史研究』四四五号
- 西尾和美2001 「穴戸隆家嫡女の生涯と道後湯築城」『四国中世史研究』第六号
- 湯築城資料館2002 「パネルディスカッションの発言要旨」『湯築城だより』2

編集後記

研究紀要『紀要愛媛』第4号が完成いたしました。

多田は香川県国分台遺跡群の資料を紹介しています。若干の数値データなどを盛り込みましたが、採集資料という制約もあり、今後の論証作業が望まれることでしょう。藤本は四国西部における伊吹町式土器を紹介しました。この土器型式の分布を知る上での基礎的な資料となります。山内は愛媛県内における埴輪の基礎研究を続けていますが、今回はこれまでの実績をふまえて古墳時代中期末～後期の資料を検討しています。岡田は松山平野南部の砥部川流域における、古墳群の類型化と階層性について論じました。柴田は湯築城における調査研究史をまとめ、遺構面形成過程の再検討を行い、文献史学による研究との接点を探っています。

今回の紀要では、愛媛県外の考古資料も取り上げてみました。県内の考古学的成果をより充実した密度の高いものとするには、周辺地域を視野に入れた考証も必要となるでしょう。

(多田)

(財) 愛媛県埋蔵文化財調査センター研究紀要

紀要愛媛

第4号

平成16(2004)年3月31日

編集・発行 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター
〒790-8570 愛媛県松山市三番町4丁目10番地1
TEL (089) 941-5645 FAX (089) 931-8302
印刷 有限会社 西村謄写堂
